

熊本県文化財調査報告第231集

大江遺跡群 II

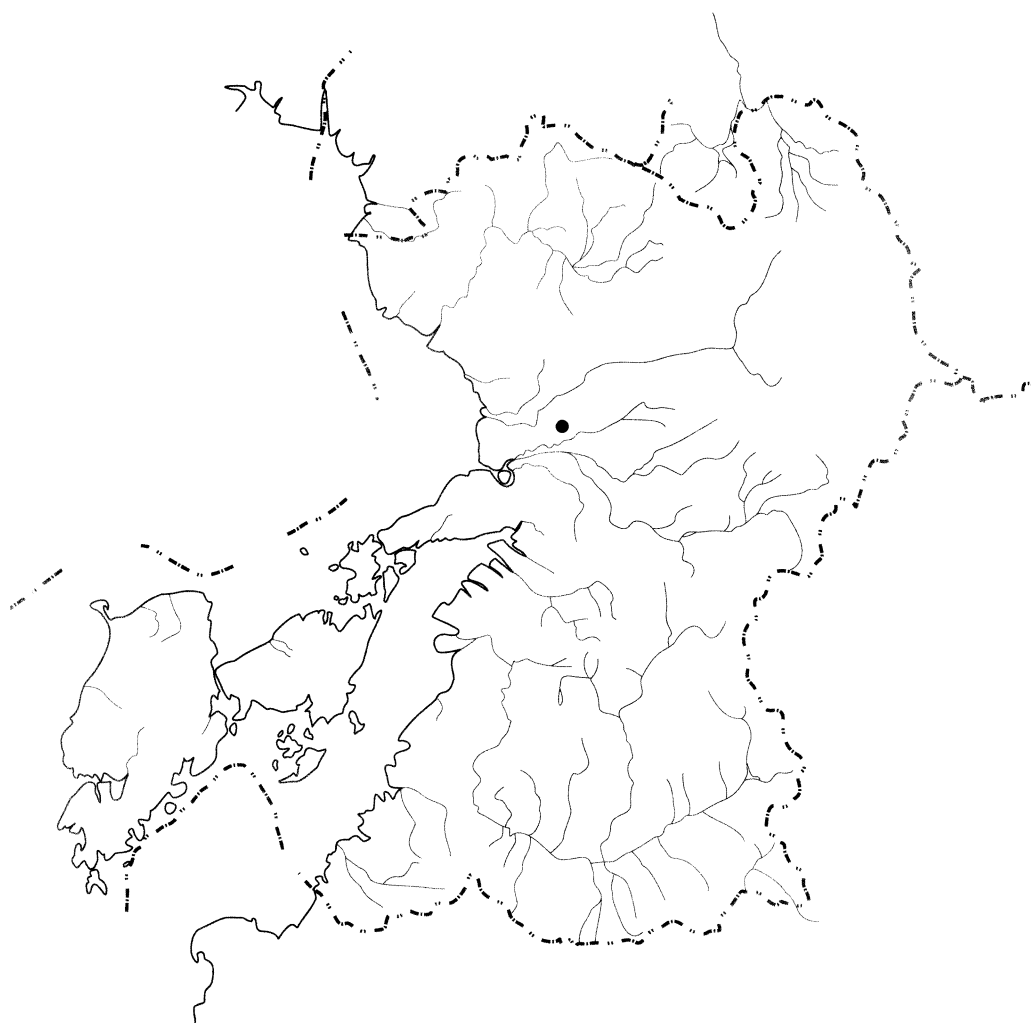
—国家公務員合同宿舎(学苑住宅)新築工事に伴う
大江遺跡群の埋蔵文化財発掘調査報告—

2006. 3

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告第231集

大江遺跡群Ⅱ



2006. 3

熊本県教育委員会

序 文

熊本県教育委員会では、国家公務員合同宿舎（学苑住宅）新築工事に伴い埋蔵文化財発掘調査を実施しました。

ここに報告する大江遺跡群は、熊本市大江に所在する遺跡で、平成16年度に発掘調査を実施し、平成17年度に整理報告書作成を行ったものです。

この発掘調査では、古代の住居跡や道路が多数確認され、古代の人々の生活を知るうえで貴重な資料となりました。

本報告書が、埋蔵文化財とその保護に対する理解と認識を深め、学校教育や生涯学習の場で活用していただく一助となれば幸いです。

なお、発掘調査に際しましては、九州財務局、熊本市教育委員会をはじめ、多くの方々にご協力いただきました。心より感謝申し上げます。

平成18年3月31日

熊本県教育長 柿 塚 純 男

例 言

- 1 本書は、熊本県教育委員会が国家公務員合同宿舎（学苑住宅）新築工事に伴い、平成16年度に熊本市大江において記録保存を目的として発掘調査を実施した、大江遺跡群の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、九州財務局からの依頼により、熊本県教育庁文化課が平成17年1月から実施し、松村洋史・木村龍生・福永雅美・宮崎拓が担当した。
- 3 日本測地系の国土座標軸による測量基準杭の設定は、(有)坂井設計コンサルタントに委託した。
- 4 遺構実測及び遺跡地形測量、遺構実測図トレース業務の一部は、(有)九州文化財リサーチに委託した。
- 5 調査区及び周辺地形の空中写真撮影は、九州航空(株)に委託した。
- 6 発掘資料の整理は、熊本県文化財資料室で行った。
- 7 遺物の実測は、橋口冬美・戸田英佑・手柴智晴・松本裕子・佐藤淳子・平川恵里子・水本美恵子・亀山美佐子が行った。
- 8 図版及び表作成は、松村・橋口・戸田・手柴・河原京子・高野信子・高野史郎が行った。
- 9 遺物の写真撮影は、村田百合子・手嶋裕子が行った。
- 10 炭化物等の自然科学分析は、(株)古環境研究所に委託した。
- 11 出土人骨は、下関市立土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアム 松下孝幸館長に分析・原稿を依頼した。
- 12 今回発掘した調査区では、旧陸軍施設の遺構が検出された。そのことに関連して、熊本県教育庁文化課参事 山下義満氏から寄稿していただき、付論として収録した。
- 13 本書の執筆は、第Ⅲ章第3節を木村、それ以外を松村が行った。
- 14 本書の編集は、熊本県教育委員会が行い、松村が担当した。
- 15 出土遺物及び調査に関する記録等は、一括して熊本県教育委員会が保管している。

凡 例

- 1 現地での実測図は以下の縮尺で作成した。
竈（1/10）、遺構平面図・土層断面図（1/20）、遺構配置図（1/100）
- 2 遺構については通し番号を与え、遺構を表記したアルファベットを番号の前に付して記した。アルファベットはそれぞれ、竪穴住居跡（SB）、溝（SD）、土坑（SK）、その他・不明遺構（SX）とした。またピットについては、別途番号を与え、Pで表記した。また土色の違いによりA(黒褐色シルト)、B(黒褐色シルト、焼土・炭化物混多)、C(暗褐色シルト)、N(黒褐色シルト鉄分沈着、1基のみ)と分類した。
- 3 本書の作成の際には以下の縮尺とした。
竈（1/40）、遺構平面図・土層断面図（1/40）、遺構配置図（1/250）、土器・瓦（1/3）、石器（1/1）、基本土層（1/50）
- 4 遺構の方位は、各々の遺構での任意方向である。
- 5 硬化面は、網掛け20%で表示した。
- 6 竈の石は、網掛け40%で表示した。
- 7 土器の実測図において、須恵器の断面は、黒塗りで表示した。
- 8 報告書抄録に記載した緯度・経度の数値は、国土地理院ホームページの25,000分の1の地図で遺跡の場所を検索して得たものである。したがって、正確なものではない。
- 9 土色は、『新版標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修に拠る。

本文目次

序 文
例 言
凡 例

第I章 調査の概要

第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の方法と経過	3

第II章 遺跡の概要

第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	6

第III章 調査の成果

第1節 基本土層	9
第2節 遺構	16
1 竪穴住居跡	16
2 溝、道路	37
3 土坑	50
4 その他	55
第3節 遺物	57
1 土器	57
2 その他	66
第4節 熊本県大江遺跡群（学苑住宅）における自然科学分析	68
I 大江遺跡群（学苑住宅）における放射性炭素年代測定	68
II 大江遺跡群（学苑住宅）における種実同定	70
III 大江遺跡群（学苑住宅）における樹種同定	73
IV 大江遺跡群（学苑住宅）における蛍光X線分析	77
第5節 熊本市大江（学苑）遺跡群出土の平安時代火葬骨	80

第IV章 総括

写真図版	87
付 論	107
報告書抄録	118

挿 図 目 次

第1図	調査区グリッド配置図	5
第2図	周辺遺跡地図(S=1/25000)	7
第3図	調査区基本土層(S=1/50)	10
第4図	遺構配置図(S=1/250)	11、12
第5図	地形測量図(S=1/250)	13、14
第6図	SB-3、SB-7、SB-10 遺構実測図	17
第7図	SB-8 遺構実測図	18
第8図	SB-9、SB-11 遺構実測図	19
第9図	SB-12 遺構実測図	21
第10図	SB-13、SB-22遺構実測図	22
第11図	SB-13完掘実測図	23
第12図	SB-16遺構実測図	24
第13図	SB-18、SB-19遺構実測図	25
第14図	SB-27遺構実測図	26
第15図	SB-21遺構実測図	27
第16図	SB-28、SB-29遺構実測図	28
第17図	SB-30遺物出土状況図	29
第18図	SB-30遺構実測図	30
第19図	SB-32遺構実測図	32
第20図	SB-32完掘実測図	33
第21図	SB-36遺構実測図	34
第22図	SB-38遺構実測図	35
第23図	SB-39内埋設土器実測図	35
第24図	SB-39遺構実測図	36
第25図	SD-1土層断面図	38
第26図	SD-1遺構実測図	39、40
第27図	SX-2遺構実測図	41
第28図	SX-2完掘実測図	42
第29図	SX-6遺構実測図及びSX-6、17、23、40土層断面図	43、44
第30図	SX-17遺構実測図	45
第31図	SX-23遺構実測図	46
第32図	SX-40遺構実測図	47
第33図	SD-34遺構実測図	48

第34図	SD-37遺構実測図	50
第35図	SK-4、SK-33、SK-41遺構実測図	51
第36図	SK-20、SK-31遺構実測図	52
第37図	SK-24、SK-25、SK-26遺構実測図	53
第38図	SK-35、SK-42遺構実測図	54
第39図	SX-5遺構及びび完掘実測図	56
第40図	SX-15遺構実測図	56
第41図	出土土器実測図(1)	57
第42図	出土土器実測図(2)	58
第43図	出土土器実測図(3)	59
第44図	出土土器実測図(4)	61
第45図	出土土器実測図(5)	62
第46図	出土甌把手実測図(1)	64
第47図	出土甌把手実測図(2)	65
第48図	出土瓦実測図	66
第49図	出土石器実測図	67

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	8
第2表	遺構一覧表	15
第3表	土器観察表	63
第4表	甌把手観察表	65
第5表	瓦観察表	66
第6表	石器観察表	67

写真図版目次

図版 1	調査区遠景	89	図版34	SB-39 甕出土状況	94
図版 2	調査区全景	89	図版35	SD-1 (南から)	95
図版 3	調査区東側住居群	90	図版36	SX-2 (東から)	95
図版 4	官道	90	図版37	SX-6 (南から)	95
図版 5	火葬骨の入っていた甕(遺物 NO. 32)	91	図版38	SX-17(南から)	95
図版 6	墨書土器(遺物 NO. 51)	91	図版39	SX-23(南から)	95
図版 7	緑釉陶器片(遺物 NO. 67)	91	図版40	SX-40(東から)	95
図版 8	石製紡錘車(石器 NO. 1)	91	図版41	官道検出状況(北から)	95
図版 9	墨書土器(遺物 NO. 49)	91	図版42	SD-34(東から)	95
図版10	丹塗りの壺(遺物 NO. 27)	91	図版43	SD-37(西から)	96
図版11	SB-3 (北から)	92	図版44	SK-4 (北から)	96
図版12	SB-3 遺物出土状況	92	図版45	SK-20(南から)	96
図版13	SB-7、10(東から)	92	図版46	SK-24(東から)	96
図版14	SB-8 (東から)	92	図版47	SK-25(東から)	96
図版15	SB-9 (南から)	92	図版48	SK-26(北から)	96
図版16	SB-11(西から)	92	図版49	SK-31(北から)	96
図版17	SB-12(北から)	92	図版50	SK-33(北から)	96
図版18	SB-12 遺物出土状況	92	図版51	SK-35(南から)	97
図版19	SB-13、22(北から)	93	図版52	SK-41(東から)	97
図版20	SB-16(西から)	93	図版53	SK-42(南から)	97
図版21	SB-18、19、27(東から)	93	図版54	SX-5 (北から)	97
図版22	SB-21(南から)	93	図版55	SX-5 遺物出土状況	97
図版23	SB-28(北から)	93	図版56	SX-15(南から)	97
図版24	SB-29(北から)	93	図版57	レンガ壁基礎(西から)	97
図版25	SB-30(南から)	93	図版58	コンクリート製排水溝(東から)	97
図版26	SB-30 柱穴内遺物出土状況 (遺物 NO. 27)	93	図版59	出土土器(1)	98
図版27	SB-30 竈	94	図版60	出土土器(2)	99
図版28	SB-32(南から)	94	図版61	出土土器(3)	100
図版29	SB-36(北から)	94	図版62	出土土器(4)	101
図版30	SB-36 竈	94	図版63	出土土器(5)	102
図版31	SB-36 遺物出土状況	94	図版64	出土土器(6)	103
図版32	SB-38(南から)	94	図版65	出土土器・石器	104
図版33	SB-39(西から)	94	図版66	出土甌把手	105
			図版67	出土瓦・戦争遺物	106

第 I 章 調査の概要

第 1 節 調査の経緯

熊本県教育庁文化課は、平成16年1月7日付けで九州財務局から埋蔵文化財の予備調査依頼を受け、同年1月15、16、19日に埋蔵文化財の確認調査を実施した。その結果、埋蔵文化財の存在を確認したため、九州財務局より文化財保護法第57条第3項の規定に基づく発掘調査の通知（平成16年4月13日付け九財統国②第2号 平成16年5月27日付教文第547号）を受けた。その後、発掘調査の期日等の協議を進め、九州財務局より発掘調査の依頼文（平成16年10月1日付け九財統国②58号）と承諾書（平成16年10月8日付け九財統国②第62号）を受け、文化財保護法第58条第2項の規定に基づき、発掘調査実施の通知（平成16年12月16日付教文第2609号）を行った。そして、平成17年1月より、大江遺跡群（学苑住宅）の発掘調査を開始し、同年3月終了した。遺物整理・報告書作成については、平成17年度に行った。

調査の組織

●確認調査（平成15年度）

調査責任者 成瀬烈大（文化課長）

調査総括 島津義昭（教育審議員兼課長補佐）
高木正文（主幹兼文化財調査第1係長）

調査事務局 吉田 恵（課長補佐）、欄杭正義（主幹兼総務係長）、天野寿久（主任主事）、
杉村輝彦（主事）

調査担当 岡本真也（参事）

●本調査（平成16年度）

調査責任者 島津義昭（文化課長）

調査総括 倉岡 博（課長補佐）、高木正文（課長補佐兼文化財調査第1係長）

調査事務局 吉田 恵（課長補佐）、欄杭正義（主幹兼総務係長）、天野寿久（主任主事）
小谷仁志（主任主事）

調査担当 松村洋史（文化財保護主事） 木村龍生（学芸員）
福永雅美（嘱託職員） 宮崎 拓（嘱託職員）

●整理・報告書作成（平成17年度）

整理責任者 梶野英二（文化課長）

整理総括 倉岡 博（課長補佐）、高木正文（課長補佐兼文化財調査第1係長）

整理事務局 吉田 恵（課長補佐）、四元正明（主幹兼総務係長）、塚原健一（参事）、
小谷仁志（主任主事）

整理担当 松村洋史（文化財保護主事） 橋口冬美（嘱託職員）

●調査・整理指導及び協力者（敬称略）

網田龍生、美濃口雅朗、師富国博、杉井 健、森田正則、高木正文、西住欣一郎、野田拓治、
坂田和弘、岡本真也、廣田静学、水野哲郎、山下義満、馬場正弘、宮崎敬士、土野雄貴、
河原京子、戸田英佑、手柴智晴、高野信子

九州財務局

発掘作業員 石田恭代、伊藤千代子、稲本佳子、江頭俊介、加藤利勝、栗崎 強、坂口勝年、
坂口早苗、西 信二、畑中儀介、水本美恵子、山口霽満、松田實夫、川上悦子、
亀山美佐子、後藤芳治

浦山太一、西田良輔、白石智弘、立野隆一（以上4名九州東海大学学生）

松ヶ野恵、末永浩平（以上2名熊本大学学生）

整理作業員 今福英子、上田律子、大石啓子、大澤由美、緒方智世、原田春子（以上1次整理）

松本裕子、佐藤淳子、平川恵里子（以上2次整理）

第2節 調査の方法と経過

今回、発掘調査を行った国家公務員合同宿舎（学苑住宅）新築工事の場所は、「大江遺跡群」の包蔵地内の北東部に位置し、遺跡群の中でも地形的に高い位置にあたる。調査は、敷地内の建物建設部分にあたる約1,220㎡について行った。

調査区は、南北約15m、東西約80mの東西方向に長い長方形である。調査は、まず重機による表土除去を行った。その後、(有)坂井コンサルタントに委託し、日本測地系の国土座標軸を使用する区画設定をした。区画はより精度を増すため5m×5mで設定した。また、北から南をAからH、西から東を1から18とし、その組み合わせをもって各区画の名称とした。(第1図参照)

発掘作業員の作業として、はじめに調査区東側の清掃を行った。その理由としては、表土除去時、西側から東側に進むにつれて遺物の出土量が多く、遺構密度が高いと予想されたためである。清掃後、遺構検出作業を行った。

遺構は、土層断面図作成用のベルトを残しながら掘り下げていった。住居跡や道路遺構などについては、まず住居使用時の平面図を作成し、その後、硬化面をはがしながら、掘方の平面図を作成した。また、住居の切り合いが甚だしいため、これらの作業と並行しながらそれぞれの住居跡の柱穴の確認作業を進めた。遺構図面の作成については調査期間の都合上、そのほとんどを(有)九州文化財リサーチに業務委託したが、各調査員が補足部分等は随時書き足しを行い、より精度の高いものとなるように努めた。遺構内の重要な遺物等は、遺構ごとに番号を付し取り上げた。

さらに、調査区全体の地形情報や遺構配置等を知るため、地形測量を(有)九州文化財リサーチに委託した。また、空中写真撮影を九州航空(株)に委託した。

発掘調査は、平成16年12月後半に表土除去を終了させ、平成17年1月7日より本格的な調査を開始した。そして、平成17年3月25日に無事に調査を終了した。その間の経過は、次のとおりである。

【平成17年1月】

- 7日 調査区東側より表面清掃を行う。攪乱検出後、攪乱掘削を行う。
- 11日 調査区に基準杭とメッシュ杭を設置（～13日まで）。旧陸軍施設の一部と思われるコンクリート製排水溝の遺構掘削をする。
- 12日 コンクリート製排水溝の清掃後に撮影を行う。
- 13日 コンクリート製排水溝の遺構実測を行う。
- 18日 調査区東側から包含層（2層）の掘削に入る。コンクリート製排水溝の撤去。
- 19日 調査区東側の溝状遺構（SD-1）の掘削に入る。
- 21日 SX-2の検出。
- 24日 3a層上面での遺構検出が難しいため、土色がわかりやすいよう3a層を一部掘り下げる。SX-2の検出状況撮影と平面図実測を作成。
- 26日 SX-2の埋土を完掘、完掘写真撮影を行い、掘り方平面図を作成。
- 27日 包含層より紡錘車出土。
- 28日 調査区東側半分の包含層掘削が終了。

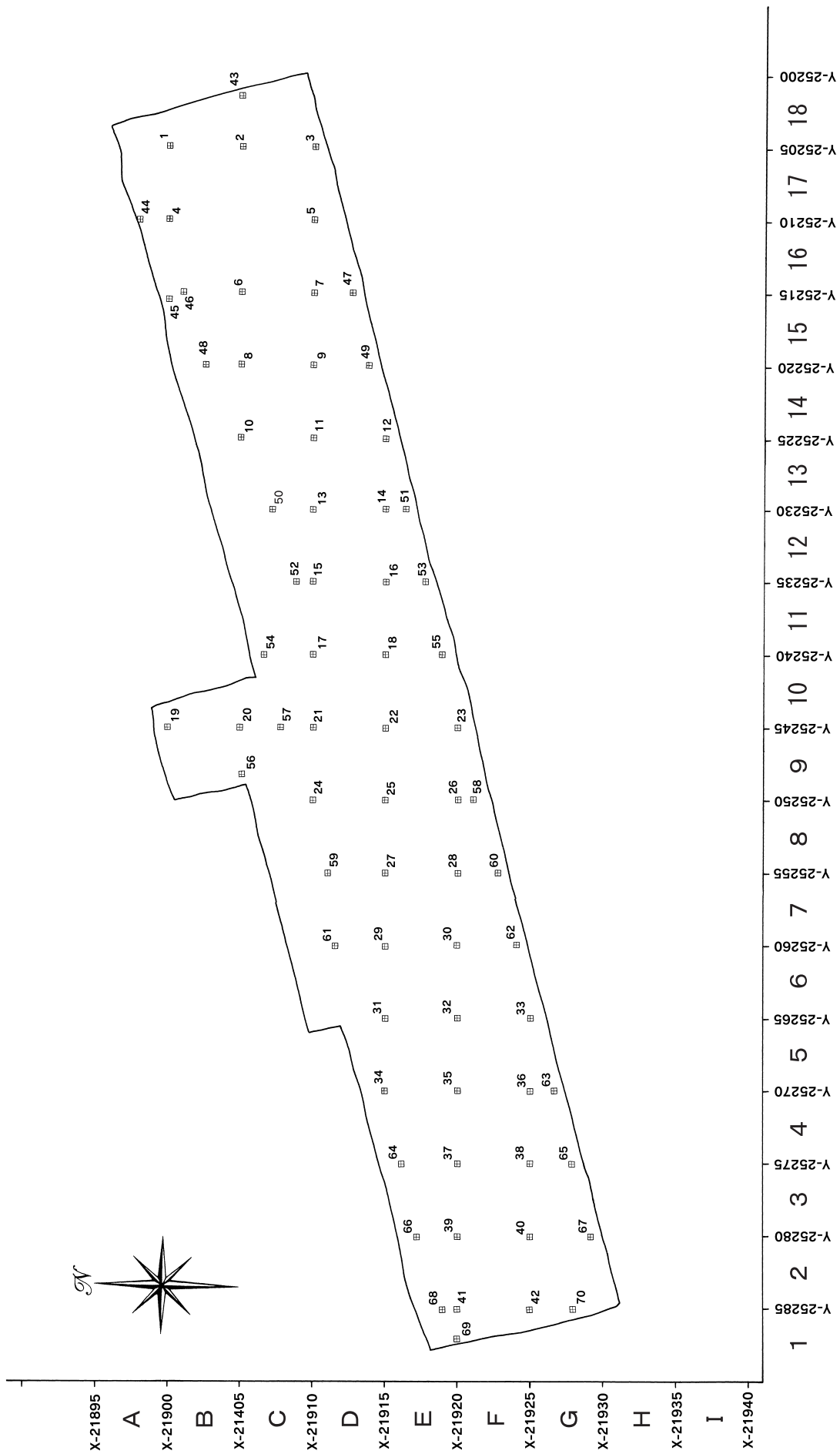
31日 調査区東側半分の清掃を行う。遺構検出を開始する。

【平成17年2月】

- 3日 作業員を増員し、調査区西側も東側と並行して包含層掘削作業に入る。ナイスストライ（職場体験学習）で文化財資料室に学習に来ていた熊本市内の中学生が発掘現場の見学に訪れる。
- 8日 SB-3の掘削開始。
- 9日 SD-1の硬化面検出。道路状遺構と考える。SB-3の掘削が終了。SK-4の掘削開始。
- 10日 SD-1の硬化面検出撮影と遺構実測を行う。SK-4の硬化面部分をSX-5とする。
- 14日 SD-1の掘り方まで完掘。清掃、撮影後、平面図実測開始。SB-3、SX-5の実測開始。(有)九州文化財リサーチが遺構実測業務を始める。SB-6の掘削開始。
- 16日 SB-7、8、9の掘削開始。
- 17日 SB-7について、掘削後に2軒の住居の切り合っているということがわかり、もう一方の住居跡にSB-10と付す。
- 21日 SB-6について、当初住居跡として考えていたが、掘り進むうちに硬化面が南北に走って検出されたことにより、道路状遺構として検討する。
- 22日 調査区北側で検出された旧陸軍施設のレンガ壁基礎と思われる遺構について、撮影と平面図実測を行う。SB-11、12の掘削開始。SB-6をSX-6に変更。その後、その下から検出された2面の道路状遺構をSX-17、SX-23と付す。
- 23日 SB-13、SK-14、SX-15の掘削開始。
- 24日 作業員数が増えたため、休憩用プレハブを増設。
- 25日 SB-16、SX-17、SB-18、SB-19の掘削開始。
- 28日 SB-21、22の掘削開始。

【平成17年3月】

- 1日 SX-23の硬化面検出。SX-23、SK-24、25、26の掘削開始。元旧陸軍歩兵第13連隊所属の森田氏が来訪、助言を得る。
- 2日 SB-27、28、29、30の掘削開始。
- 4日 調査区東側半分の住居跡群完掘。SK-31、SB-32の掘削開始。
- 7日 SK-33、SD-34掘削開始。
- 8日 基本土層の記録として試掘トレンチ内の実測を行う。SK-35掘削。
- 9日 SB-36、SD-37、SB-38、39、SX-40の掘削開始。
- 10日 SK-41掘削開始。熊本大学杉井助教授来訪、指導・助言を得る。
- 14日 住居跡群、土坑、ピット等完掘。調査区全体清掃。
- 15日 調査区の空中写真撮影（大型ラジコンヘリ使用）。
- 16日 SB-7、16、21、22の掘方掘削を行う。SK-42の掘削を行う。
- 18日 SB-8の掘方掘削を行う。委託していた遺構実測終了。
- 22日 竈内埋土の水洗いを行う（～24日まで）。
- 23日 委託していた地形測量終了。
- 24日 SB-32の掘り方平面図を作成。熊本市文化財課の網田氏来訪、指導・助言を得る。
- 25日 SB-13の掘り方平面図を作成。機材撤収。調査終了。
熊本市文化財課の美濃口・師富両氏来訪、指導・助言を得る。



第1図 調査区グリッド配置図

第Ⅱ章 遺跡の概要

第1節 地理的環境

大江遺跡群は、熊本市の中心部を流れる白川の左岸に位置する。その範囲は、東西約5km、南北約3kmにも及ぶ広大な遺跡群である。今回、調査を行った学苑住宅は、大江遺跡群と大江白川遺跡が接する産業道路付近にあり、大江遺跡群の北東部にあたる。付近は、白川の幾重にも渡る氾濫によって形成された託麻砂礫層からなる河岸段丘面になっている。また、調査地点は標高約20mと遺跡群の中では高いところに位置している。

第2節 歴史的環境

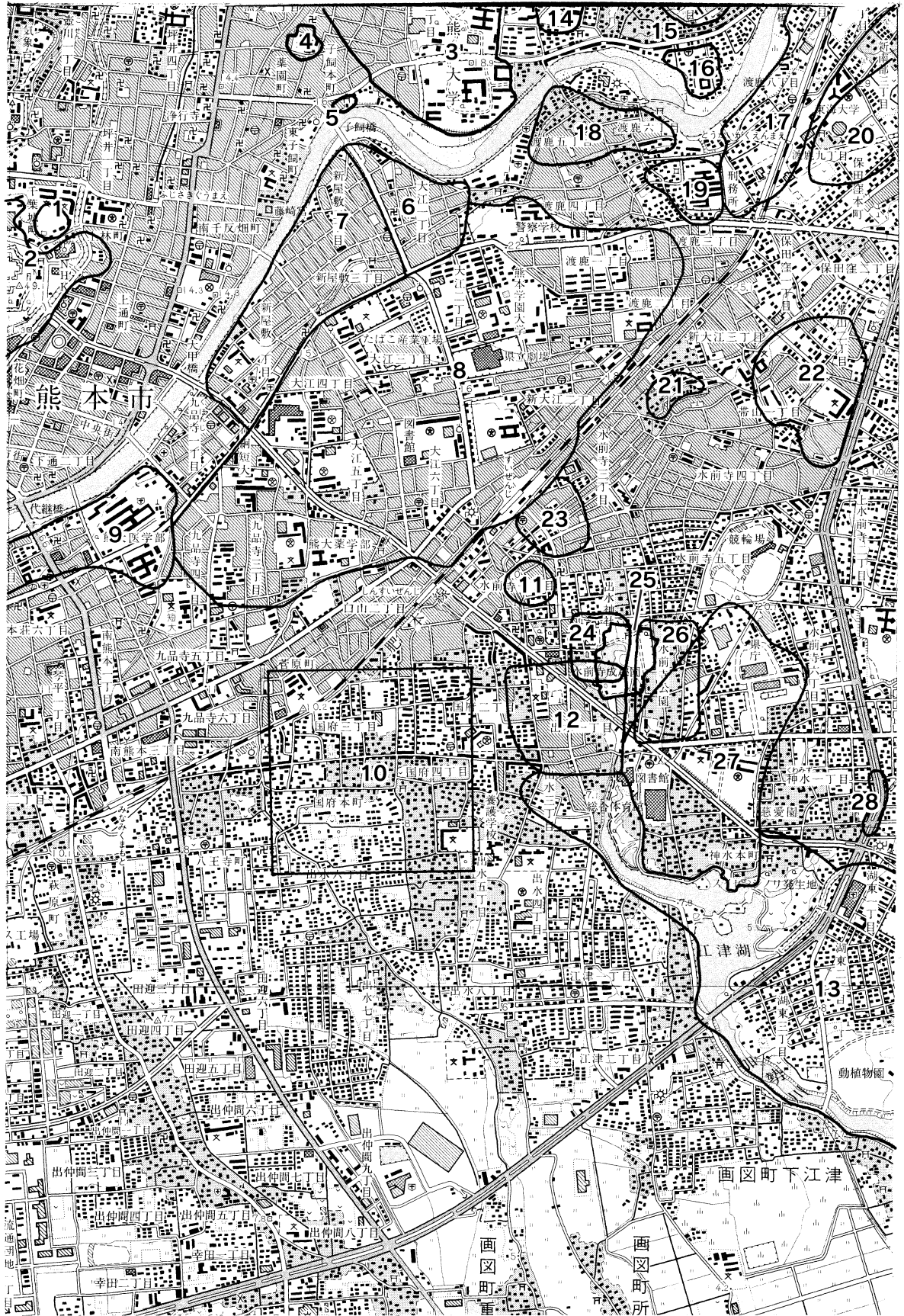
大江遺跡群及びその周辺遺跡の歴史的環境について述べたい。

大江遺跡群は、熊本市内で最大の遺跡範囲を誇る遺跡であり、過去に熊本県や熊本市、大学等などによって多くの調査が行われている。これらの調査の結果から、この遺跡群及び周辺遺跡は奈良・平安期にもっとも隆盛したことが判明している。今回の発掘調査で検出した竪穴住居跡も、それらとほぼ同時期のものであった。この時期は、近くに肥後の出水国府や国分寺・国分尼寺がおかれ、遺跡群内に古代西海道が整備された時期でもある。大江遺跡群及びその周辺遺跡は、一連のものと考えられるため、この地域に大規模な集落が形成されていたと考えられる。

しかし、9世紀を境に大江遺跡群内の遺跡の規模は縮小し、この地域が水田地帯となったことが、これまでに行われた発掘調査などから判明している。これは国府が飽田国府（現在の二本木地域）へと移ったことが大きく関係しており、人や集落などもそちらに移動していったためと思われる。大江遺跡群及びその周辺遺跡は、古代肥後の中枢都市機能としての役目を徐々に失っていったのであろう。

今回調査を行ったのは、この大江遺跡群の最北端ともいべきところである。本調査地周辺では、かつて熊本県教育委員会や熊本市教育委員会が発掘調査を実施し、古代の官道や住居跡などを確認している。また、本遺跡の真南に位置する熊本学園大学並びに学園大学附属高校の敷地内でも、学園大学による発掘調査によって同時代の遺構が数多く確認されているということである。そのため、本遺跡を考える際は、周辺遺跡の状況を踏まえながら検討していくことが必要である。

また、本遺跡周辺は、かつて旧陸軍歩兵第13連隊の駐屯地であったことがわかっている。そのため、今回の発掘調査では、その当時の建物の基礎や戦争関連の遺物も出土している。これらは近代遺産として、ある意味重要なものである。



第2図 周辺遺跡地図 (S = 1/25,000)

第 1 表 周辺遺跡一覧表

掲載NO	県NO	市NO	遺跡名	所在地	時代	種別	旧遺跡名	備考
1	245	8-52	藤園中学校校庭	千葉城町	弥生～平安	包蔵地		甕棺群あり
2	246	8-53	熊本城跡遺跡群	古城、古京、千葉城町	古墳～近世	包蔵地	古城横穴群・千葉城横穴群・磐根橋際横穴群・茶臼山廃寺跡・藤崎宮跡・段山遺跡・千葉城跡・千葉城箱式石棺・古城跡・古城洋学校・医学学校・新町一丁目御門跡	
3	278	8-88	黒髪町遺跡群	黒髪町坪井	縄文～中世	包蔵地	黒髪町遺跡(済々餐高校敷地)・九州女学院遺跡・坪井古屋敷出土の甕棺	一帯に甕棺墓群
4		8-106	七軒町遺跡	七軒町	縄文～中世	包蔵地		
5	280	8-90	子飼	子飼町	縄文～中世	包蔵地		
6	281	8-91	大江白川	大江1丁目	縄文～平安	包蔵地	旧往生院跡・善行寺の板碑・放牛地藏	甕棺
7	282	8-92	新屋敷	新屋敷町	弥生～中世	包蔵地		弥生環壕、弥生前期土器、輸入陶磁器
8	283	8-93	大江遺跡群	大江3丁目	縄文～明治	包蔵地	大江遺跡・大江青葉遺跡・大江東原遺跡・白川中学校校庭遺跡・渡鹿旧電電波高校遺跡・熊高敷地遺跡・熊高通り遺跡・杉ノ本遺跡・渡鹿廃寺託麻郡家推定地・熊本英学校跡・建設会館遺跡他	
9	285	8-95	本庄(熊大病院敷地)	本庄2丁目	古墳～平安	包蔵地		熊大埋文調査室調査
10	290	8-100	出水国府跡	九品寺、国府、国府本町	弥生～中世	包蔵地		
11	291	9-65	西水前寺町	水前寺1丁目	縄文～中世	包蔵地	縄文阿高系	
12	292	9-72	国分寺跡	出水1丁目	縄文～中世	包蔵地	七重塔心礎石・宮園遺跡・労働金庫遺跡	県・市による多数の調査あり
13	293	9-75	江津湖遺跡群	神水町、画図町ほか	縄文～中世	包蔵地	上江津大曲遺跡・堀内邸石造遺物・神水若宮・神祇寺跡・弁天石古屋敷遺跡	
14	306	9-18	桜山中学校校庭	黒髪町5丁目	古墳～平安	包蔵地	下立田一里木	
15	308	9-20	宇留毛A	黒髪町6丁目	縄文	包蔵地		
16	309	9-21	宇留毛B	黒髪町6丁目	縄文～平安	包蔵地		
17	332	9-48	新南部遺跡群	新南部町	旧石器～平安	包蔵地	新南部A～D遺跡・北久根山遺跡・西谷遺跡・小関原遺跡・小関小松山甕棺遺跡・新南部三石遺跡	県北バイパス調査、市マンション調査、田辺昭三調査などあり
18	335	9-51	渡鹿遺跡群	渡鹿5丁目	縄文・弥生	包蔵地	渡鹿貝塚・北原甕棺遺跡	渡鹿貝塚阿高・鐘ヶ崎式、北原須玖式甕棺、板碑釈迦像天文16年銘
19	337	9-53	辻	渡鹿7丁目	縄文～平安	包蔵地		縄文後晩期、へら描き土器・墨書土器
20	338	9-54	新南部西原	新南部町	縄文～平安	集落	保田窪地藏碑	
21	339	9-56	南平上	新大江3丁目南平上	奈良・平安	包蔵地		
22	340	9-57	帶山遺跡群	帶山1丁目	縄文～平安	包蔵地	帶山遺跡・保田窪遺跡	布目瓦、曾畑、阿高、竹崎
23	347	9-64	北水前寺	水前寺3丁目	奈良・平安	包蔵地		
24	348	9-66	水前寺廃寺跡	水前寺公園	奈良・平安	包蔵地		
25	350	9-68	水前寺成趣園	水前寺公園	江戸	庭園		国指定史跡及び名勝、細川忠利、山水式
26	352	9-70	陳山廃寺跡	水前寺公園	奈良・平安	寺社		国分尼寺推定地
27	355	9-74	神水	神水本町・出水2丁目	縄文～平安	包蔵地		県・市調査、報告書あり
28		9-89	健軍京塚下遺跡	健軍	奈良・平安	包蔵地		

第三章 調査の成果

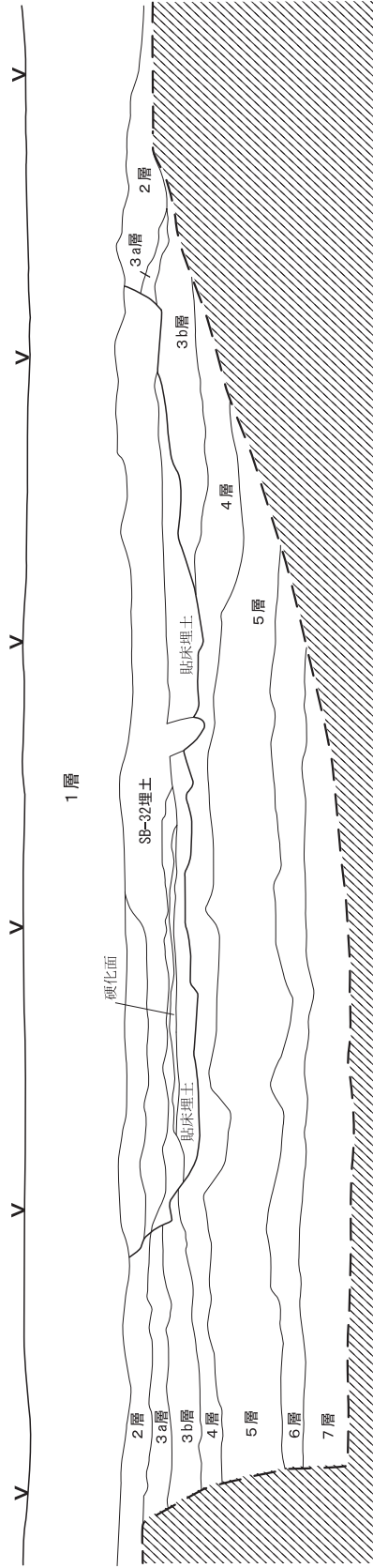
第1節 基本土層

本遺跡の基本土層は、第3図に示したとおり8層に分層できる。上層より、第1層から第7層とし、第3層を土のしまりの違いなどから第3a層と第3b層に分けた。この基本土層は、調査区中央部付近攪乱の南壁の土層状況を検討して作成したものである。調査区内の全域に対して、この基本土層は適用できる。

また、熊本市教育委員会が調査を行った周辺遺跡の土層堆積状況ともほぼ一致している。

- 第1層 表土。近現代の整地層及び旧建物攪乱層。コンクリートやレンガが大量に混じる。
- 第2層 黒褐色シルト (Hue10YR 3/1)。ややしまる。粘性中。下部に微細な火山ガラスを含む。古代の遺物包含層。箇所によっては硬くしまるが、建造物や整地の影響と考えられる。
- 第3 a層 暗褐色シルト (Hue10YR 3/3)。ややしまる。粘性中。この層の上面が今回の調査の遺構検出面となる。縄文時代後晩期の層に相当。ここでは無遺物層。
- 第3 b層 暗褐色シルト (Hue10YR 3/3)。硬くしまる。粘性中。3a層より硬くしまる。縄文時代早期の層に相当。無遺物層。
- 第4層 暗褐色シルト (Hue10YR 3/3)。硬くしまる。粘性大。微細な火山ガラス、黒褐色シルトのブロック混じる。ソフトローム層に相当。
- 第5層 黒褐色シルト (Hue10YR 2/2)。硬くしまる。粘性小。中位から下位に微細な白色粒混じる (AT か?)。乾裂著しく、削ると崩れやすい。いわゆるニガ層。
- 第6層 にぶい黄褐色粘土 (Hue10YR 4/3)。第7層の漸移層。硬くしまる。粘性中。下部にいくにつれて色調は明るくなる。乾裂多い。暗色帯に相当。
- 第7層 明黄褐色粘土 (Hue10YR 6/8)。ローム層。硬くしまる。粘性大。風化した凝灰岩の小礫が混じる。

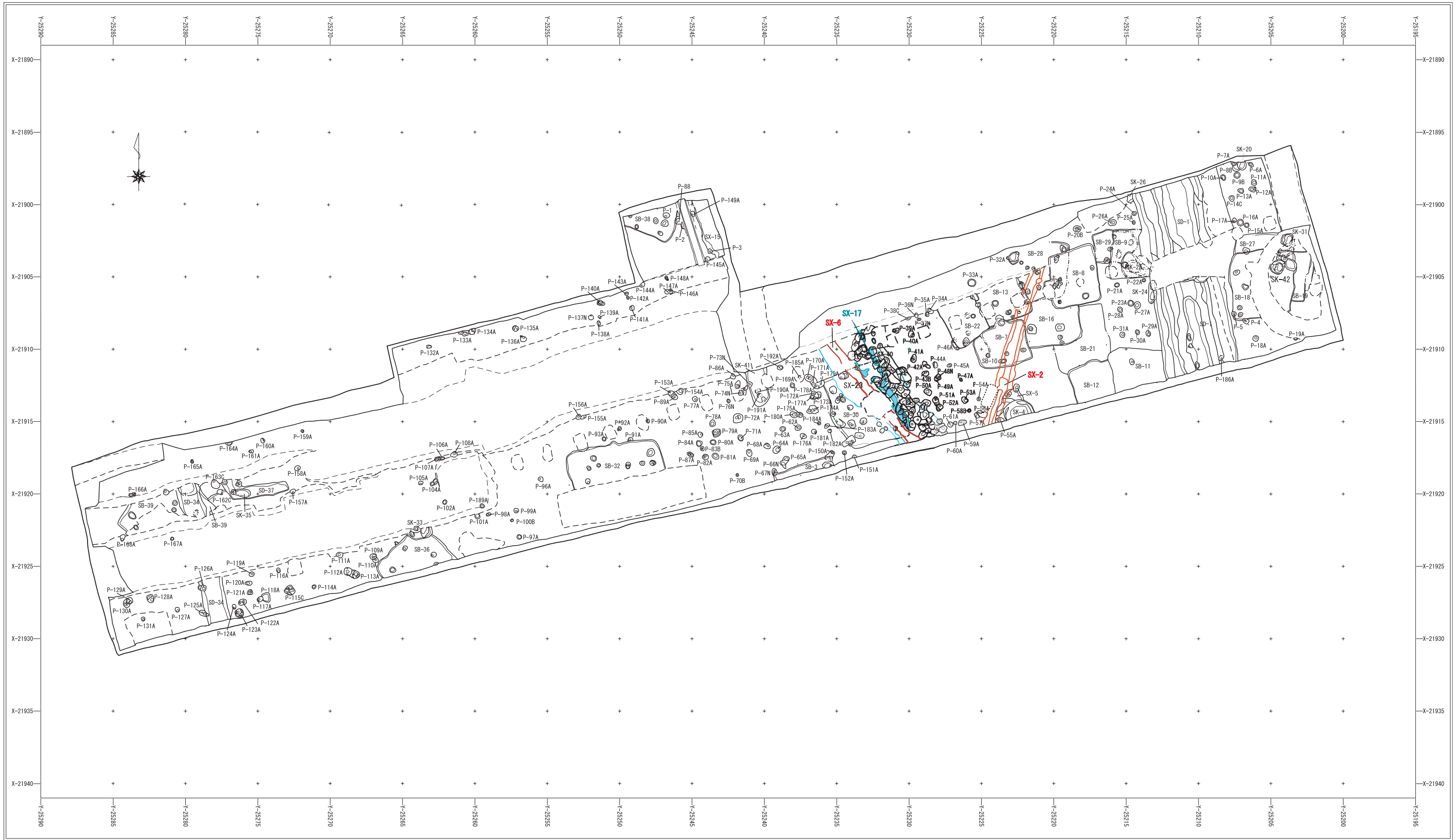
L=20,000m



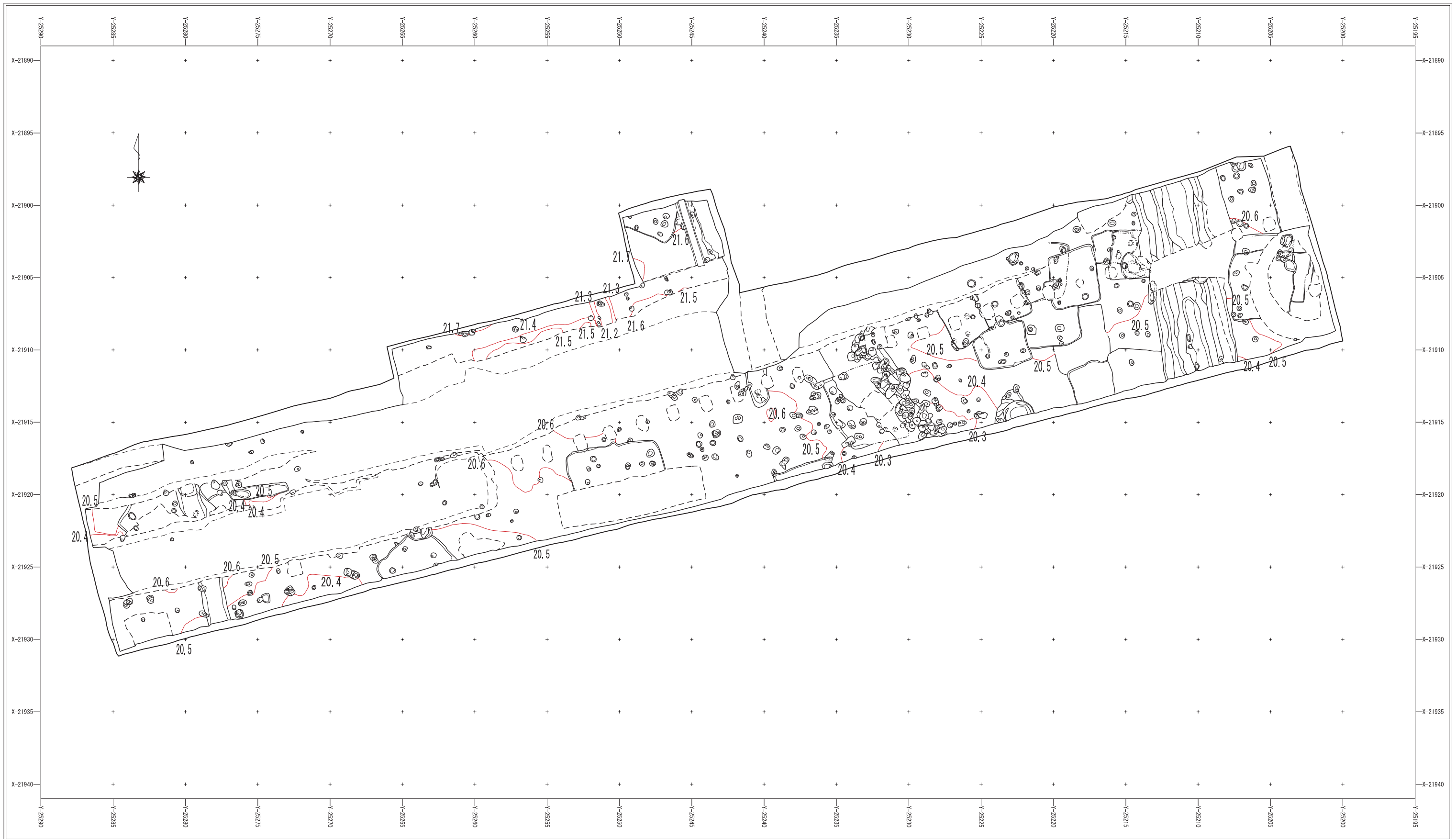
- 1層 表土
- 2層 黒褐色シルト
- 3a層 暗褐色シルト
- 3b層 暗褐色シルト
- 4層 暗褐色シルト
- 5層 黒褐色シルト
- 6層 にぶい黄褐色粘土
- 7層 明黄褐色粘土

※SB-32が攪乱によって半分切れていたが調査区南壁断面に残存

第3図 調査区基本土層 (S=1/50)



第4図 遺構配置図 (S=1/250)



第5図 地形測量図 (S=1/250)

第2表 遺構一覧表

遺構名	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	形態	備考
SB-3	4.15	0.60	0.43	方形	北側一部を検出した。高坏出土。
SB-7	3.64以上	2.92	0.19	方形	SB-10を切る。ピット4基確認。北竈。
SB-8	3.80	3.28	0.16	方形	住居内でピット3基確認された。西竈。
SB-9	3.36	2.16	-	方形	遺構に伴うピット1基確認。
SB-10	2.20	0.92	0.12	方形?	SB-7に切られる。SB-7で確認されたピットのうちいずれかはSB-10のものか?
SB-11	3.60以上	2.60以上	-	方形	東半分がSD-1に切られる。所々に硬化面が残る。
SB-12	3.52	2.72	0.70	方形	SB-11に切られる。ピット1基。硬化面。北竈。
SB-13	3.28	2.68	0.24	方形	SB-22を切る。硬化面。西竈。
SB-16	4.24	3.84	0.15	方形?	北側はSB-8、SB-13に切られ、西側はSB-7に切られ、東側はSB-21を切っている。広い範囲に硬化面。柱穴と思われるピット2基確認。
SB-18	4.80	4.48	0.15	方形	東側でSB-19、SB-27を北側でSB-27を切っている。硬化面は南東をのぞく広い範囲。柱穴と思われるピット3基。
SB-19	3.44	0.92	-	方形	西側はSB-18によって大部分を切られ硬化面は露出しており、北壁の位置ほぼSB-18と重なる。
SB-21	3.88	3.76	0.12	不明	北西部SB-16に切られ南側SB-11、SB-12によって切られる。柱穴三基。東竈。
SB-22	2.88	2.64	0.16	方形	SB-13に切られる。硬化面。
SB-27	5.60以上	1.08以上	-	不明	SB-18、SB-19に切られる。SB-18のピット1基はSB-27の柱穴と思われる。
SB-28	4.12以上	1.80	0.12	不明	東側SB-8、西側SB-13、南側SB-16、北側を攪乱に切られてる。
SB-29	3.10	2.25	-	方形?	東側半分はSB-9によって切られる。最少。
SB-30	5.20	2.28	0.12	方形?	東側大部分がSX-23で切られる。完形に近い壺がピットより出土。炭化種子および炭化米出土。西竈。
SB-32	6.60	2.52	0.24	方形	南側、攪乱で切られる。ピット8基。うち柱穴2基。北竈。
SB-36	4.52	2.40	0.16	方形	南側半分は調査区外。北東部SK-33に切られる。柱穴らしきピット2基。西竈。
SB-38	3.68	2.72	0.16	方形	北側は調査区外。ピット6基。うち柱穴2基。
SB-39	6.00以上	2.72	0.40	方形	北東部、南西部の大部分攪乱。SD-34に切られる。火葬骨の入った甕出土。
SD-1	12.68	5.08	1.52	溝	調査区北壁～南壁に向かってほぼ南北に走る。上部にコンクリート排水溝。
SX-2	11.20	1.12	0.32	畦畔	住居跡以降に形成される。硬化面
SX-6	8.80	0.60	0.16	畦畔?	複合遺構、三段の硬化面を検出。最も新しい。
SX-17	7.56	0.55	0.06	道?	複合遺構、三段の硬化面を検出。
SX-23	8.70	4.24	0.32	官道?	複合遺構、三段の硬化面を検出。最も古い。
SX-40	8.64	2.24	-	柵列?	複合遺構。把手の一部出土(甌把手)。SX-23に伴う柵列状遺構と考えられる。
SD-34	9.72	1.60	0.45	溝	遺構の半分は攪乱に切られる。
SD-37	4.32	0.80	0.28	不明	SB-39の東側。L字状に曲る。
SK-4	2.04	1.08	0.48	ほぼ円形	遺構の南半分、調査区外。
SK-20	0.66	0.61	0.28	円形	遺構の北側一部調査区外に出てる。
SK-24	1.60	0.56	1.12	楕円	遺構の左側上端の一部をSD-1に切られる。
SK-25	2.04	1.84	1.28	楕円	上端全体をSB-9に切られる。
SK-26	5.20	0.48	0.18	不明	北側が調査区外に出て、東側はSD-1に切られ南側は攪乱に切られ全体不明。
SK-31	1.60	1.20	0.40	不明	上部全体をSB-18及びSB-19に切られる。
SK-33	1.76	0.92	0.36	不明	北側半分最下部を残して攪乱に切られる。西側ピットに深く掘られる。
SK-35	1.20	0.56	0.04	楕円	土器細片が若干出土。
SK-41	2.52	1.20	-	楕円	黒褐色シルト一層のみ。
SK-42	1.00	0.92	1.12	円形	SB-18に切られる。
SX-5	2.40	0.48	-	不明	SX-2及びSX-4に切られてる。住居の可能性あり。
SX-15	4.16	1.00	0.12	不明	硬化面の様子から道路状遺構とするのは疑問が残る。

*長軸、短軸とも遺構の残存している部分の寸法である。

第2節 遺構

1 竪穴住居跡

今回、大江遺跡群（学苑住宅）で検出した竪穴住居跡は、21軒である。調査区東側の住居跡群と西側の住居跡群とでは、若干の時期差があり、西側住居跡群がやや古いが、すべて古代のものである。また、住居跡の特徴として東側住居跡群は、切り合っているものが多く、短期間の間に何度も建て替え、移動等を行ったものと考えられる。一方、西側住居跡群については、住居の切り合い等がなく、住居の規模も東側に比べて大きい。住居跡の検出については、土層が非常に見づらく難航したが、基本的には、まず土質の違いで判別した。その後、サブトレンチを設定し、住居の立ち上がりの検出や切り合いの確認を行った。硬化面の範囲や炉跡の残存状況により最終的な判断を行った。検出面は、第3 a 層暗褐色シルト上面または第3 b 層暗褐色シルト上面である。

住居の大きさは、大きいもの（SB-32）は一辺が6 m以上あり、小さいもの（SB-29）は約2 mである。平均的な大きさはおおよそ、3 m～4 mである。西側住居跡群については、6軒すべて、一辺4 m以上と大きい。

竈は、多くの住居跡から検出されたが、そのほとんどは、破壊され、竈の部材である砂質の岩石や白色粘土、焼土等もあまり残っていなかった。

SB-3（第6図）

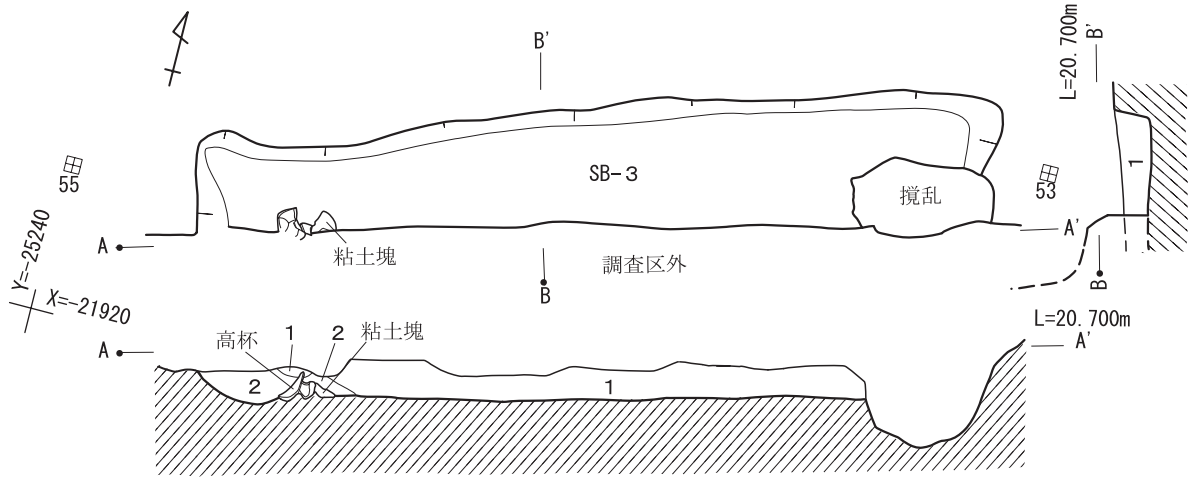
調査区南側、E-11グリッドで検出された住居跡である。調査区の南壁にあり、住居跡の大部分は調査区外で、住居跡北側一部のみを検出した。住居跡の北壁は4.15mあり、埋土のうち、埋1層は黒褐色シルトで黄褐色粒や炭粒を含んでいる。埋2層は同じ黒褐色シルトであるが、埋1層よりやや明るく、粘性も強い。住居跡内で柱穴は検出していない。床面にはあまり強くないが、若干硬化した面が見られる。北壁付近で、遺構埋土より大型の土師器高杯（掲載番号1）が出土している。

SB-7（第6図）

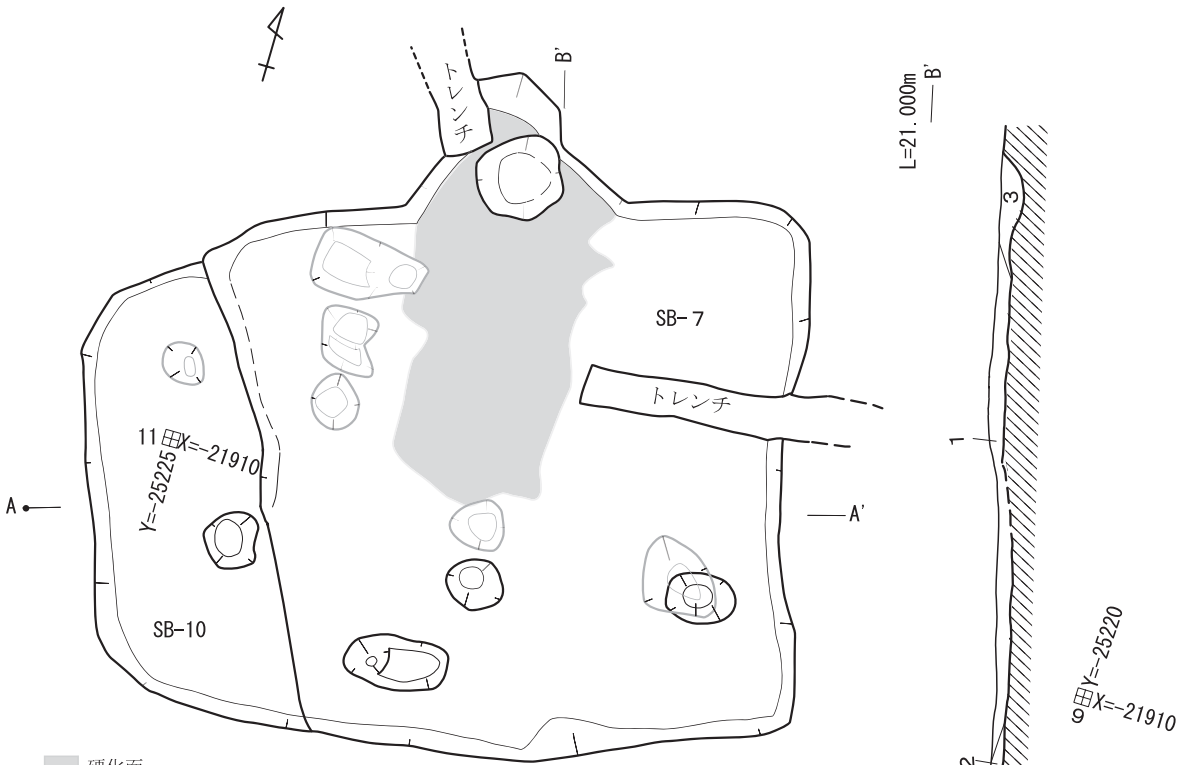
C-14、D-14グリッドで検出された。一辺が3 mほどのほぼ正方形のプランである。竈は、住居内の北側に焼土の散乱が見られたことから、北壁中央部にあったと考えられる。煙道上の突出部と若干のくぼみが見られるが、竈に伴う壁や袖石などは、全く確認できなかった。破壊した後、持ち去ったものと思われる。硬化面については、竈があったと思われる位置の手前に形成されていた。柱穴と思われるピットが住居内の南側で4基確認された。

SB-8（第7図）

B-15、C-15グリッドで検出された。東西3.4m、南北4 mほどの方形プランである。竈は、西壁中央部で確認された。竈を形作っていたと考えられる白色粘土が床面に散乱していた。また燃焼部は深く掘り込まれていた。しかし、竈に使われてい

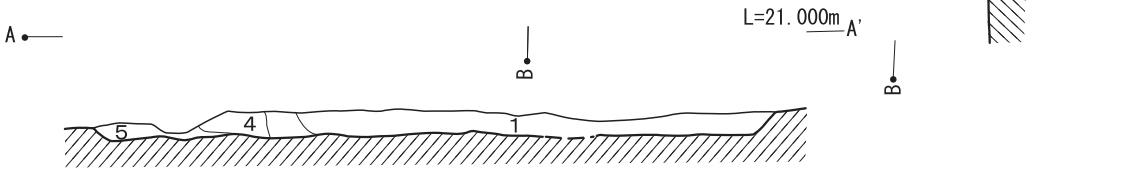


1層 黒褐色シルト(7.5YR3/1) しまり中、粘性小、黄褐色粒、炭粒含
 2層 黒褐色シルト(7.5YR3/1) 1層よりやや明るい、しまり中、粘性中、焼土粒含



■ 硬化面

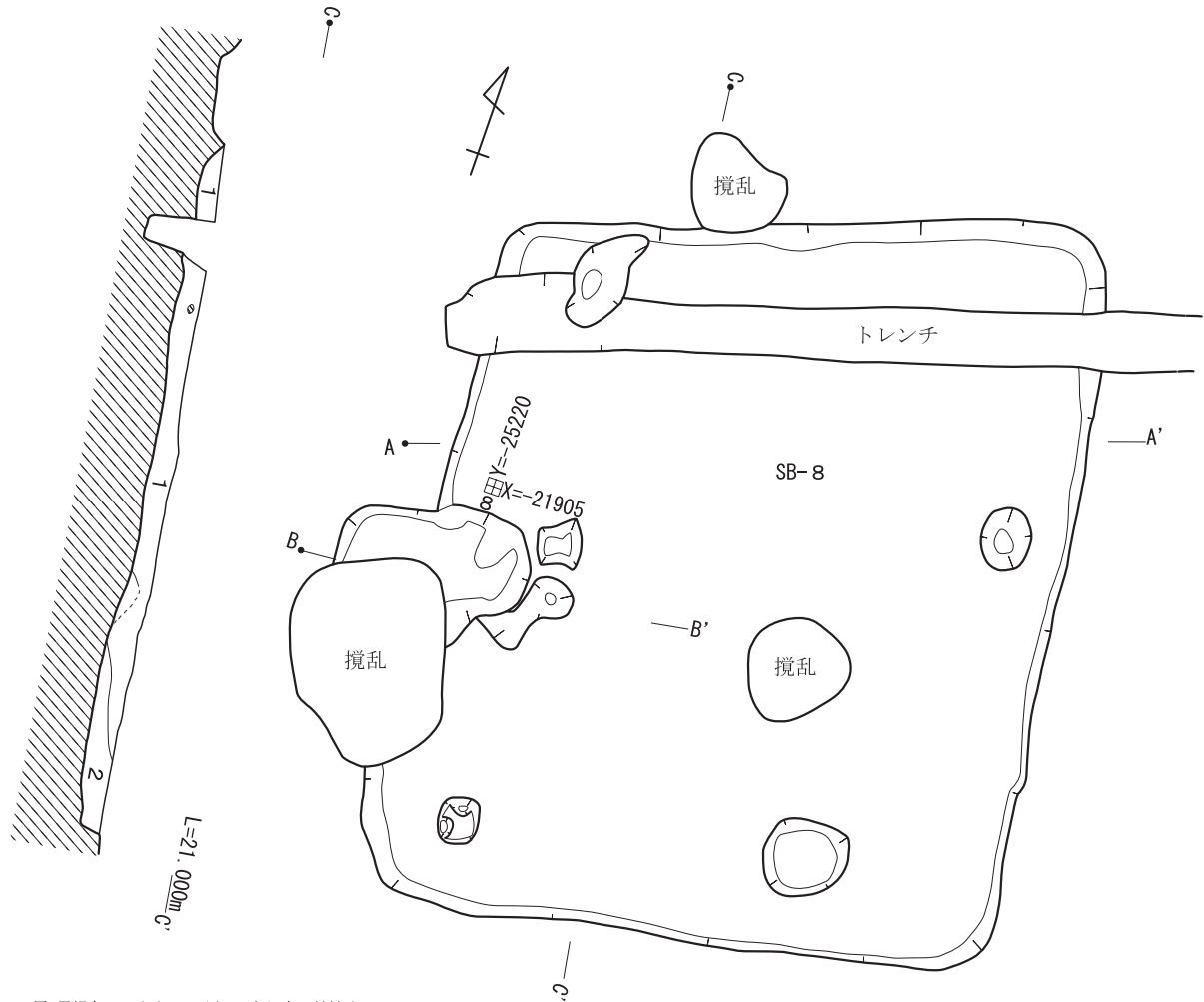
※ 色の違うピットは硬化面掘り下げ時に検出されたもの



1層 黒褐色シルト(10YR3/1) しまり中、粘性中
 2層 黒褐色シルト(10YR2/2) しまり中、粘性中、暗褐色シルトのブロック混
 3層 黒褐色シルト(10YR3/2) しまり小、粘性中、焼土ブロック混
 4層 黒褐色シルト(10YR3/2) しまり中、粘性中、暗褐色シルトのブロック若干混
 5層 暗褐色シルト(10YR3/3) しまり中、粘性中

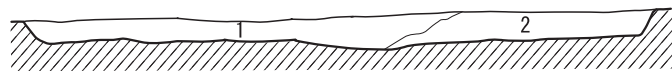


第6図 SB-3、SB-7、SB-10 遺構実測図

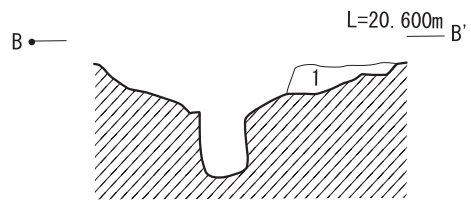
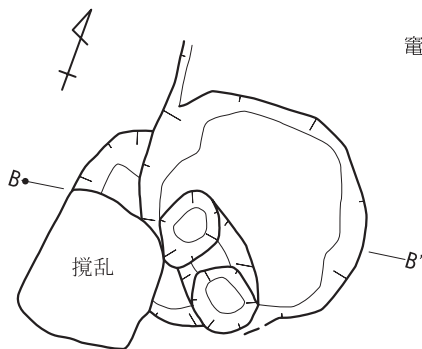


1層 黒褐色シルト(10YR2/2) しまり中、粘性小褐色粒混
 2層 暗褐色シルト(10YR3/4) しまり中、粘性小褐色・明褐色粒混

L=21.000m A'



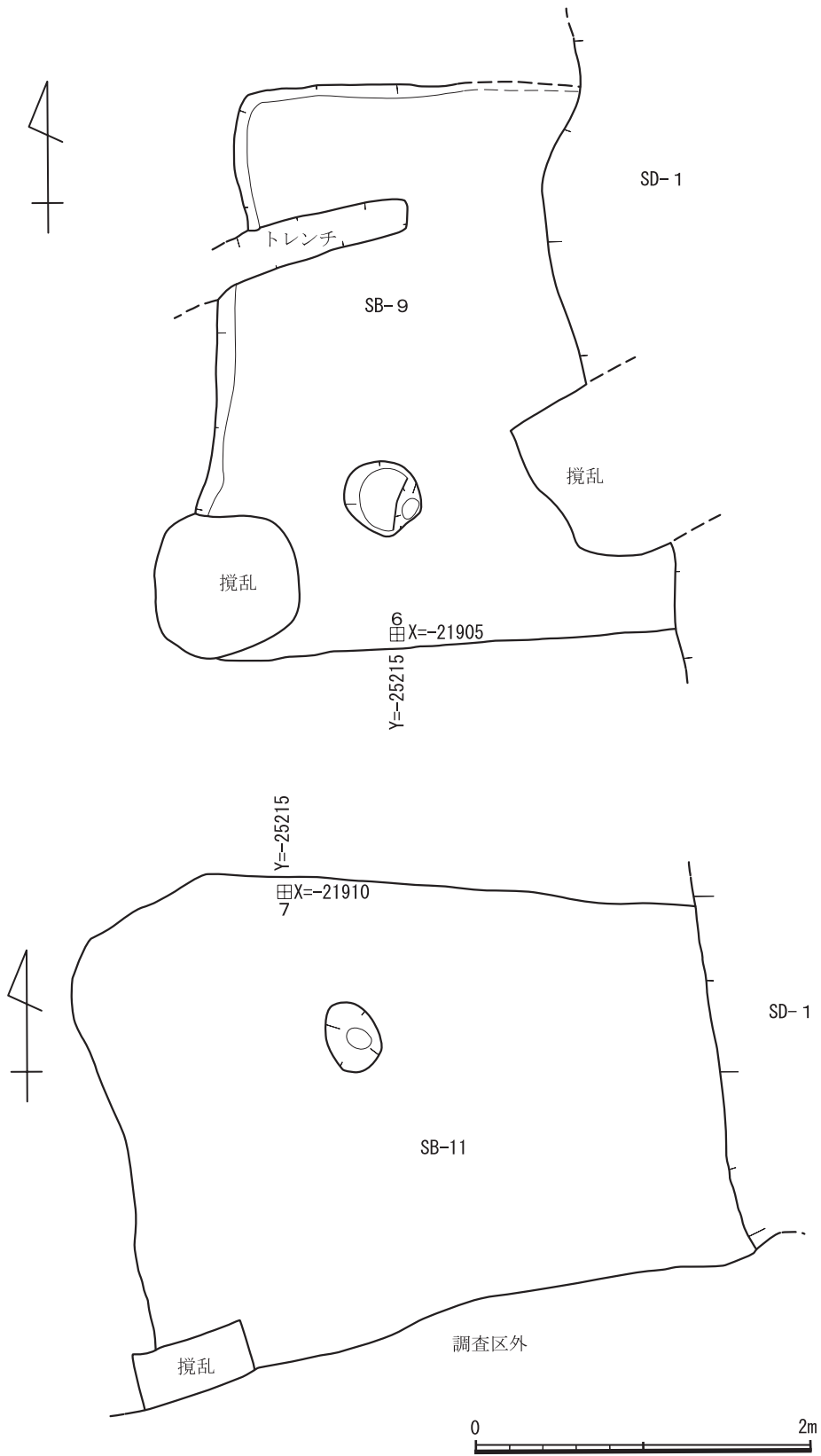
竈完掘図



1層 黒褐色シルト(10YR3/1) しまり中、粘性中、焼土山砂混



第7図 SB-8 遺構実測図



第8図 SB-9、SB-11 遺構実測図

たと考えられる部材の石などはほとんど検出されなかった。埋土は2層に分けられ、埋1層は黒褐色シルトで埋2層は暗褐色シルトであるが、含まれる焼土粒などの様子は、ほぼ同じである。硬化面は住居内のほぼ全面で確認され、かなり厚くしっかりしたものであった。柱穴は3基確認できた。

SB-9(第8図)

B-15、16グリッドで検出された。東半分がSD-1によって切られていた。南北約3.4m、東西推定3.4mのほぼ正方形に近い形を呈していたと思われる。竈は焼土の散乱状況から西壁側にあったと考えられる。竈の部材の石などは残っておらず、竈を形作っていたと考えられる白色粘土は破壊されたように散らばっていた。硬化面は、住居が残存していた西半分のうち竈があったと思われる付近で、ところどころ残っていた。柱穴は1基のみ検出した。

SB-10(第6図)

C-14、D-14グリッド付近、SB-7の西側で検出した。SB-7を検出したときには気づかず、1軒の住居として捉えていたが、掘削して別の住居跡であることを確認した。南北約2.4mの小型の住居跡である。切り合い状況からSB-10のほうがSB-7よりも古いと思われる。ただし床面の高さの差は確認できなかった。硬化面は、SB-7に切られていたため、ほとんど残っていなかった。SB-7の南側に柱穴らしきピットを4基検出したが、うちいずれかはSB-10に伴うものと考えられる。

SB-11(第8図)

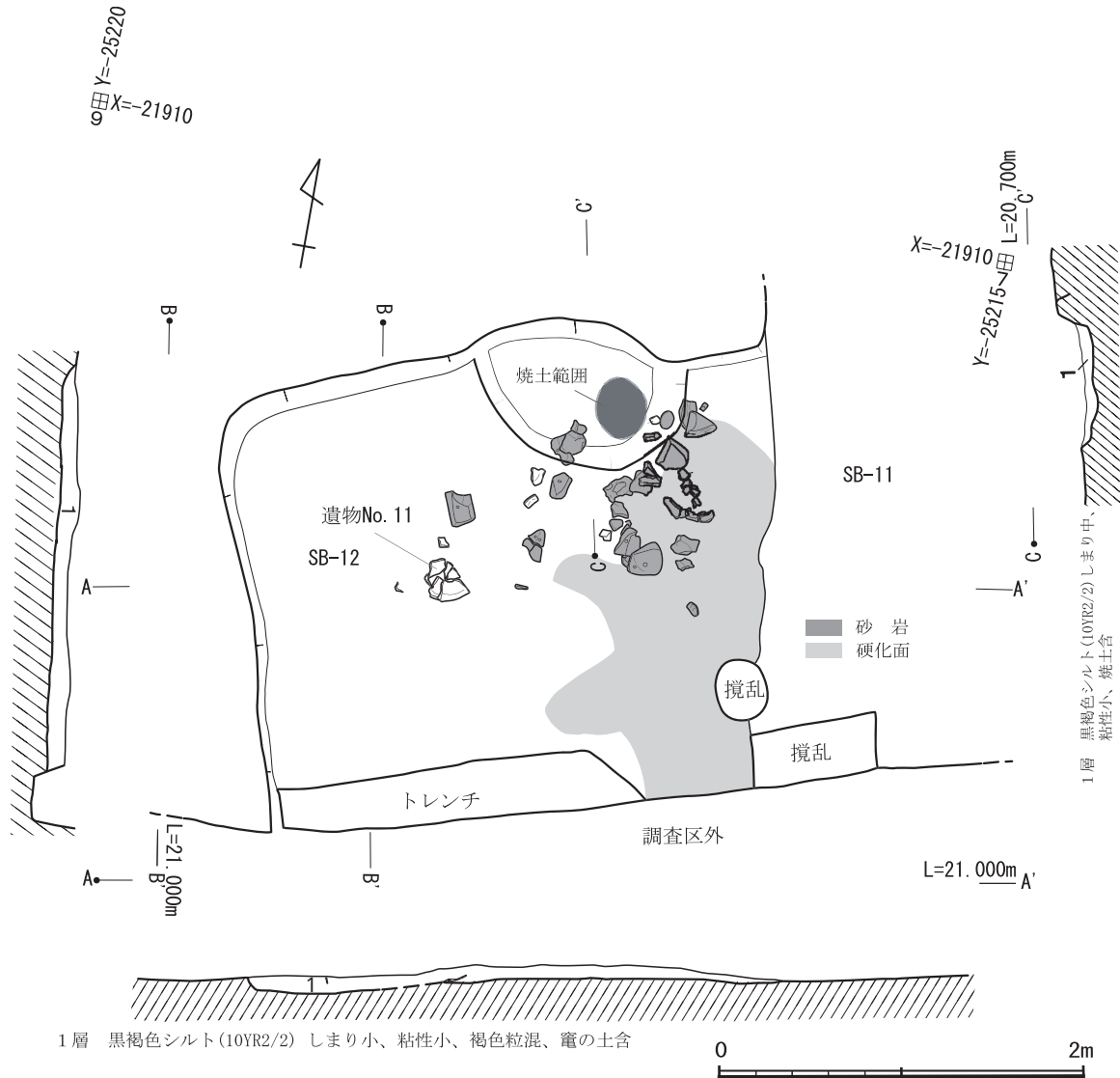
D-16グリッド付近で検出された。この住居跡もSB-9と同じく東側の一部がSD-1によって切られていた。また南側部分は調査区外にある状態であった。そのため住居の規模等は不明である。硬化面は非常に薄く、また竈の位置も、確認できなかった。柱穴と思われるピットが1基確認できた。

SB-12(第9図)

D-15グリッド、SB-11の西隣で検出された。東側はSB-11によって切られ、南側部分はSB-11と同じく調査区外にある状態であった。竈の位置は、竈の部材として使われていたと考えられる砂質の石が多く散乱し、焼土や燃焼部の掘り込みが確認できたため、住居の北側にあったと考えられる。竈付近からは、高杯などを検出した。また硬化面は、竈の周辺部にかなりしっかりした状態で確認できた。柱穴は、検出できなかった。

SB-13(第10、11図)

C-14グリッドで検出された。東側はSB-28を切り、西側ではSB-22を切っている。北側は、攪乱によって失われていたので全体の大きさは明らかにできなかったが、東西約3.4mであり、南北も同じくらいの方形であったと思われる。また住居の西側

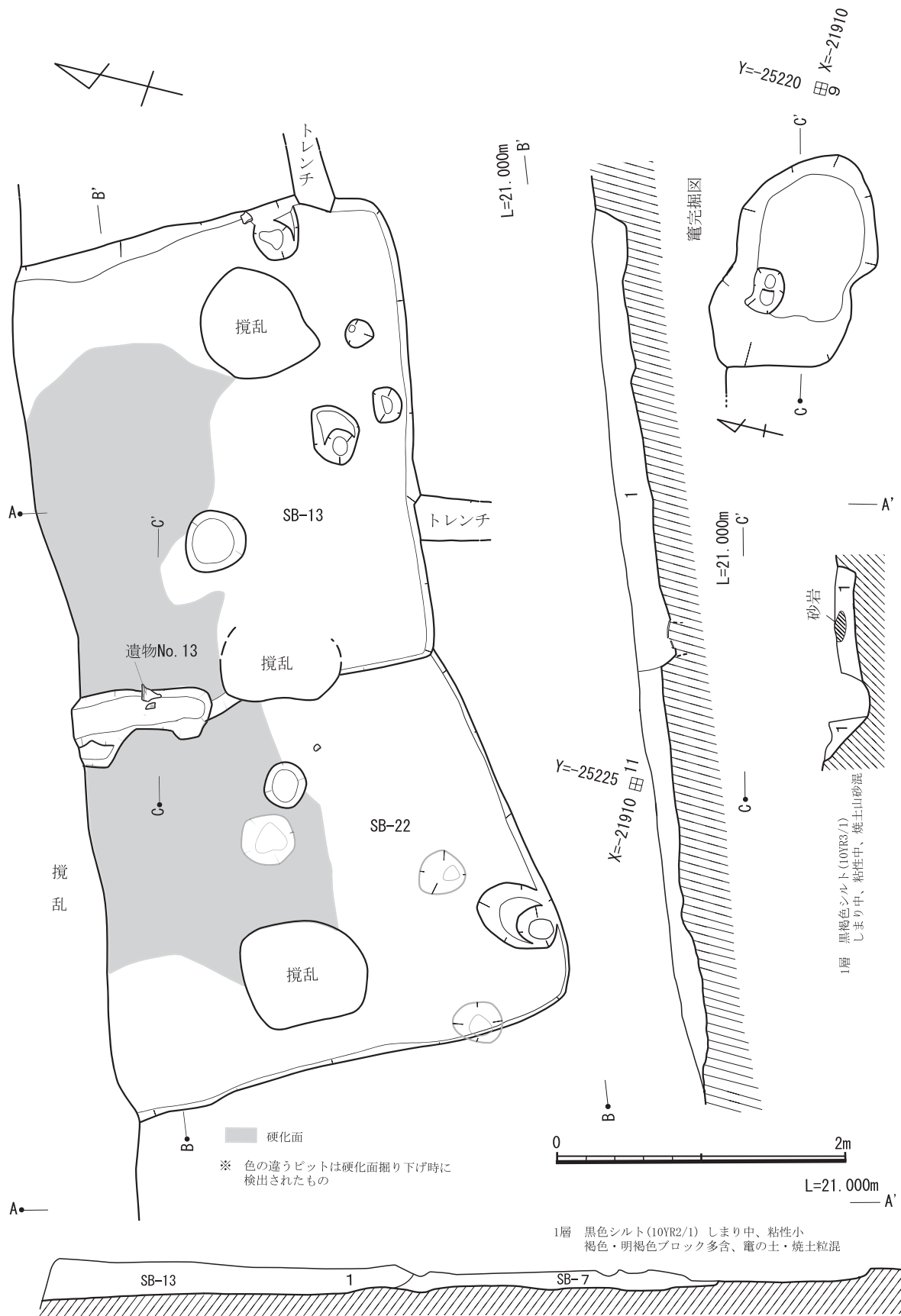


第9図 SB-12 遺構実測図

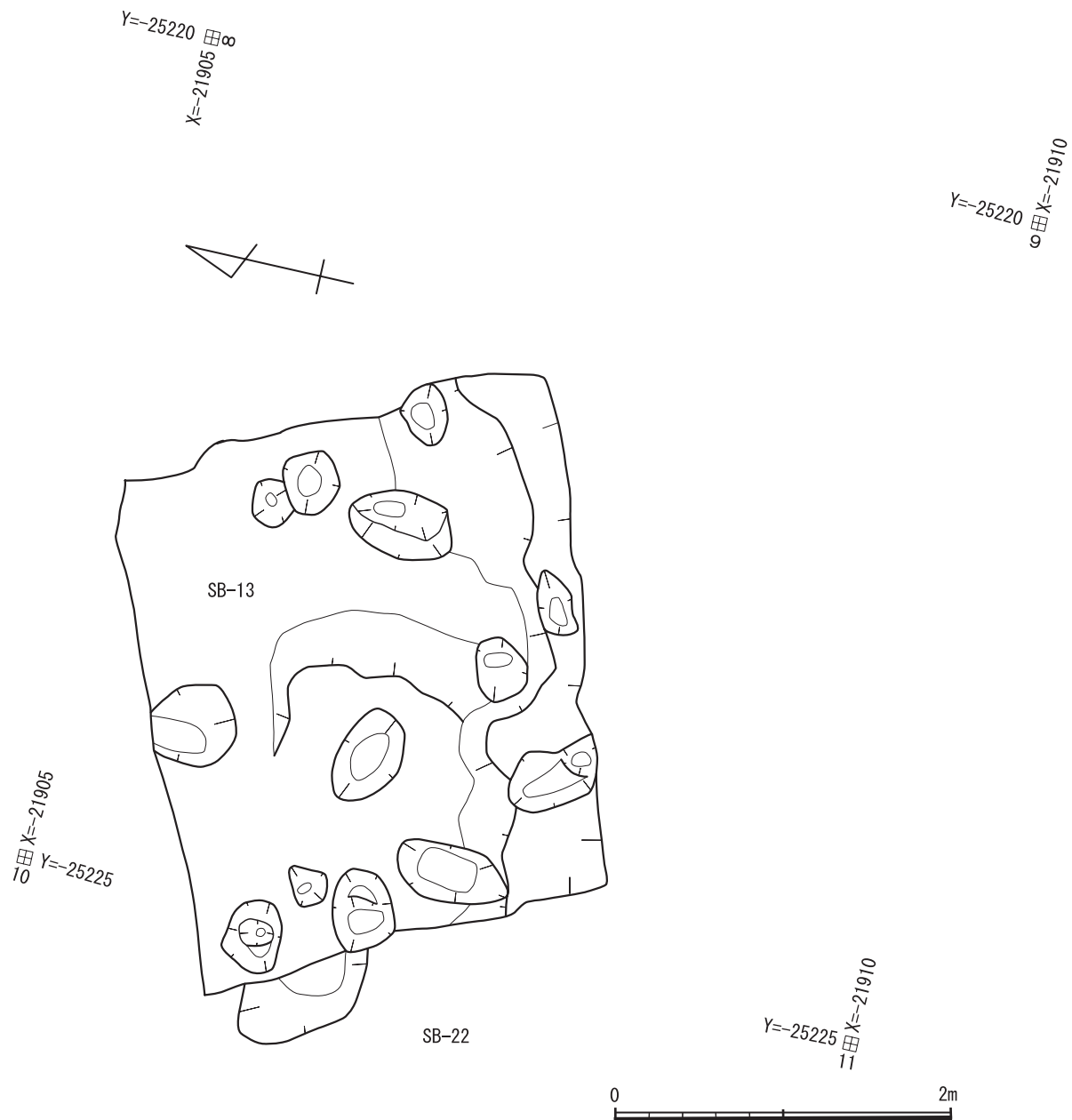
に焼土の散乱が多く見られ、燃焼部の掘り込みと思われるものもあったので、竈の位置は西側にあったと考えられる。硬化面は、住居の竈付近の広い範囲で分厚く残っていた。逆に東側では弱い硬化面しか残っていなかった。柱穴は1基検出され、住居に伴うと考えられる。

SB-16(第12図)

C-14、15グリッドで検出された。北側はSB-8とSB-13に切られ、西側はSB-7に切られ、東側はSB-21を切っている。そのため住居の規模や形は不明であるが東西が約4.2mであるので南北も同じぐらいの方形であると考えられる。竈は検出できなかった。比較的よい状況で住居の外壁が残っていた東側と南側で竈の痕跡がなかったため、北側か西側にあったのではないかと推測できる。硬化面は全体に広がっていて残存状況もよかった。柱穴は、住居内で2基確認できた。住居内の位置関係から南側の2基と推測できる。



第10図 SB-13、SB-22 遺構実測図



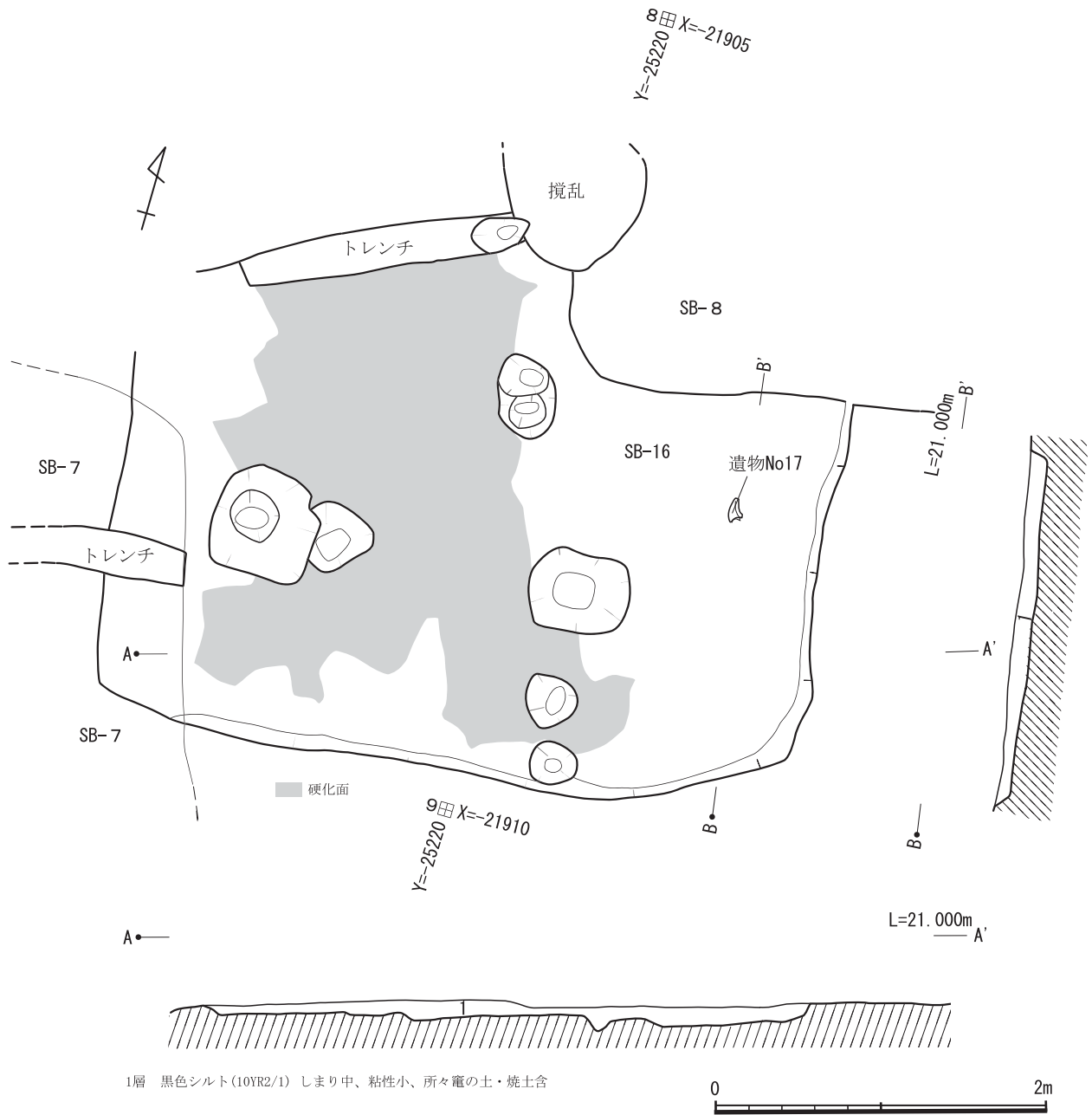
第11図 SB-13 完掘実測図

SB-22(第10図)

C-13、14グリッドで検出された。東側はSB-13に切られている。また北側も、近代の攪乱に切られていたため住居の規模及び形について不明である。竈の位置は確認できなかった。硬化面は、薄く確認できた。柱穴は住居内南壁付近で1基検出された。

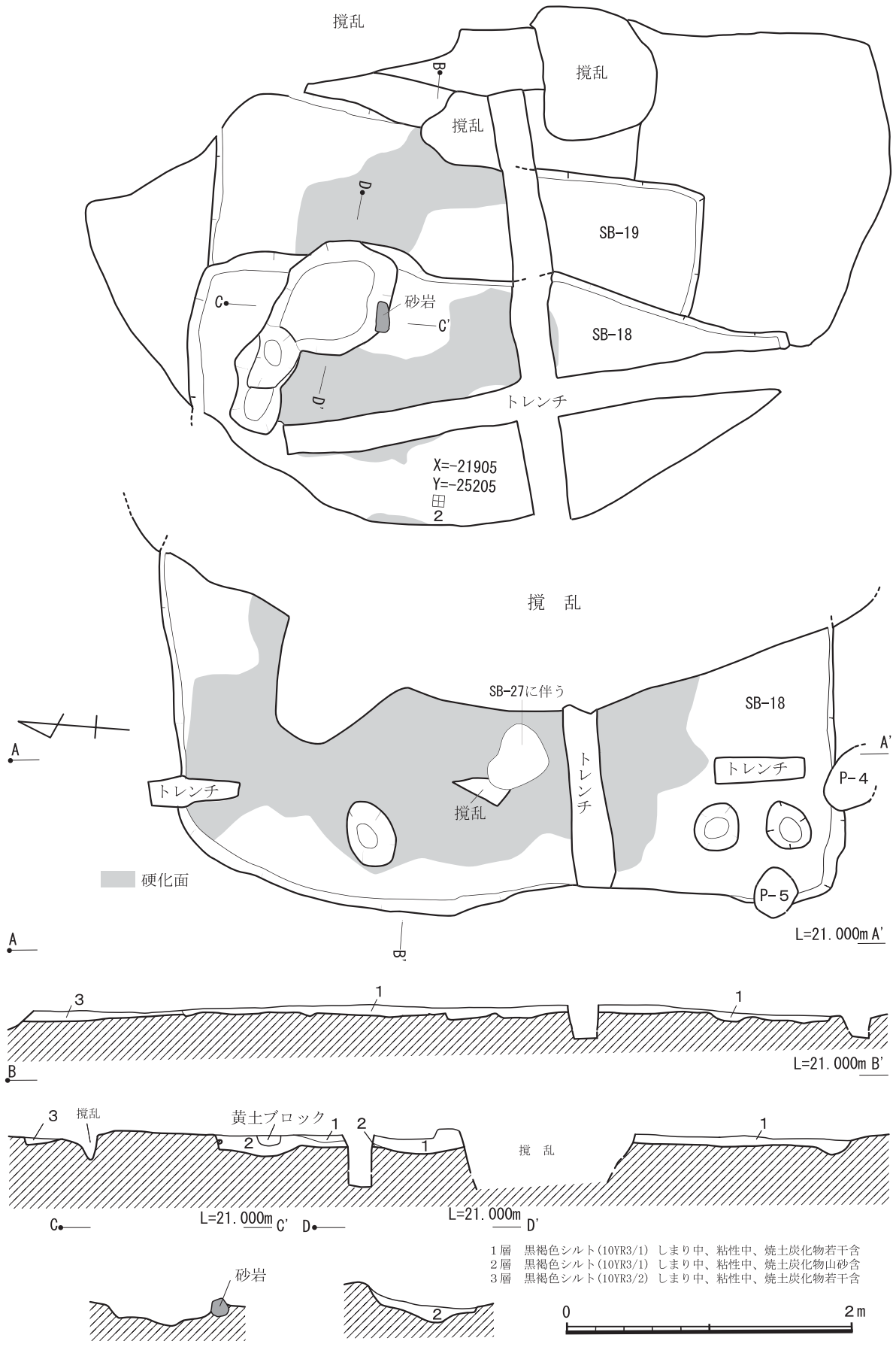
SB-18(第13図)

B-17、18とC-17、18グリッドにまたがって検出された。東側でSB-19とSB-27を

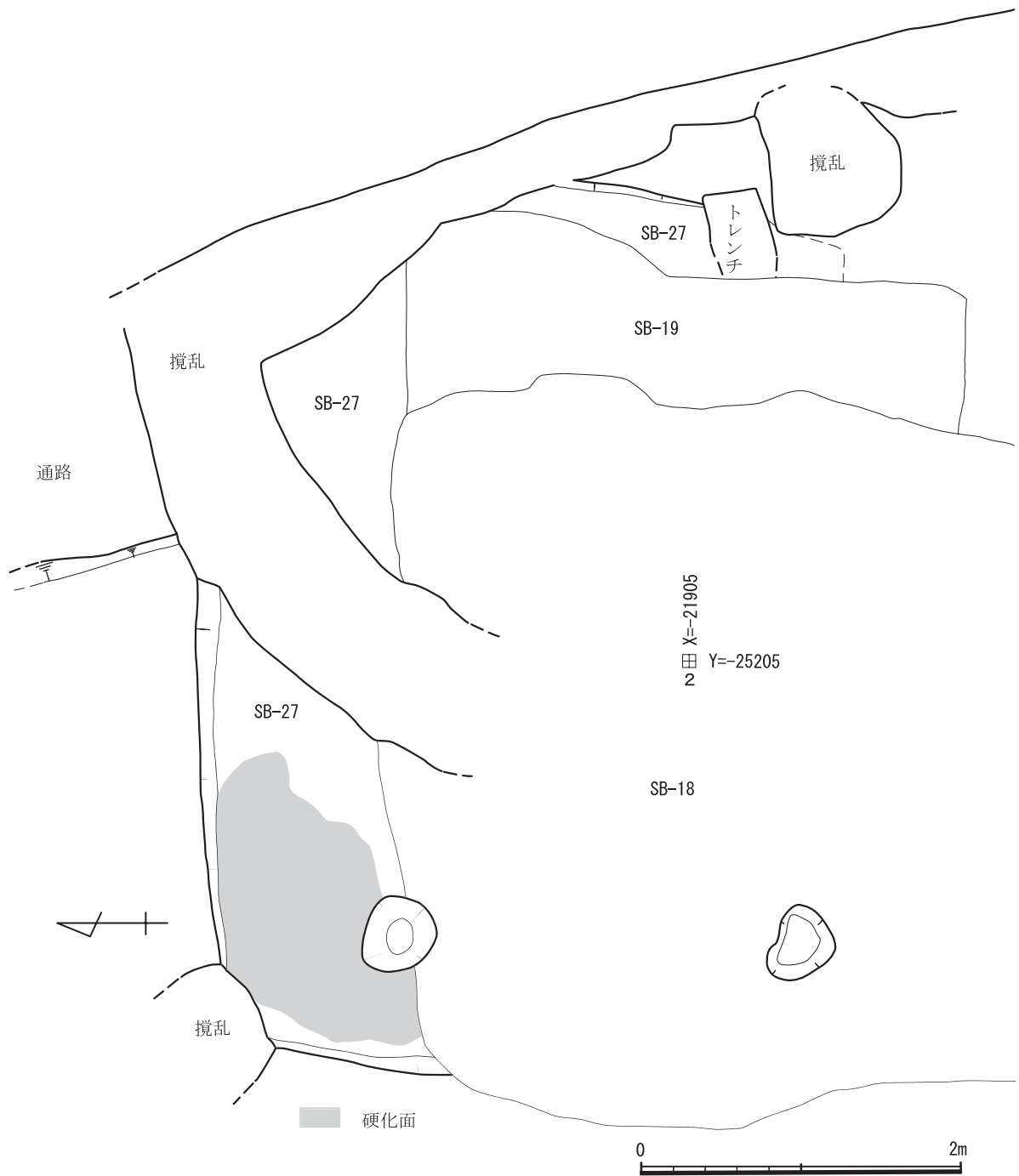


第12図 SB-16 遺構実測図

北側で SB-27 を切っている。住居の中央部に近代の攪乱があるが、東西約 4.5m、南北約 4.6m のほぼ方形のプランと確認できた。竈の位置は東壁のやや北よりにあったと考えられる。竈自体はほぼ失われた状態で、わずかに燃烧部の掘り込みと、砂質の袖石と考えられるものが食い込んでいた。周囲には焼土が散乱していた。硬化面は南東部を除く広い範囲に広がり、柱穴は 3 基確認されたが、南東部のみは検出されなかった。攪乱によって失われたと思われる。また北西部の柱穴は明確な掘り込みを持たず、硬化面が 10cm ほど窪んだ状態で検出され、柱座と考えられる。



第13図 SB-18、SB-19 遺構実測図



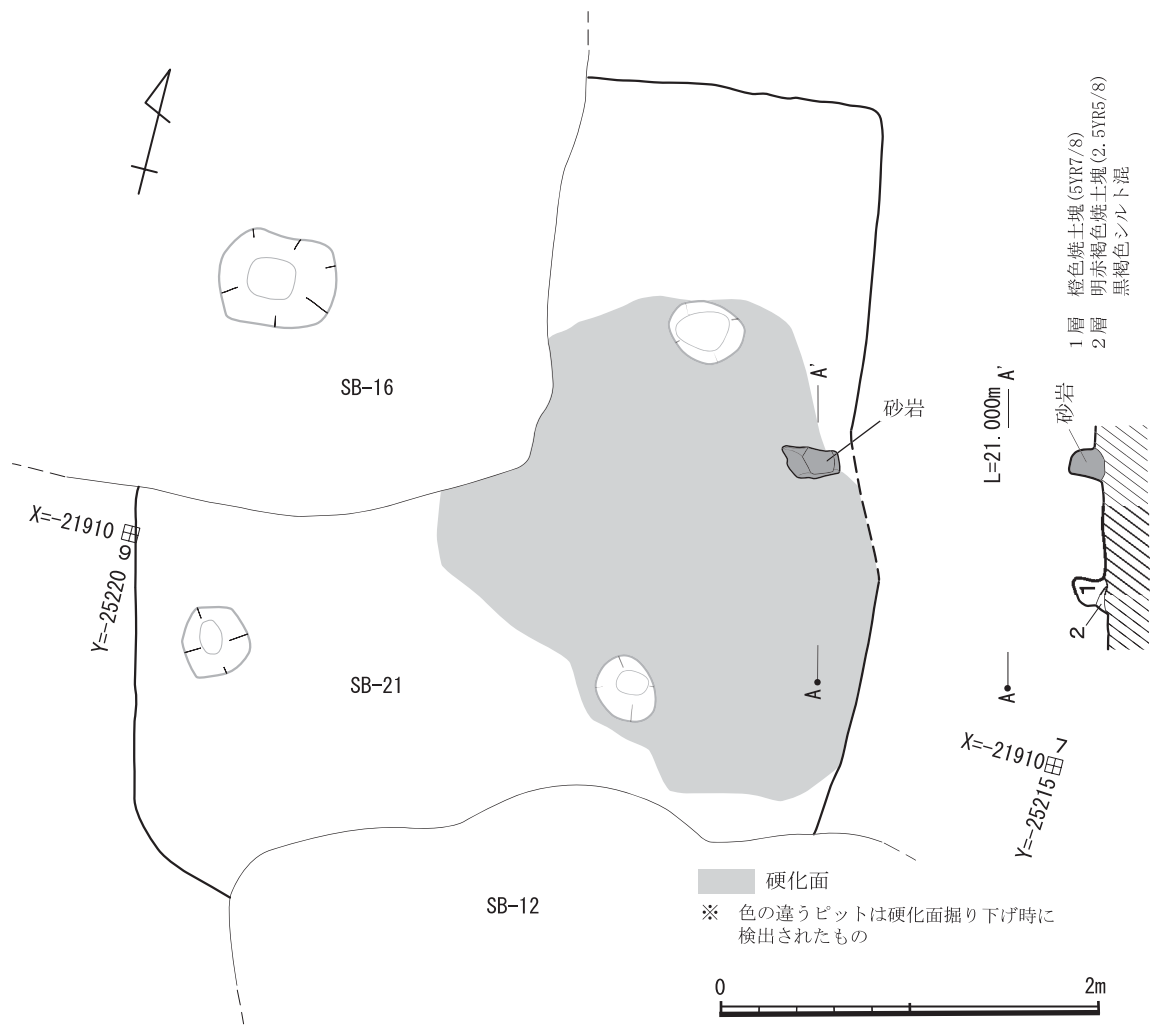
第14図 SB-27 遺構実測図

SB-19(第13図)

B-18、C-18グリッドで検出された。西側は SB-18によって大部分を切られているため残存状況はあまりよくない。南北約3.4m、東西は不明であるが同じぐらいの長さで、方形と考えられる。検出の段階で硬化面が露出しており、北壁の位置は SB-18とほぼ重なる。竈及び柱穴等は、検出されなかった。

SB-27(第14図)

B-17グリッドで検出された。南側大部分は SB-18、SB-19に切られている。また北

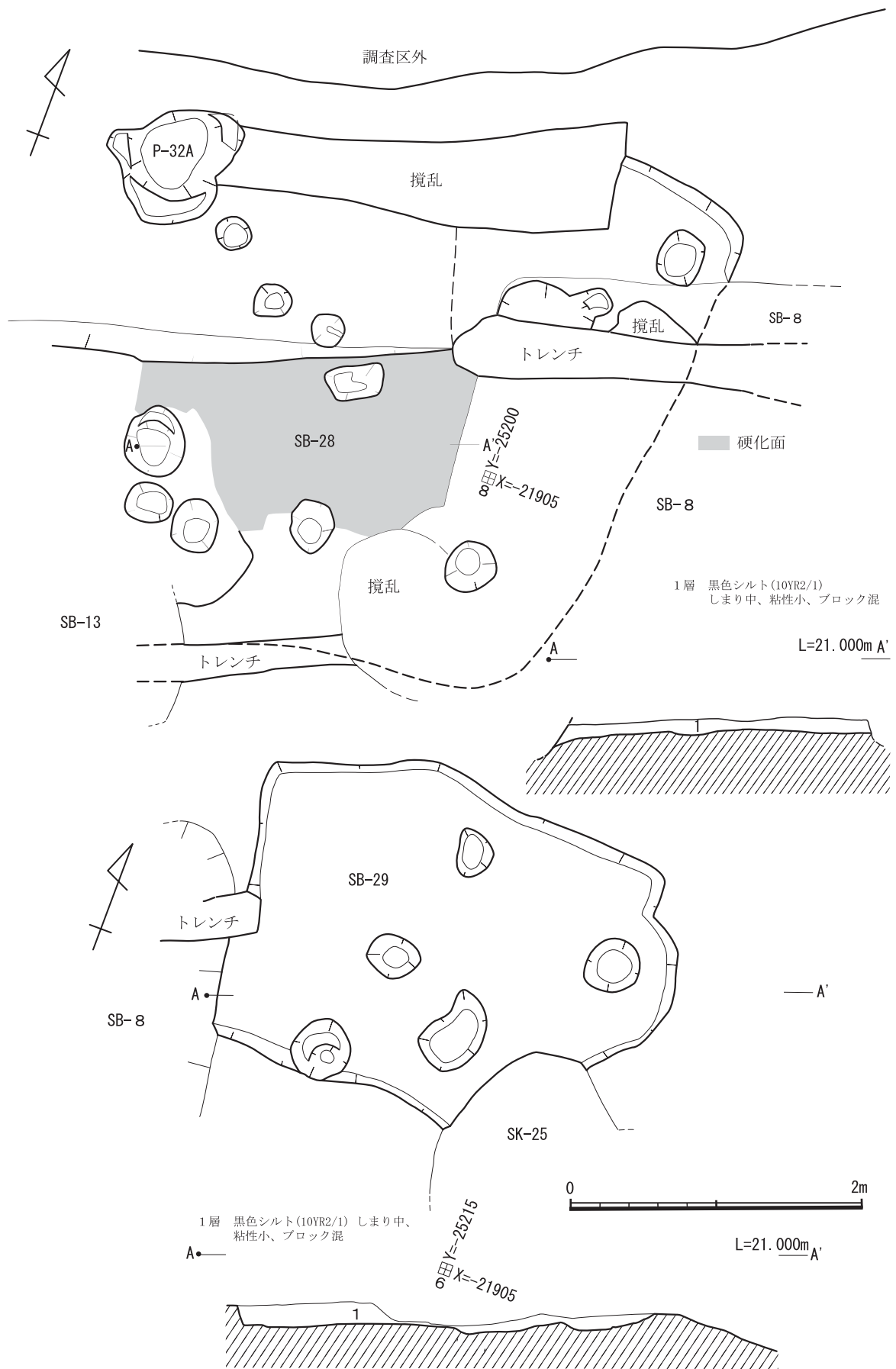


第15図 SB-21 遺構実測図

東部より攪乱が走っており、住居跡の残存状況は悪い。北西部は検出の時点で壁面は消失し、硬化面のみ残存していた。柱穴は北東部に1基検出。また、SB-18で検出したピット1基は位置関係などから考えてSB-27南西部の柱穴の可能性が考えられる。竈は検出されなかった。

SB-21(第15図)

C-15、D-15グリッドで検出された。北西部をSB-16に切られ、南側をSB-11とSB-12によって切られている。この付近では11軒の切り合いがあったがそのなかでSB-21が一番古いと推測される。東西約4m、南北約4.4mの方形プランである。竈は住居の東側にあったと考えられる。竈を形成していたと思われる白色粘土や焼土が大きな塊で散乱していた。その状況は、断面図にのみ表示している。また硬化面では確認できなかったが、貼床をはがして掘削したところ、柱穴が3基確認できた。北西部の柱穴のみSB-16に切られていたため確認できなかったが、SB-16の南東部の柱穴と位置的にも重なると考えられる。そのためSB-16の南東部の柱穴はSB-21の北西部の柱穴を再利用したのではないかと推測される。



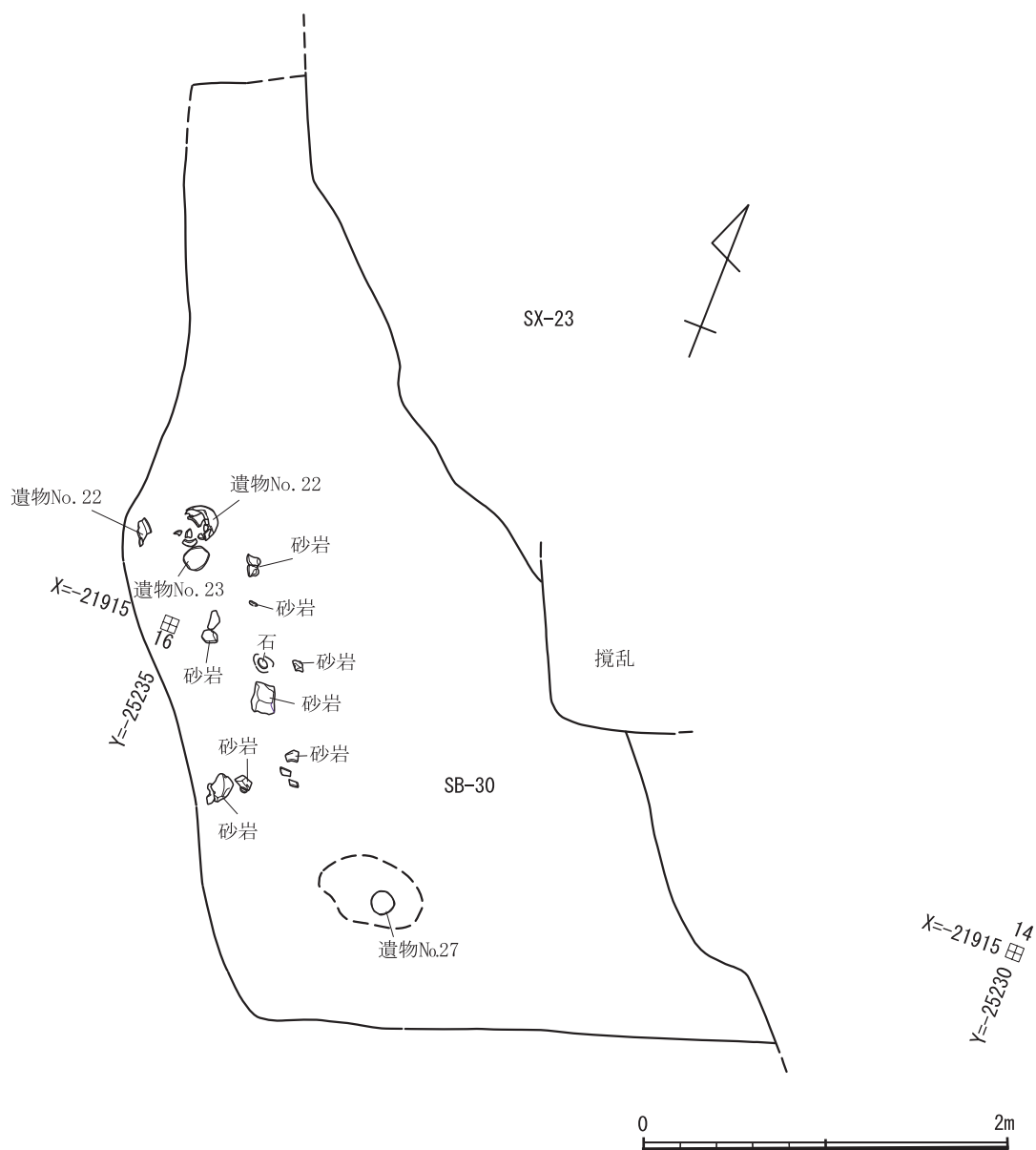
第16図 SB-28、SB-29 遺構実測図

SB-28(第16図)

C-14グリッドで検出された。東側はSB-8に、西側はSB-13に、南側はSB-16に、北側は攪乱に切られている。そのためほとんど断片的にしか推測できないが、東西南北4mほどの方形プランだったと考えられる。硬化面は、厚く残り具合がよかった。ピットはいくつかあったが、住居に伴う柱穴と考えられるものは北東部と南西部の2基であった。

SB-29(第16図)

B-15グリッドで検出された。東側半分はSB-9によって切られているため、残存状況はあまりよくない。南北約2m、東西は不明である。今回の調査区の中では最も小さい住居の部類に入る。ピットはいくつかあったが、この住居に伴う柱穴と考

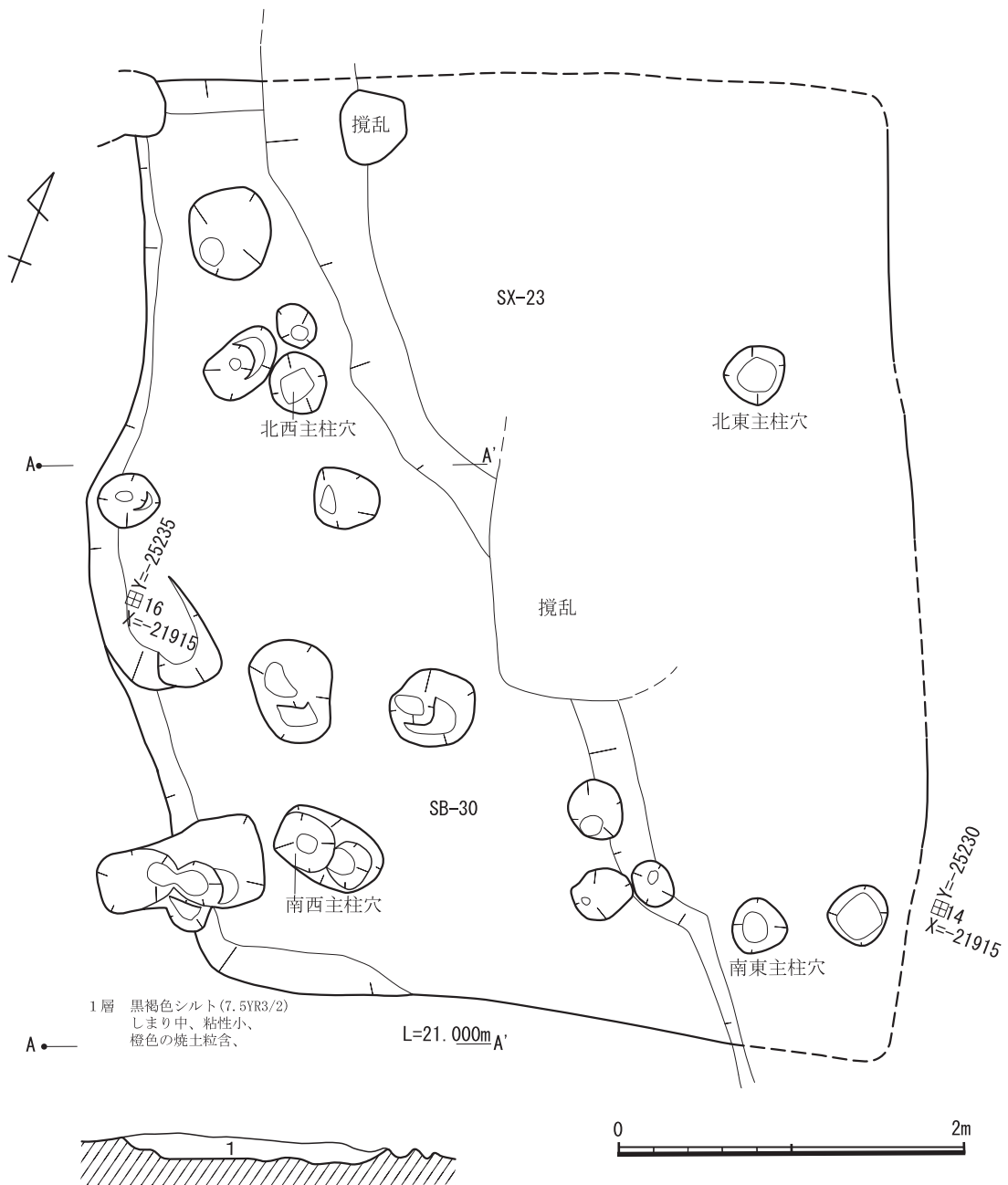


第17図 SB-30 遺物出土状況図

えられるものはなかった。また、硬化面は薄く、残りはよくなかった。

SB-30(第17,18図)

SX-23の西側で検出された。東側大部分は、SX-23によって切られているため全体的な残りはよくない。住居は東西約5m、南北約6mの方形プランと推定される。住居の西側に焼土や白色粘土等が崩れた状態で散らばっており、竈がこの位置にあったと考えられる。また焼土等の中に炭化種子及び炭化米が見つかった（その理化学分析等については、第Ⅲ章第4節参照）。硬化面及び掘り方埋土等はSX-23が作られたときに削平されたと考えられ、残っていなかった。



第18図 SB-30 遺構実測図

しかし竈があったと考えられる位置に甕が2点、立った状態で出土しており、底部の位置が床面だと考えられる。住居内では、ピットが多数検出された。その多くがSX-23に伴うものと考えられるが、SB-30に伴う柱穴らしきピットのうち南西部で検出されたものから、頸部から上を破砕したと思われる壺（掲載番号27）が底部を上にした逆位状態で埋設されていた。出土した状況から意図的に置かれたと考えられ、柱を抜いた後に祭祀などに使用したものと推測できる。

SB-32(第19、20図)

E-8、9グリッドで検出された。南側半分は近代の攪乱によって切られていた。東西約6.6m、南北は切られていたため推定であるが、攪乱をはさんで反対側の土層断面に住居の硬化面が確認できたので、6m以上の規模であることは確認できた。また、住居の北壁中央に焼土が散乱し、燃焼部の掘り込みも確認できたので、そこに竈が構築されていたと考えられる。硬化面は全体的に広がっており、特に西側によく残っていた。住居内のピットは8基検出されているが、そのうち2基が北東部、北西部の柱穴になると思われる。

SB-36(第21図)

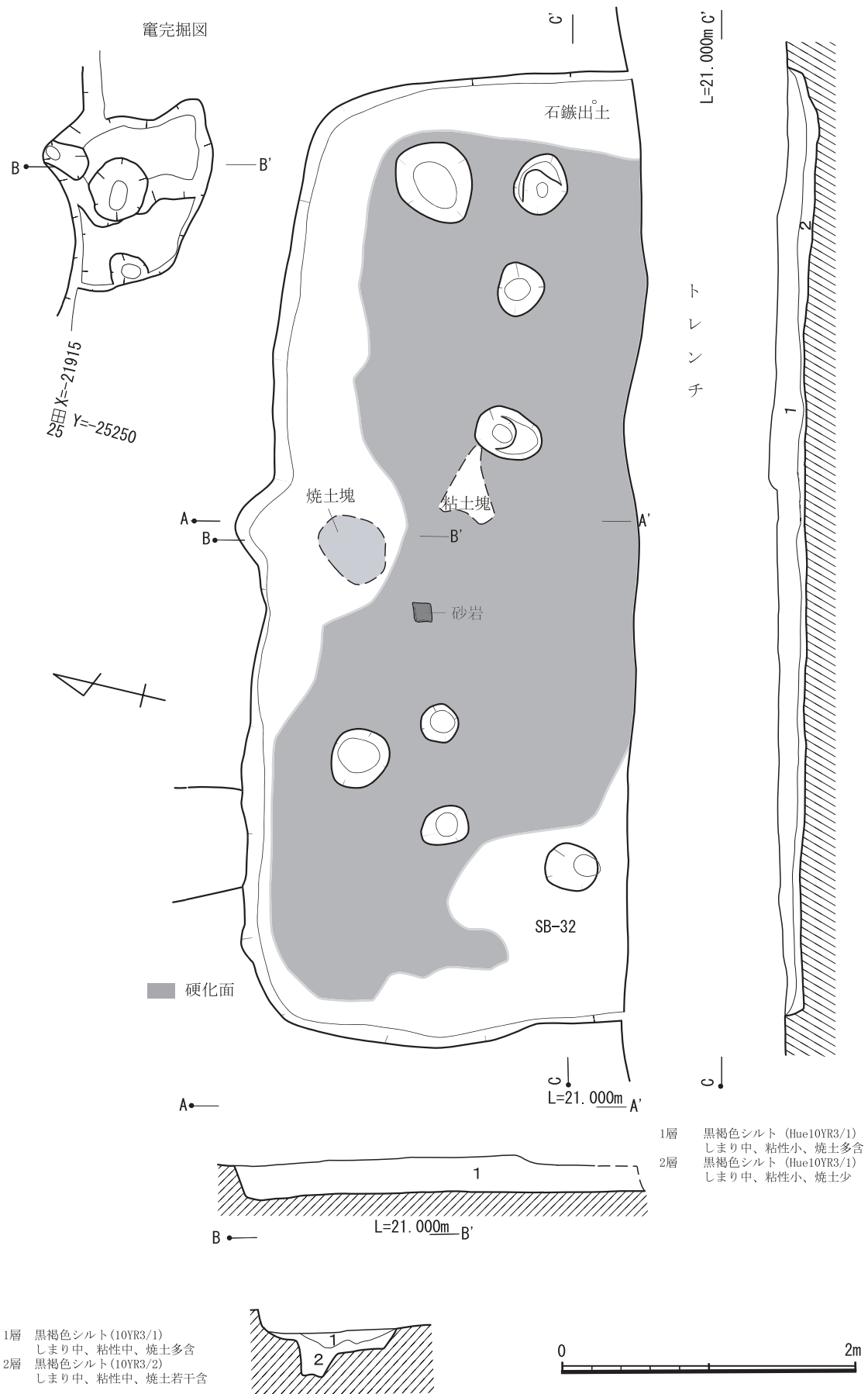
F-6グリッド付近で検出された。南側半分は調査区外に出ており、北東部角はSK-33に切られている。南北約4.6mで東西は不明であるが同じくらいの長さで、方形と考えられる。竈の位置は、西壁中央部にあったと考えられる。竈は、粘土など壁の部分は失われ、砂質の石が散乱していたが、袖石が燃焼部の掘り込みを取り囲むように検出された。硬化面は竈の周囲から住居の中心付近にかけて厚く残っていた。ピットは3基検出したが、そのうち南東部のピットは住居に伴うと考えられる。また竈付近の床直で須恵皿が出土した。

SB-38(第22図)

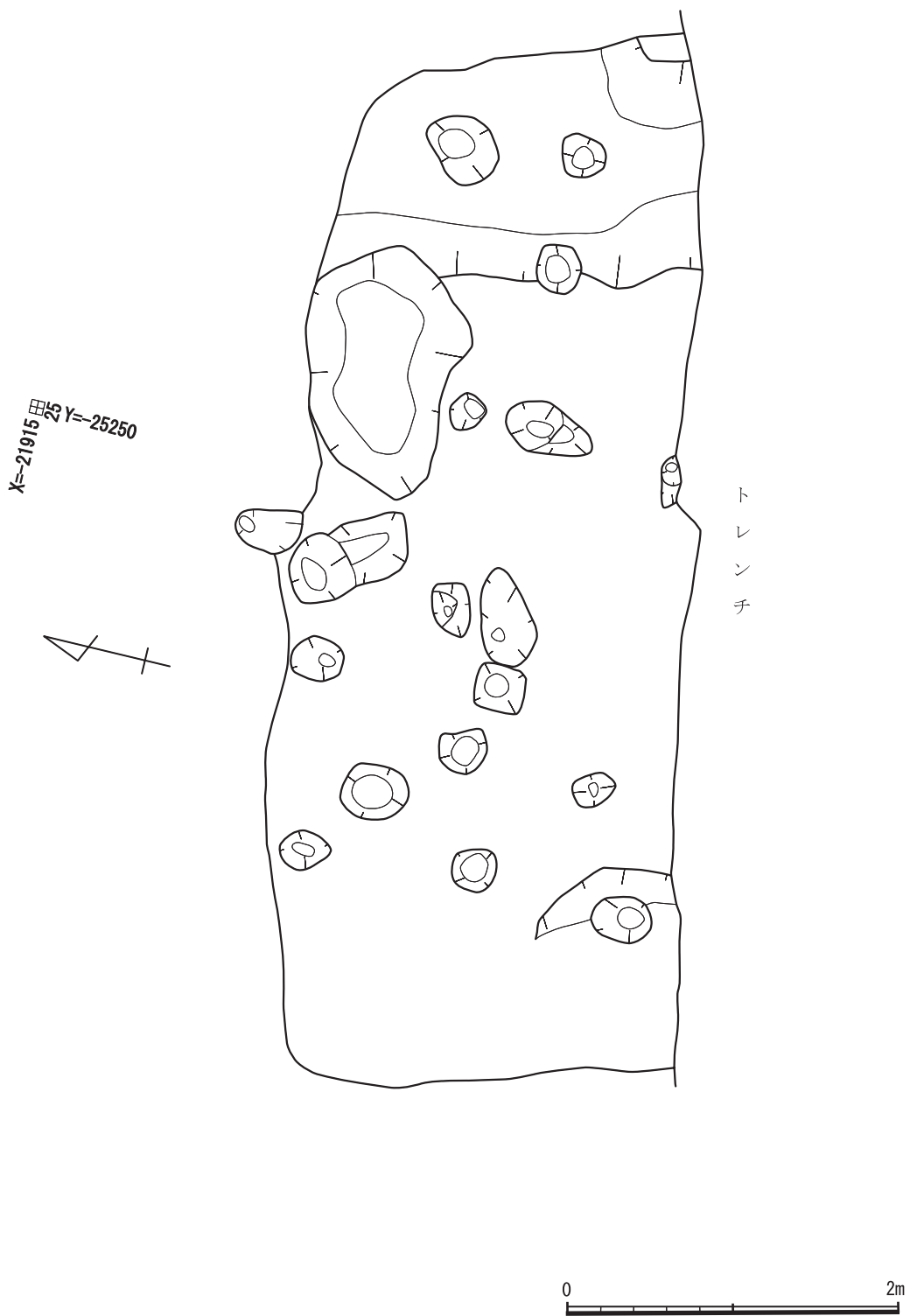
B-9グリッドで検出された。北側は調査区外に出ており、確認できた住居の範囲は全体の3分の1程度である。現状では南北約2.5m、東西約3mであり、住居のプランは方形か長方形か判断はできなかった。また、竈は確認できなかった。硬化面は中央から南に広がっており、特に北側は厚く残っていた。ピットは6基検出したが、この中で確実に住居の柱穴と思われるものは、住居東側に南北に3つ並んだうちの真ん中のものである。

SB-39(第23、24図)

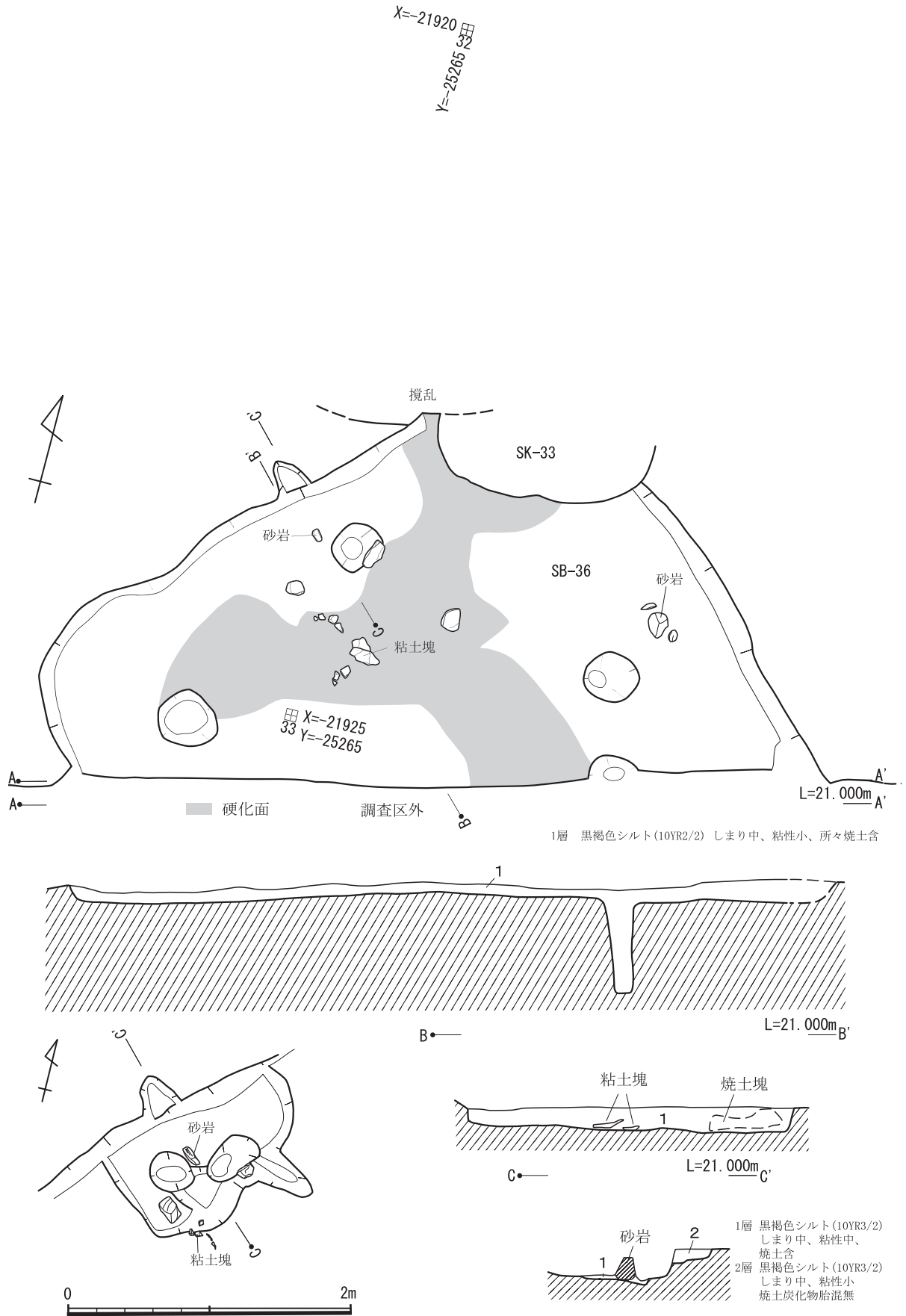
F-2グリッド付近で検出された。北東部及び南西部の大部分が攪乱とSD-34に切られているため残存状況はよくなかった。東西約5m、南北約5mの方形プランと推定される。竈は検出されなかったが、西側に焼土や白色粘土の散乱が若干認められたので西壁に竈があったと思われる。硬化面は東側によく残っていたが、西側にはほとんど認められなかった。南側に甕が上下反転した状態で出土した。底部は、



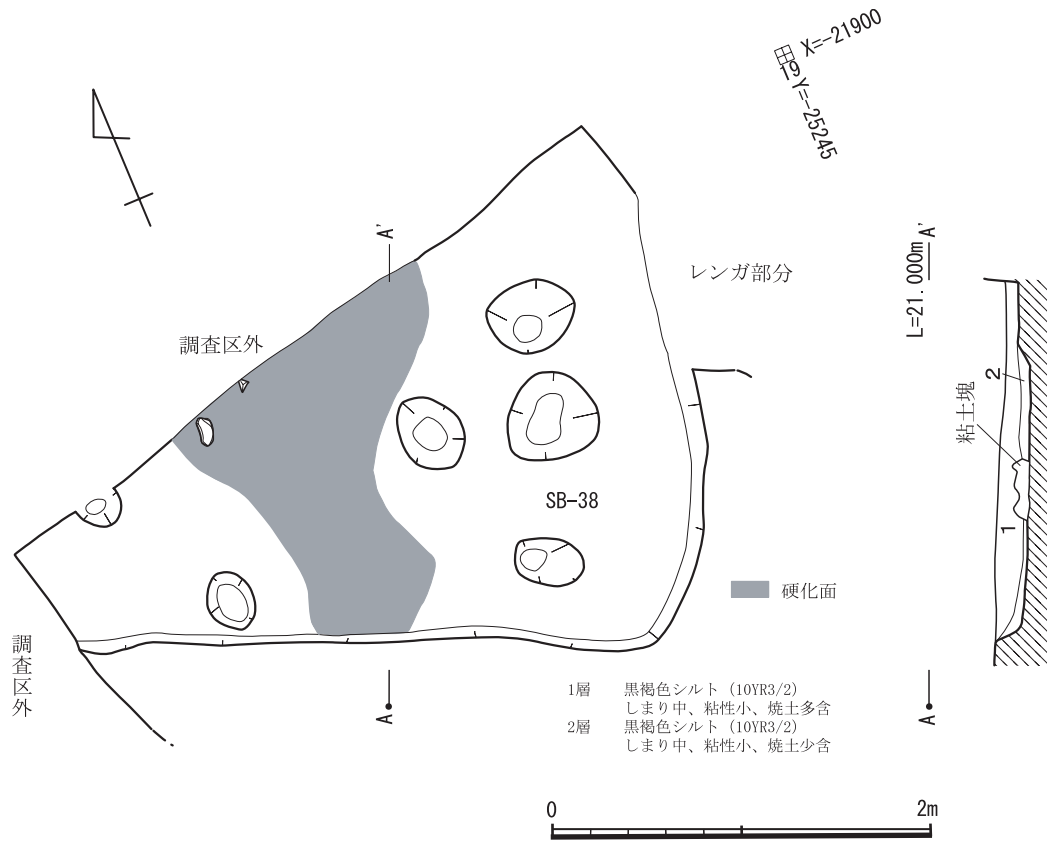
第19図 SB-32 遺構実測図



第20図 SB-32 完掘実測図



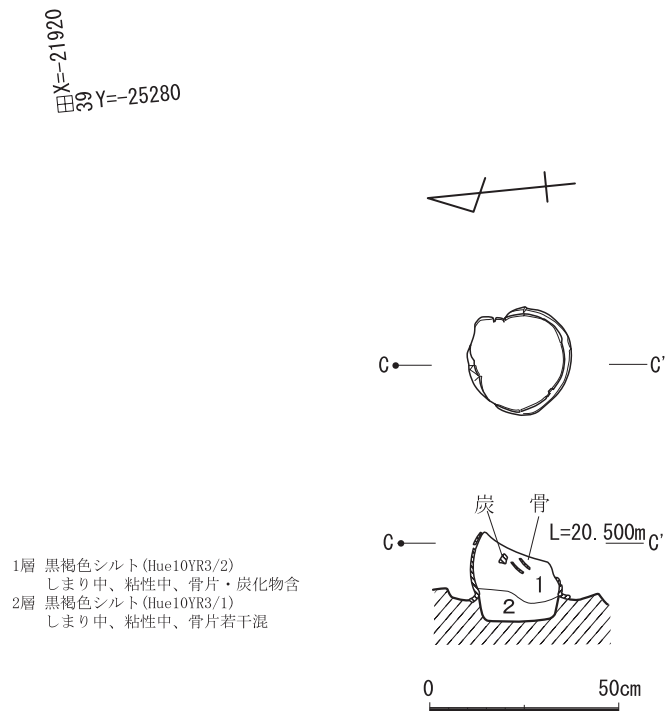
第21図 SB-36 遺構実測図



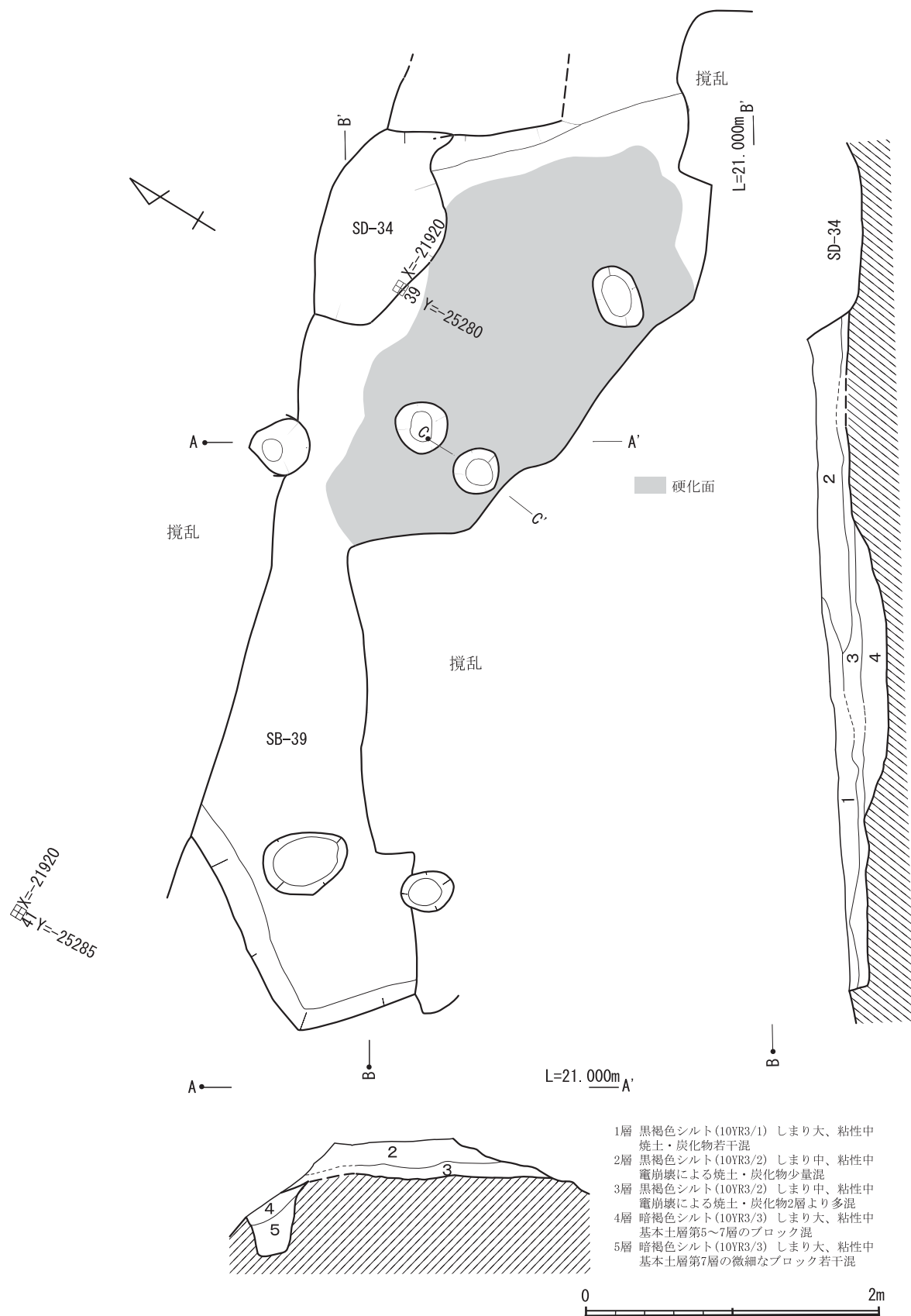
第22図 SB-38遺構実測図

攪乱を受けて破壊されていたが、甕の中から火を受けた骨片が見つかった。この甕内の埋土はすべて採集し、骨片の分析を依頼した（第三章第5節参照）。この甕の下にはピットがあり、口縁部の下の埋土からも骨片が検出されたことから、このピットは甕が埋設されたときに掘られたと考えられる。

住居と甕とは年代差があり、たまたま住居内だったと思われる。住居ではこのピットも含めて6基のピットが検出されたが、どれが柱穴なのかは確定できなかった。



第23図 SB-39内埋設土器実測図(S: 1/20)



第24図 SB-39 遺構実測図

2 溝、道路

今回、大江遺跡群で検出した溝や道路状遺構は、8条である。その中で、特に注目すべきものは、古代の官道と考えられる遺構（SX-6、SX-17、SX-23）である。これらは調査区中央付近を北西から南東にかけて走っていた。道路と考えられる硬化面は3層に分かれており、時代とともに道幅に変化が見られる。また東側には、官道に伴うものと考えられる柵列状のピット群（SX-40）が検出された。

調査区東側で検出されたSD-1は南北に走り、幅5m以上、深さ1.5m以上と大きいものである。また、北側と南側とでは明らかに掘削の仕方が違っており、北側はU字型の掘り込みに、南側はV字型の掘り込みになっていた。

SD-1（第25図、26図）

A～D-16、17グリッドで検出された。調査区北壁から調査区南壁に向かってほぼ南北に走っている。幅は5m以上、深さは1.5m以上ある。埋土は4層に分けられ、上から順に埋1層から埋4層となっている。このうち埋4層は、調査区の南側半分のみ確認され、北側半分には存在しない。この埋4層の硬化面と北側の底面は、ほぼ面がそろそろ。北側と南側の間には段差があり、そこが掘削時の境界線と考えられる。掘削したときに北側と南側とで段差ができたために南側に埋4層を形成し、段差をなくしたのではないかと考えられる。埋土に含まれていた遺物は、緑釉陶器などもあり、中世の流れ込みによって堆積したと考えられる。

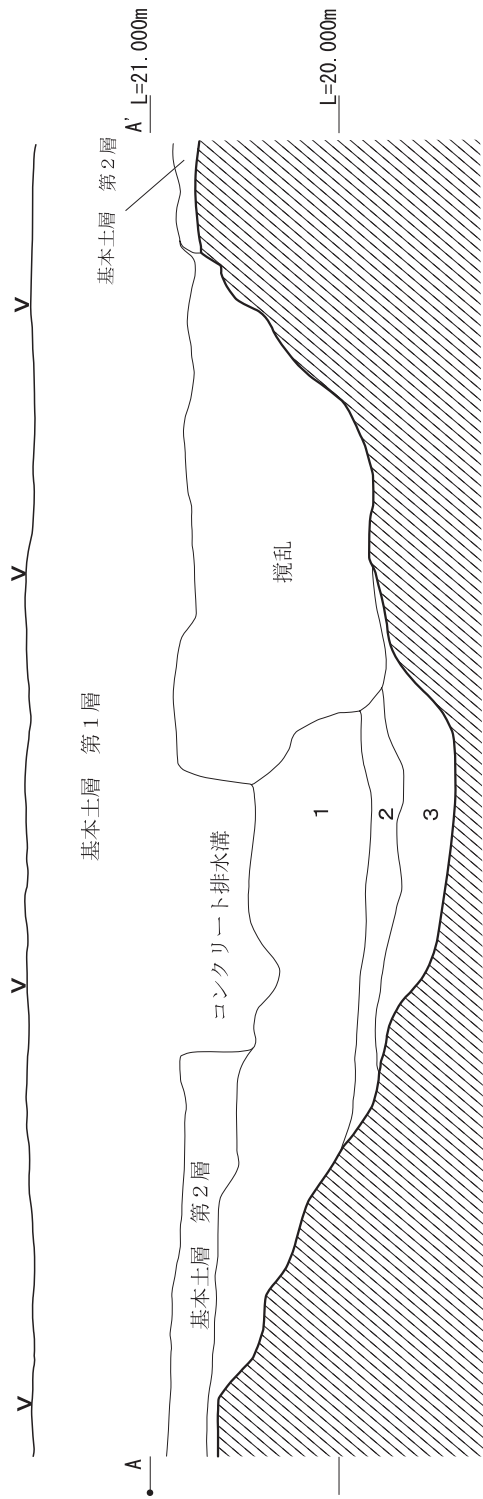
SX-2（第27、28図）

D-14～B-14グリッドにかけて検出された。ほぼ南北にまっすぐ走っている。幅は広いところで約0.8mあり、硬化面はしっかりと残っていた。おそらく里道のようなものであろう。掘方の形状は、両端からなだらかに中心に向かって落ち込んでいる。掘り込んだあと土を充填して道を作ったと思われる。また、道の下層から竪穴住居跡が切り合って検出されており、道は住居跡よりも以降の時代に形成されたものであると考えられる。

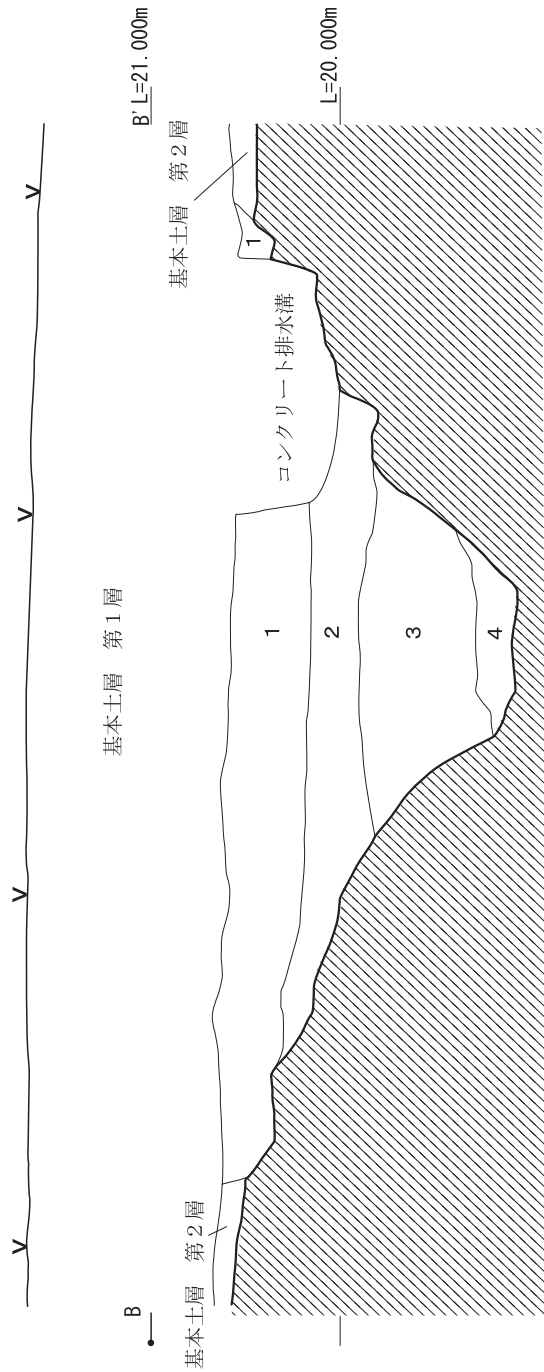
SX-6、SX-17、SX-23、SX-40（第29、30、31、32図）

D-11～E-12グリッドにかけて検出された。古代の官道と考えられる遺構を含めた複合遺構である。北西から南東に向かってまっすぐに走っている。検出された硬化面の状況などから道路状遺構であると判断した。また、遺構中央付近に攪乱があったため、それを取り除きサブトレンチとして断面を確認したところ、3段の硬化面を検出した。そこで形成時期が新しい硬化面から順にSX-6、SX-17、SX-23と番号を付した。

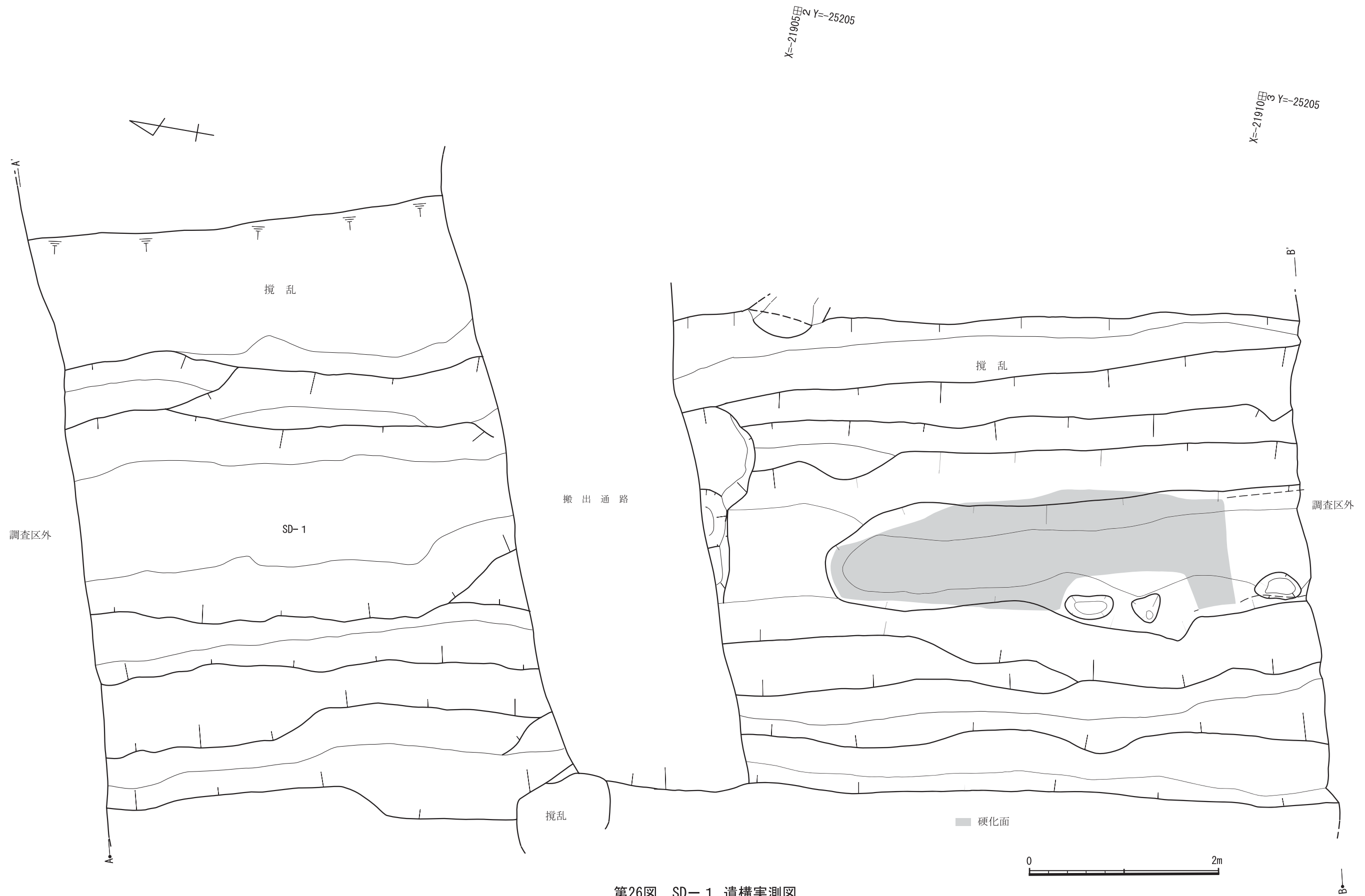
SX-6は、この複合遺構の中で最も新しいと考えられる遺構であるが、道幅は広いところで約0.6mほどである。遺構の性格としては、SX-2と非常によく似ている。またSX-6は、南側調査区外でSX-2と45°程度の角度で交差すると考えられる。



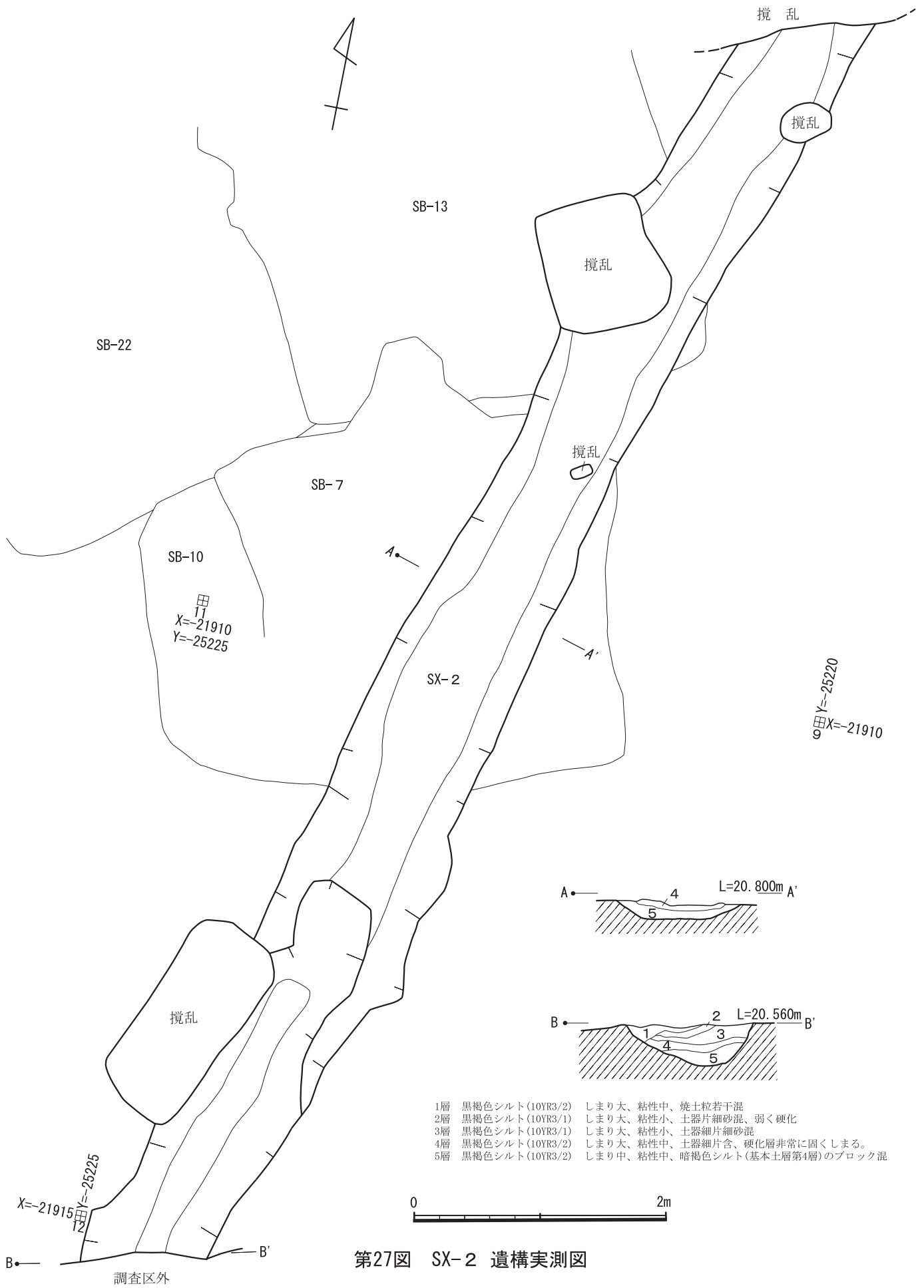
- 1層 黒褐色シルト(10VR3/2) しまり大、粘性中、暗褐色シルト(基本土層第3~6層)と明黄褐色粘土(基本土層第7層)のプロック(0.5~2cm)混
- 2層 黒褐色シルト(10VR2/2) しまり中、粘性中、暗褐色シルト(基本土層第3~6層)と明黄褐色粘土(基本土層第7層)のプロック(0.5~4cm)混
- 3層 黒褐色シルト(10VR2/3) しまり大、粘性中、暗褐色シルト(基本土層第3~6層)と明黄褐色粘土(基本土層第7層)のプロック(0.5~6cm)混
- 4層 黒褐色シルト(10VR3/2) しまり大、粘性中、明黄褐色粘土(基本土層第7層)のプロック(0.5~4cm)多混、全体が硬化



第25図 SD-1 土層断面図



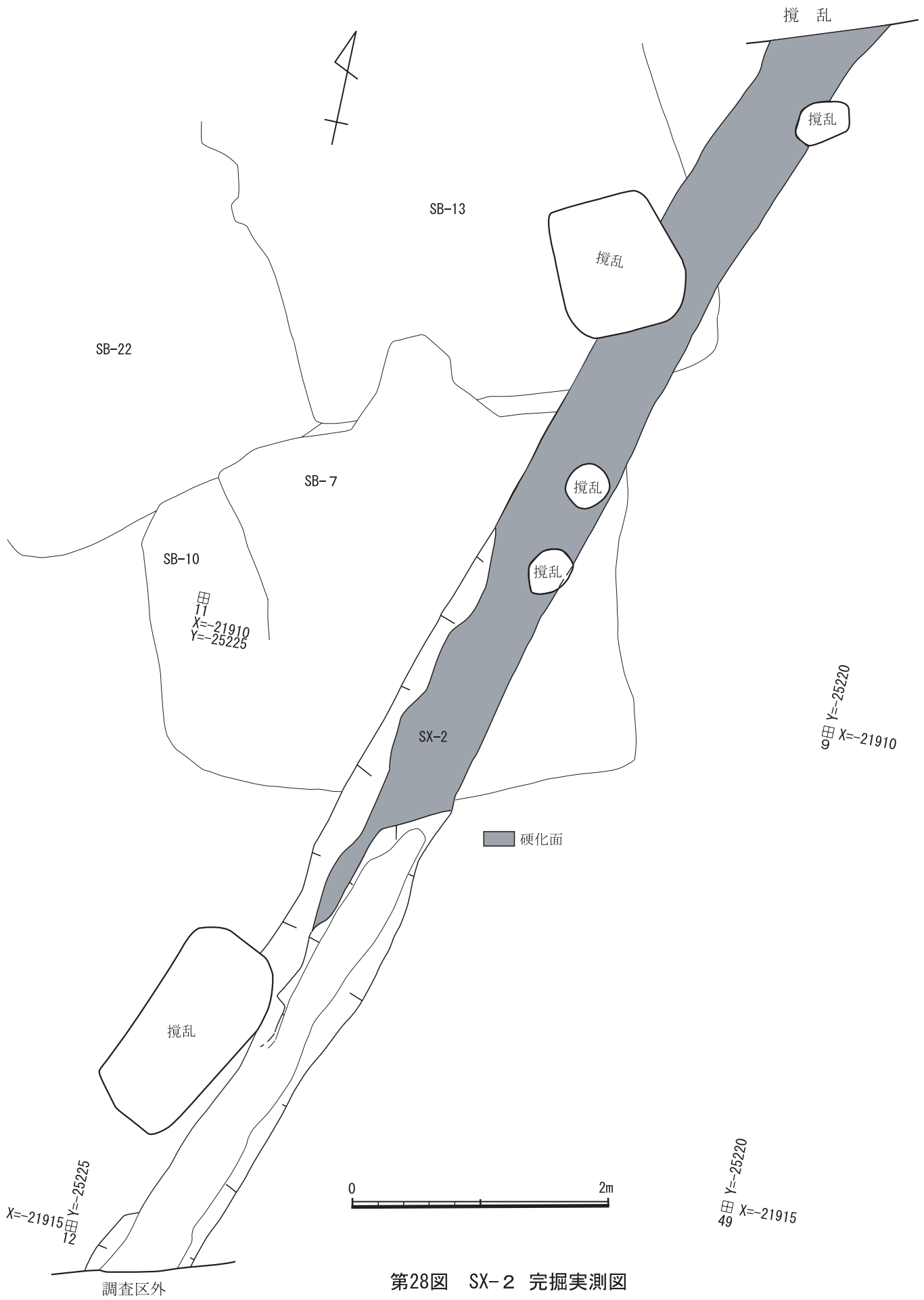
第26図 SD-1 遺構実測図



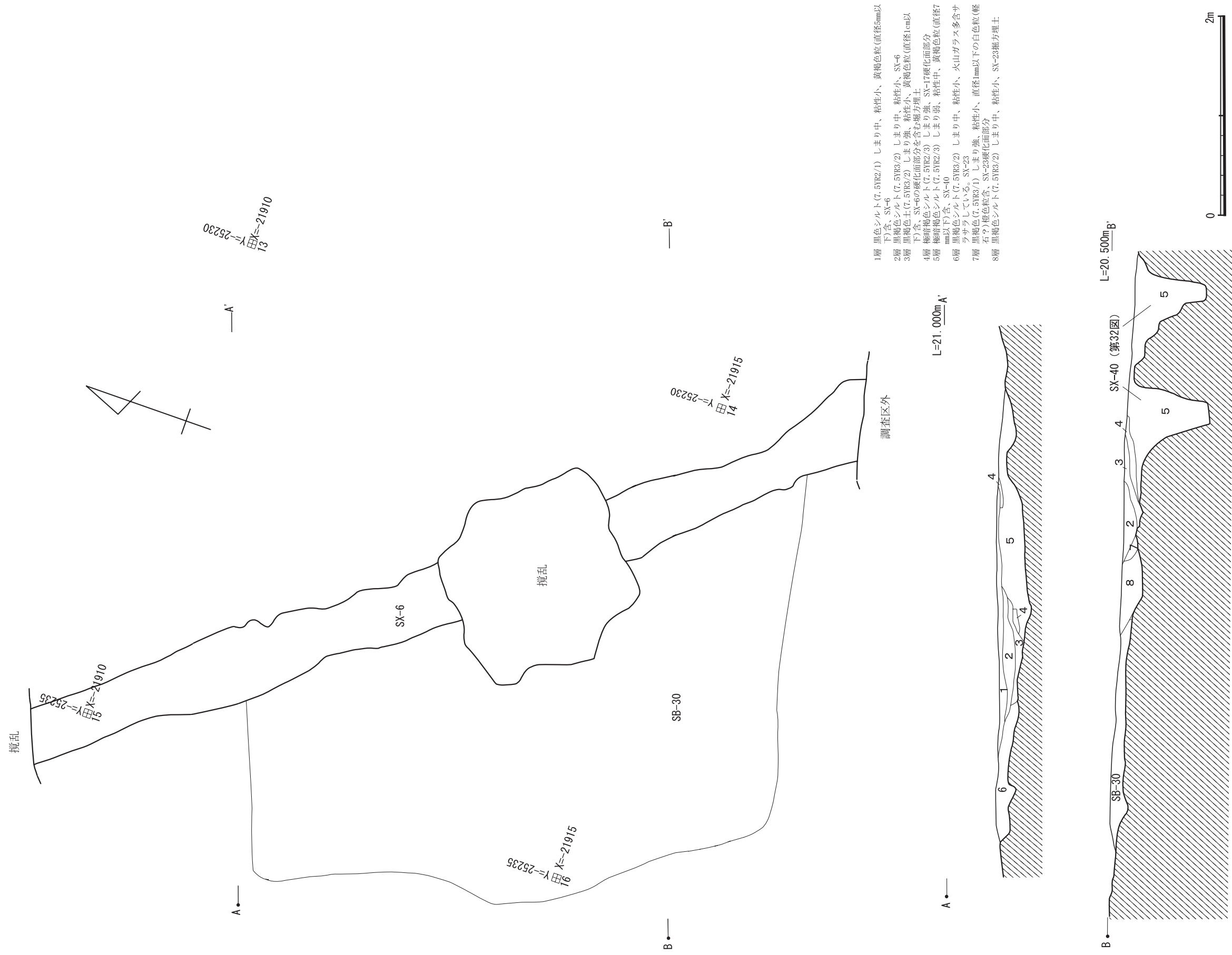
- 1層 黒褐色シルト(10YR3/2) しまり大、粘性中、焼土粒若干混
- 2層 黒褐色シルト(10YR3/1) しまり大、粘性小、土器片細砂混、弱く硬化
- 3層 黒褐色シルト(10YR3/1) しまり大、粘性小、土器細片細砂混
- 4層 黒褐色シルト(10YR3/2) しまり大、粘性中、土器細片含、硬化層非常に固くしまる。
- 5層 黒褐色シルト(10YR3/2) しまり中、粘性中、暗褐色シルト(基本土層第4層)のブロック混



第27図 SX-2 遺構実測図



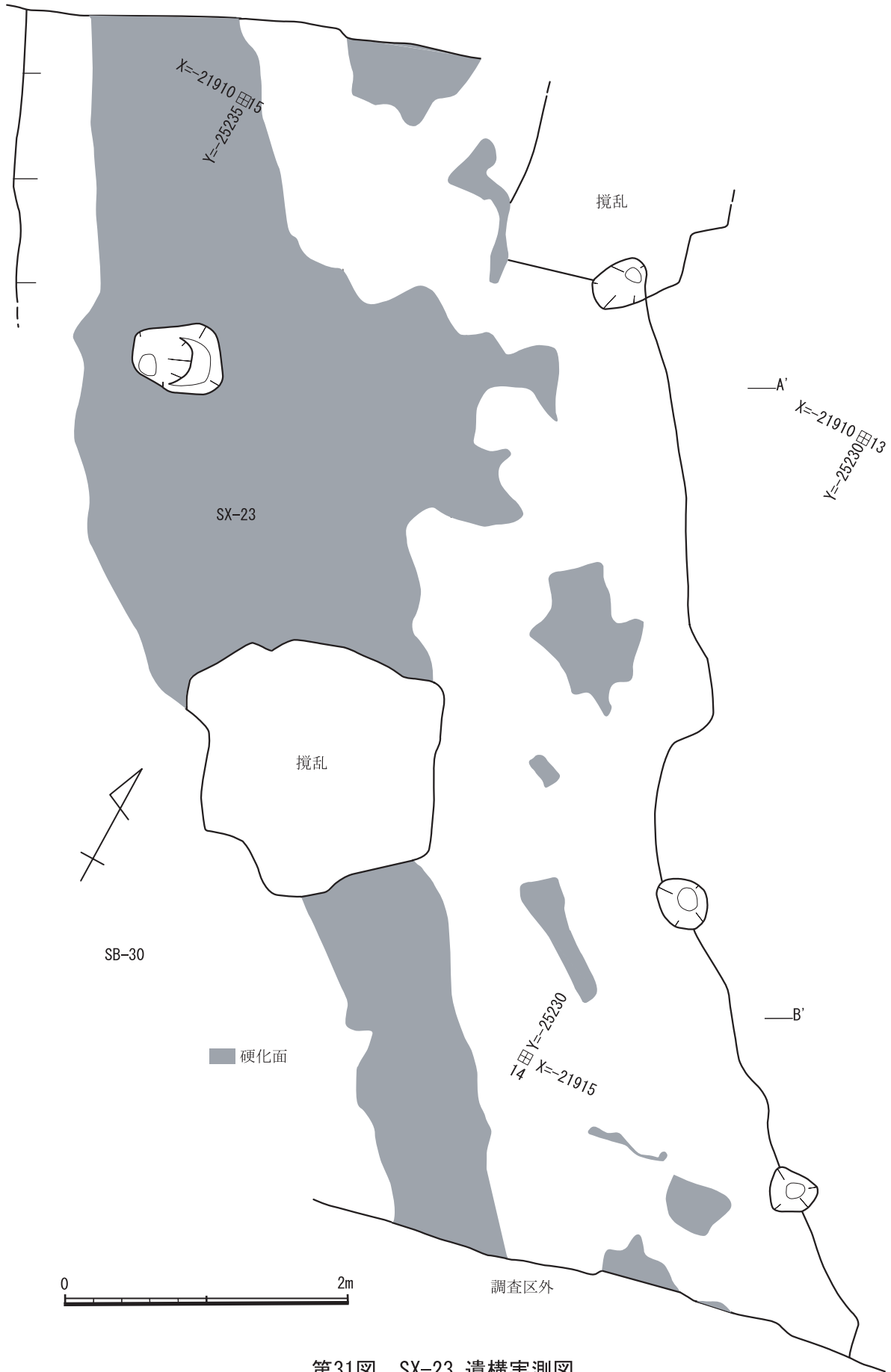
第28図 SX-2 完掘実測図



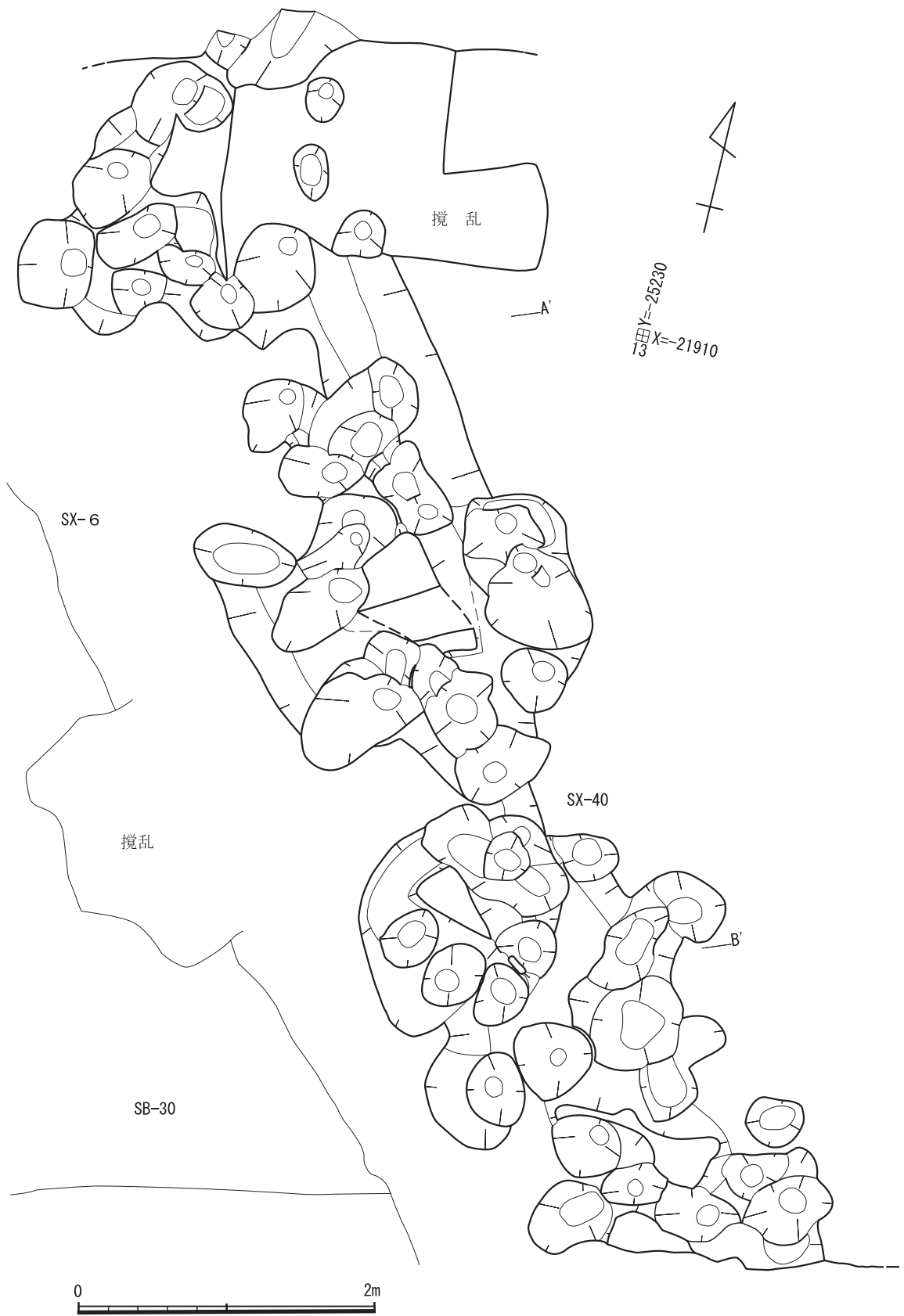
第29図 SX-6 遺構実測図 及び SX-6、17、23、40 土層断面図



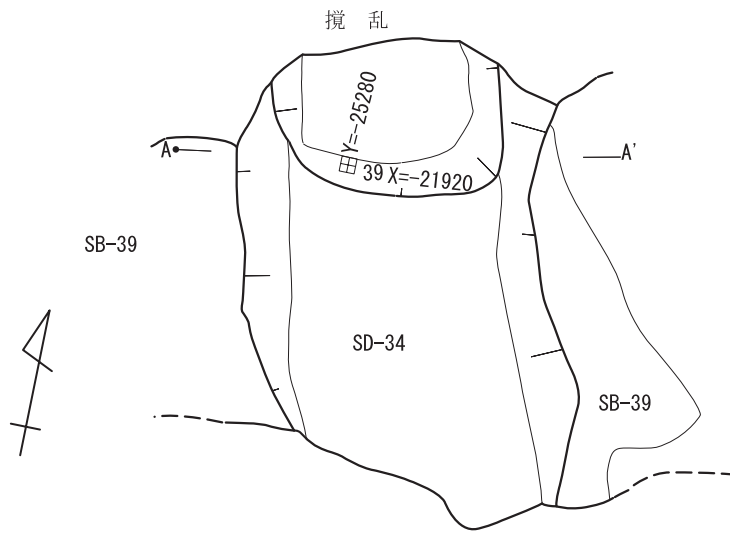
第30図 SX-17 遺構実測図



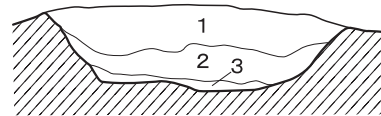
第31図 SX-23 遺構実測図



第32図 SX-40 遺構実測図

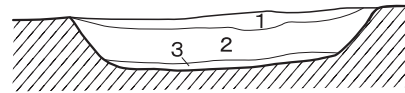


A ● L=21.000m A'

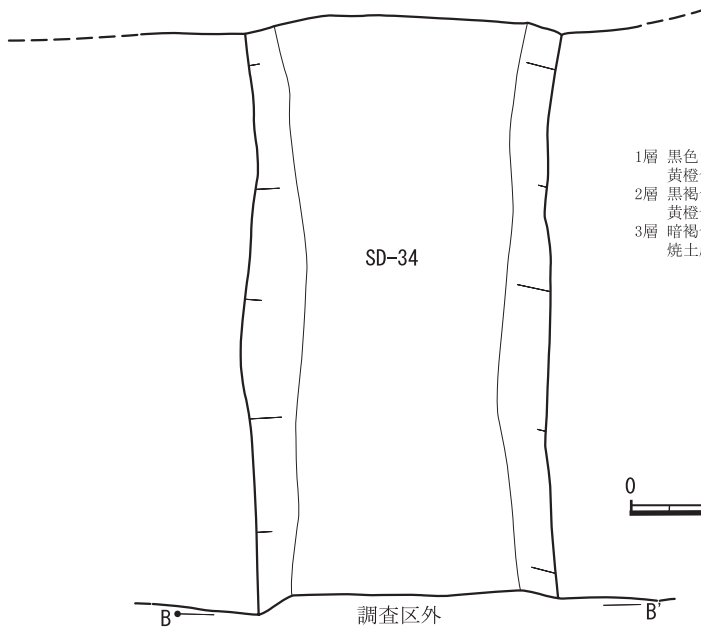


攪乱

B ● L=21.000m B'



X=-21925
Y=-25280
40



- 1層 黒色シルト(10YR2/1) しまり中、粘性中、黄橙色粘土のブロック混
- 2層 黒褐色シルト(10YR3/1) しまり中、粘性中、黄橙色粘土のブロック混、1層より若干少
- 3層 暗褐色シルト(10YR3/3) しまり大、粘性中、焼土炭化物含



第33図 SD-34 遺構実測図

SX-17は、SX-6の下層より検出された遺構である。西側はSX-6に切られていた。また、その他の部分もSX-6形成時および攪乱された時に失われたようであり、遺構としての残存状況は悪く、硬化面の残存もまばらであった。そのため、道幅などは確認できなかった。

SX-23は、SX-17の下層より検出された。SB-30を西側で切っている。硬化面の西側の縁は、本来それほど硬くない土層が圧力を受けるなどして硬化したものと思われるが、中央部は地山層（基本層序第5層）であり、地山の硬い土が、さらに硬化していた。形状としては道路の両端が上がっていて、中央部に向かって落ち込むレンズ状になっている。東側は、ほんの一部、硬化面が切れ切れに残るのみで、上から掘り込まれた柵列状の遺構（SX-40）で攪乱されていた。道幅は東西約3mである。熊本市教育委員会による近辺の発掘調査事例などと比較して、同様の形状の硬化面であること、道路に沿って柵列状の遺構が並んでいるなど、しっかりした造りになっていることなどから、古代の駅路に準じるクラスの官道ではないかと考えている。

SX-40は、SX-23の東側で検出された柵列状遺構である。SX-23の硬化面を掘り抜いて形成されており、SX-23の方向を意識して造られたと思われる。はじめは、樹痕と考えたが、樹痕のように穴の形に乱れがなく、2対1組のような規則性があったため人為的な工作物と判断した。しかし、柱穴としては深さが約1.5m～2mと深く、はっきりとした用途は不明である。ただ、その深さや官道沿いに位置することを考慮すると、高い塀や柵のようなものを、道路に沿って配置したものと考えられる。

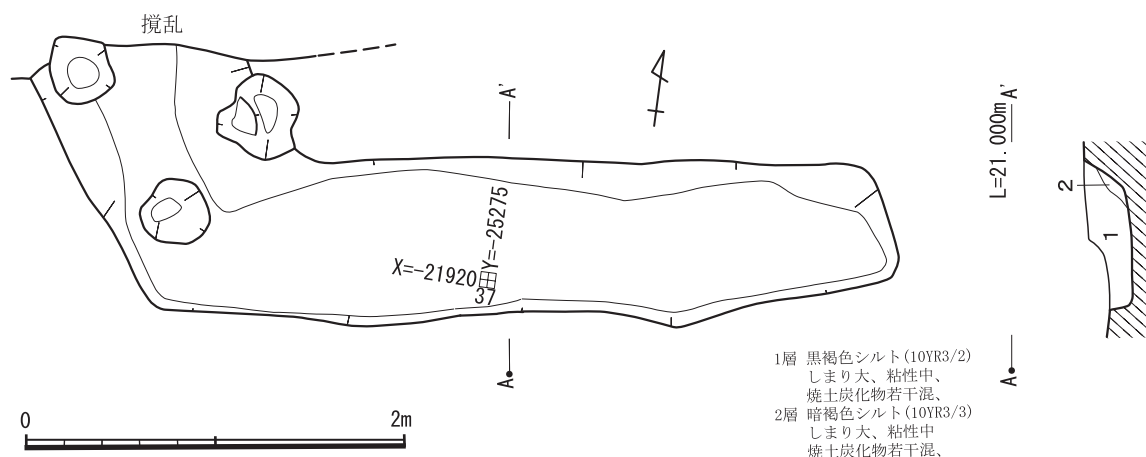
遺構の形成は、古い順に SB-30→SX-23→SX-40→SX-17→SX-6 となる。

SD-34(第33図)

E-3～G-3グリッドにかけて検出された。若干、西に傾くがほぼ南北に走っている。傾きといい、SD-1とほぼ平行である。遺構の半分以上は、攪乱に切られている。またSD-34は、SB-39を切っているのでSB-39よりも新しいといえる。溝幅約1.6m、深さ約0.3cmほどである。底部は平らな感じになっていた。また、特に硬化したような様子はなかった。

SD-37(第34図)

E-3、E-4グリッドにかけて検出された。SB-39のすぐ東側にあり、L字状に曲がっている。北側は、攪乱で消失し、東側に曲がって4mほど行ったところで掘り込みが終わる。周囲の攪乱が激しく広がりや他の遺構との関係は不明。遺物もほとんどなかった。



第34図 SD-37 遺構実測図

3 土坑

今回、大江遺跡群で検出された土坑は10基である。その多くは、遺物も少なく時期を判断するには材料が乏しい。

SK-4 (第35図)

D-14グリッドで検出された。遺構の南半分は調査区外にでている。直径は約2m、ほぼ円形の土坑である。深さは、約0.5mである。SX-5を切っている。遺物としては、高杯の脚部などが出土。遺物は、8世紀末の可能性が高い。土坑の用途は不明。

SK-20 (第36図)

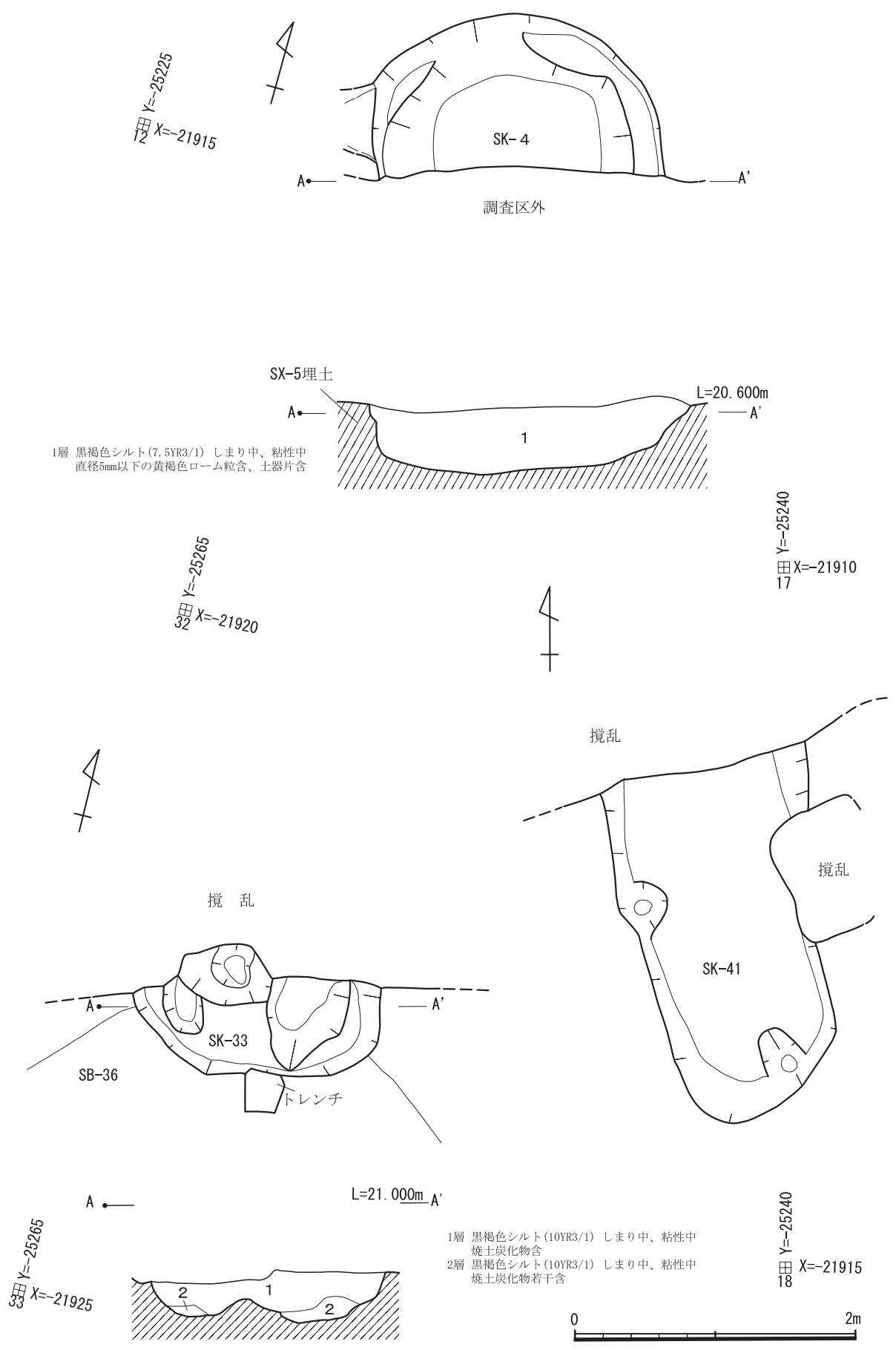
A-17グリッドで検出された。遺構の北側一部は調査区外にでている。直径は約0.6m、円形の土坑である。深さは、約0.3mで埋土は2層に分けられる。焼土や炭化物を若干含む。

SK-24 (第37図)

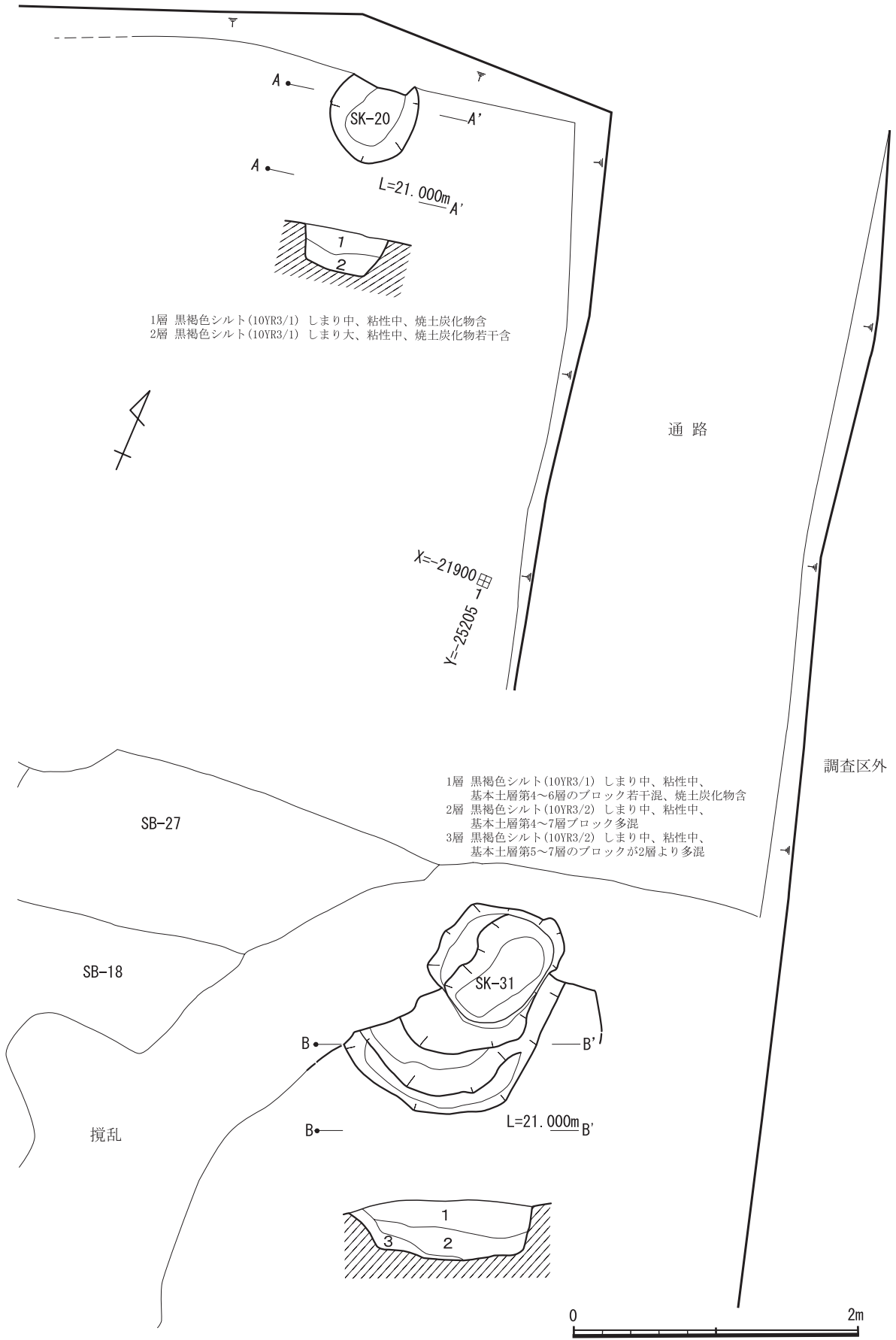
C-16グリッドで検出された。遺構の東側上端の一部をSD-1に切られる。南北約1.6m、東西約0.6mの細長い楕円の形をしている。埋土は3層に分けられ、深さは約1m以上もある。土坑の性格は不明。

SK-25 (第37図)

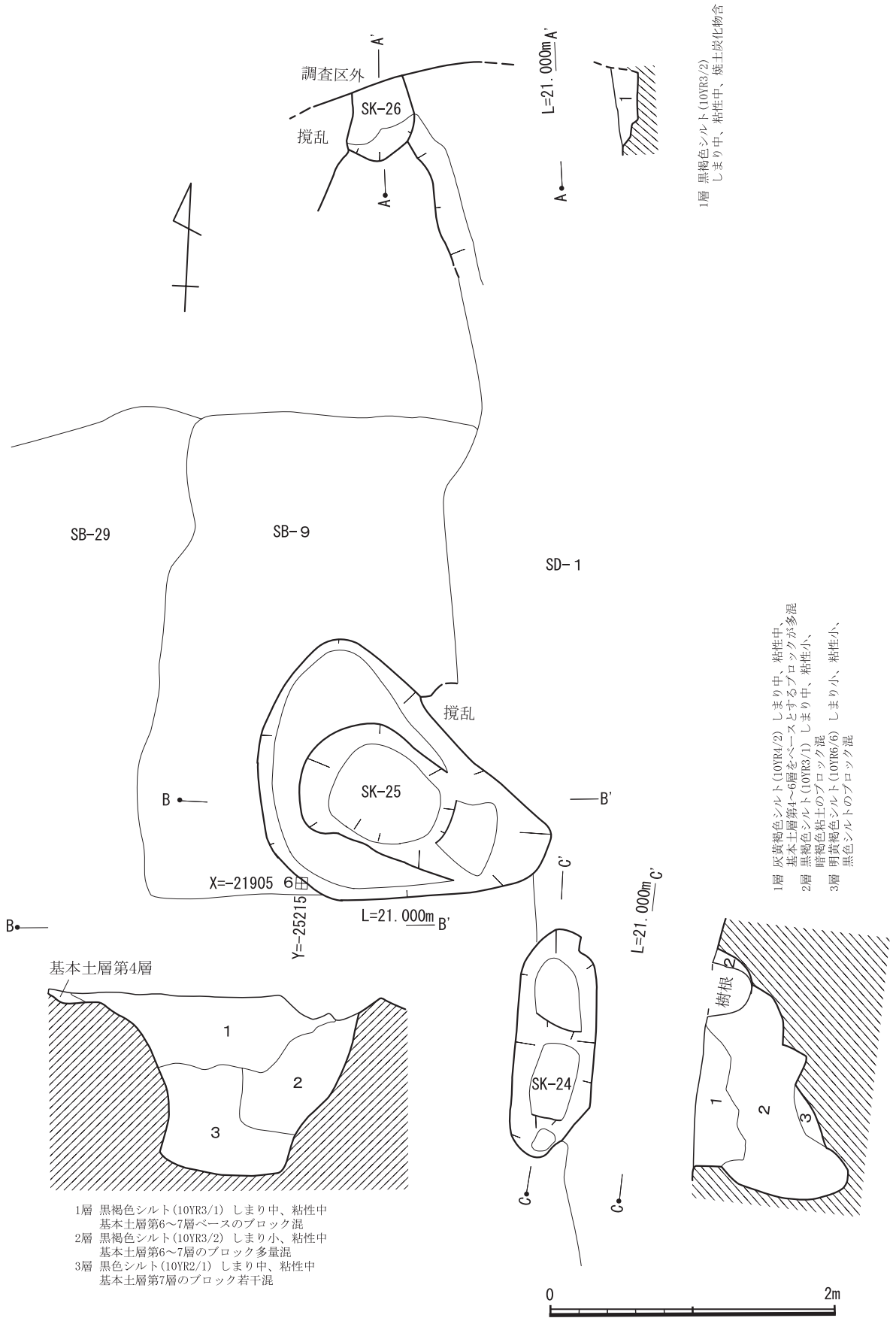
B-16グリッドで検出された。上端全体をSB-9に切られる。埋土は3層であるが、埋2層は埋1層直下から垂直に掘り込まれていて、埋2層と埋3層との境がくびれたようになっているため、埋3層が堆積した後、掘り返され、その後、また堆積したと考えられる。直径約1mの円形で深さは1.2m以上ある。土坑の性格は不明。



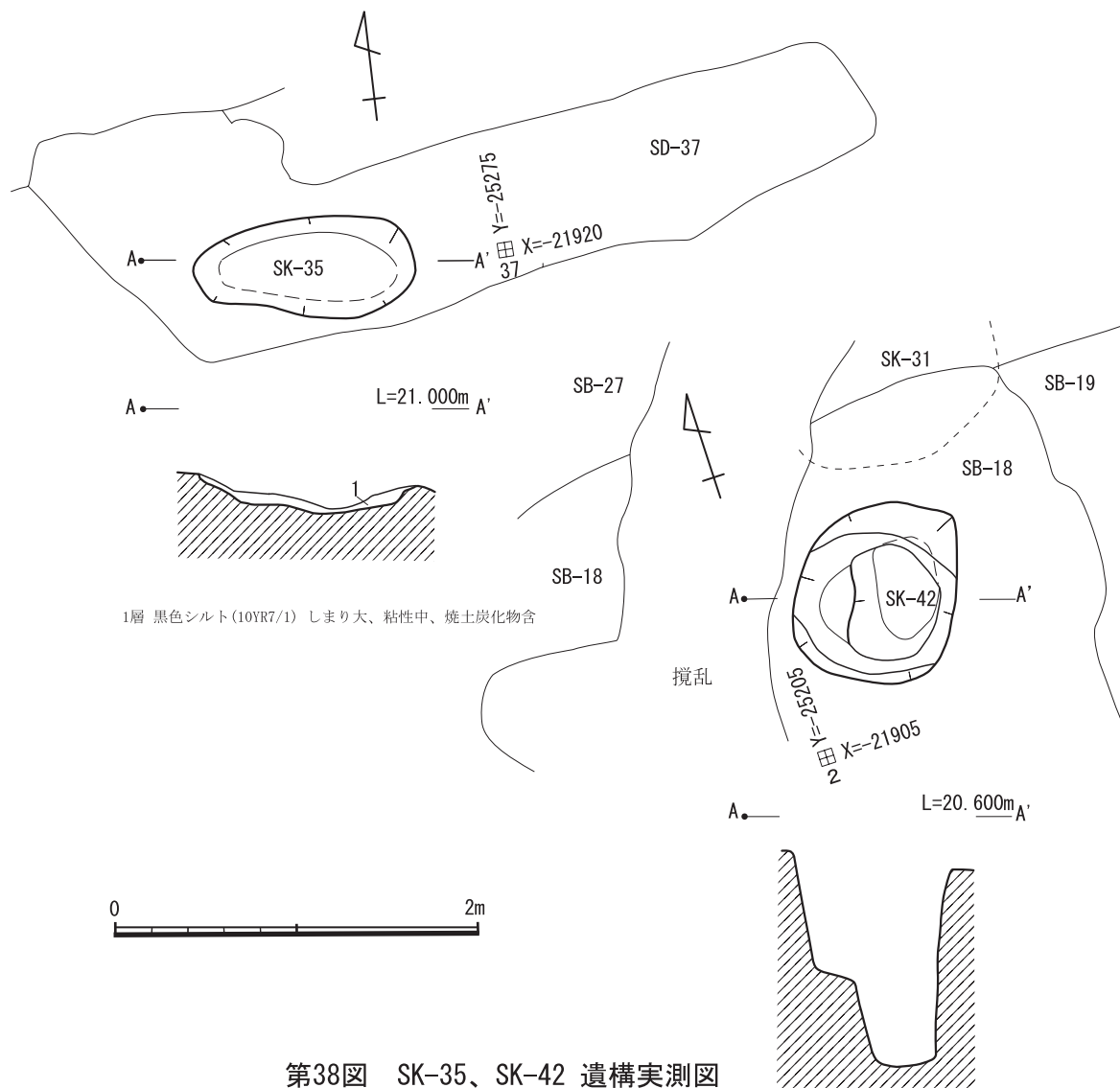
第35図 SK-4、SK-33、SK-41 遺構実測図



第36図 SK-20、SK-31 遺構実測図



第37図 SK-24、SK-25、SK-26 遺構実測図



SK-26(第37図)

B-16グリッドで検出された。北側が調査区外に出ていて、東側はSD-1に切られ、西側は攪乱に切られており、全体の様子は不明である。深さは約0.2mである。埋土は1層で焼土や炭化物を含んでいた。

SK-31(第36図)

B-18グリッドで検出された。上部全体をSB-18およびSB-19に切られる。直径約0.8m、深さ約0.4mで円形に近い。埋土は3層に分けられ、黄褐色ブロックを含み、最下層の埋3層では、焼土と炭化物が若干混じる。

SK-33(第35図)

F-6グリッドで検出された。北側半分は最下部を残して攪乱に切られ、西側はピットに深く掘り込まれる。直径約1.8m、深さ約0.4mで円に近いと推定される。埋土

は2層でともに黒褐色シルトで、焼土および炭化物を含む。

SK-35(第38図)

E-3グリッドで検出された。SD-37を切っている。東西約1.8m、南北約0.6mの楕円である。深さは浅く約0.1m、上部がほとんど攪乱に切られているため、残存状況はよくない。土器の小破片が出土したが時期は不明。

SK-41(第35図)

D-11グリッドで検出された。埋土は黒褐色シルト1層のみ。黄褐色土粒を含む。南北約2.4m、東西約1.2mの長方形に近い形をしている。深さは、約0.4mである。土器片が出土したが時期は不明。底面に新たにピットが2基検出されたが、土坑とは直接関連はないと思われる。

SK-42(第38図)

B-18グリッドで検出された。SB-18に切られている。直径約0.8m、検出面からの深さ約1.2mである。埋土は2層に分けられ、ともに黒褐色シルトであるが、下層の埋土は、ロームのブロックが若干混じる。遺物は土器細片が若干出土したが時期は不明。なお、埋土が崩落したことにより土層断面は実測できなかった。

4 その他

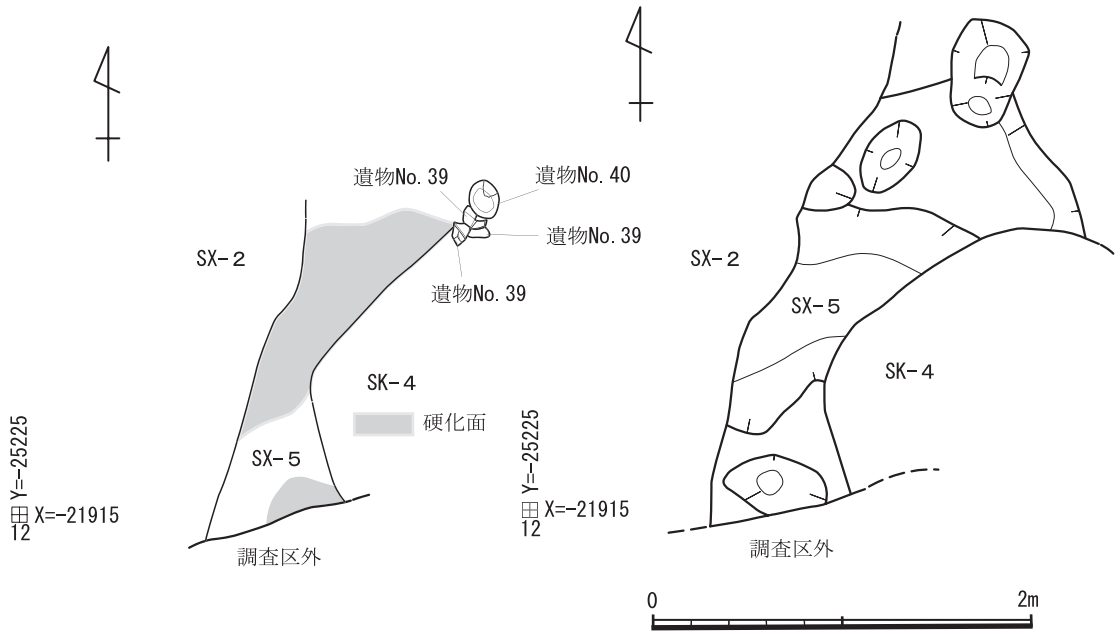
遺構として番号は付したが、性格のわからなかった遺構が2つあった。

SX-5(第39図)

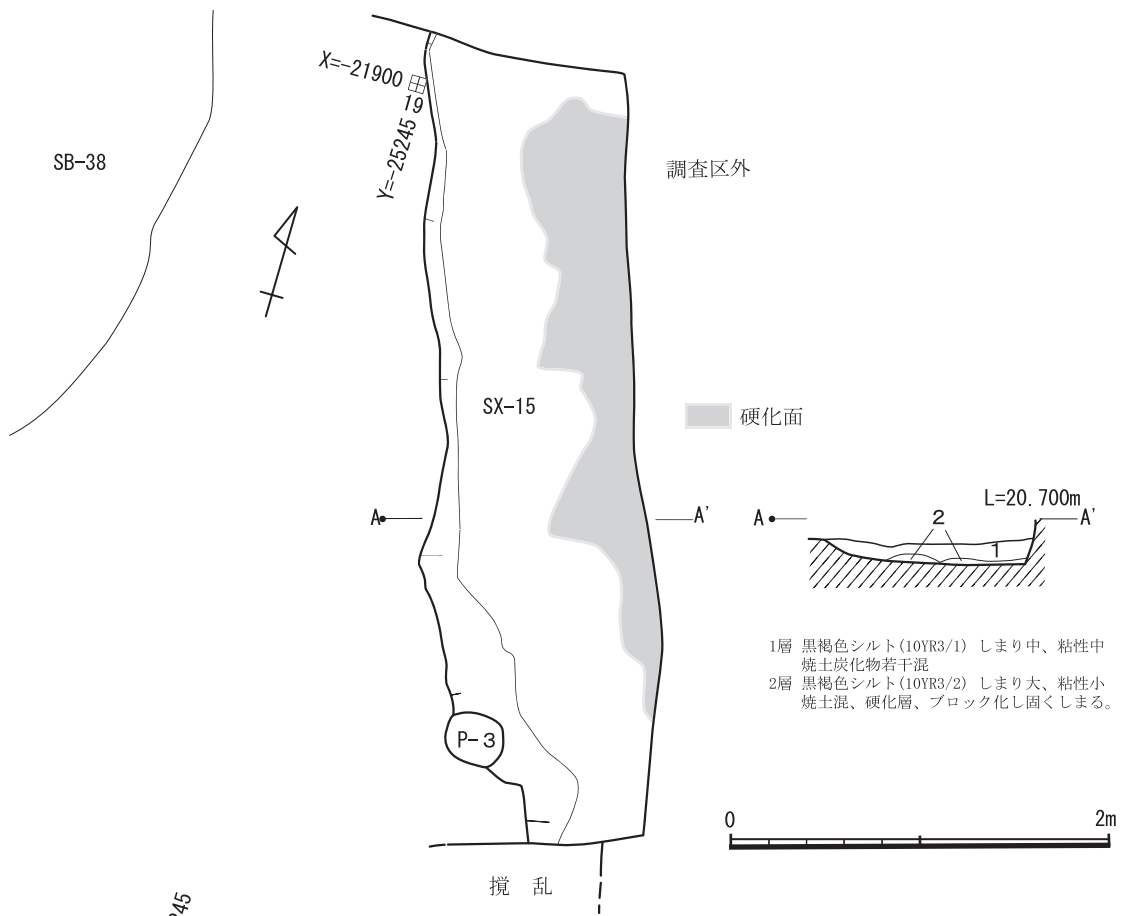
D-14グリッドで検出された。SX-2及びSK-4に切られている。検出時点で硬化面しか残っていなくて、硬化面直上に土器（蓋、甕形土器胴部）が出土した。蓋の特徴から8世紀後半のものと推測される。残存状況が悪く、確かな判断は難しいが、硬化面が広がり、その直上から土器も出土したので住居だった可能性がある。

SX-15(第40図)

B-10グリッドで検出された。旧陸軍施設のレンガ土台の東側にあたる。硬化面がそれほど強くないため、道路状遺構とするには疑問が残る。またSX-6などとは方向に近いが、南側を大幅に攪乱されていること、遺構配置図でも若干西側にずれていることなどから同一のものであるとは言い切れない。



第39図 SX-5 遺構及び完掘実測図



第40図 SX-15 遺構実測図

第3節 遺物

1 土器

SB-3 1は土師器高杯である。内面中央はやや剥落しており、調整等は不明である。

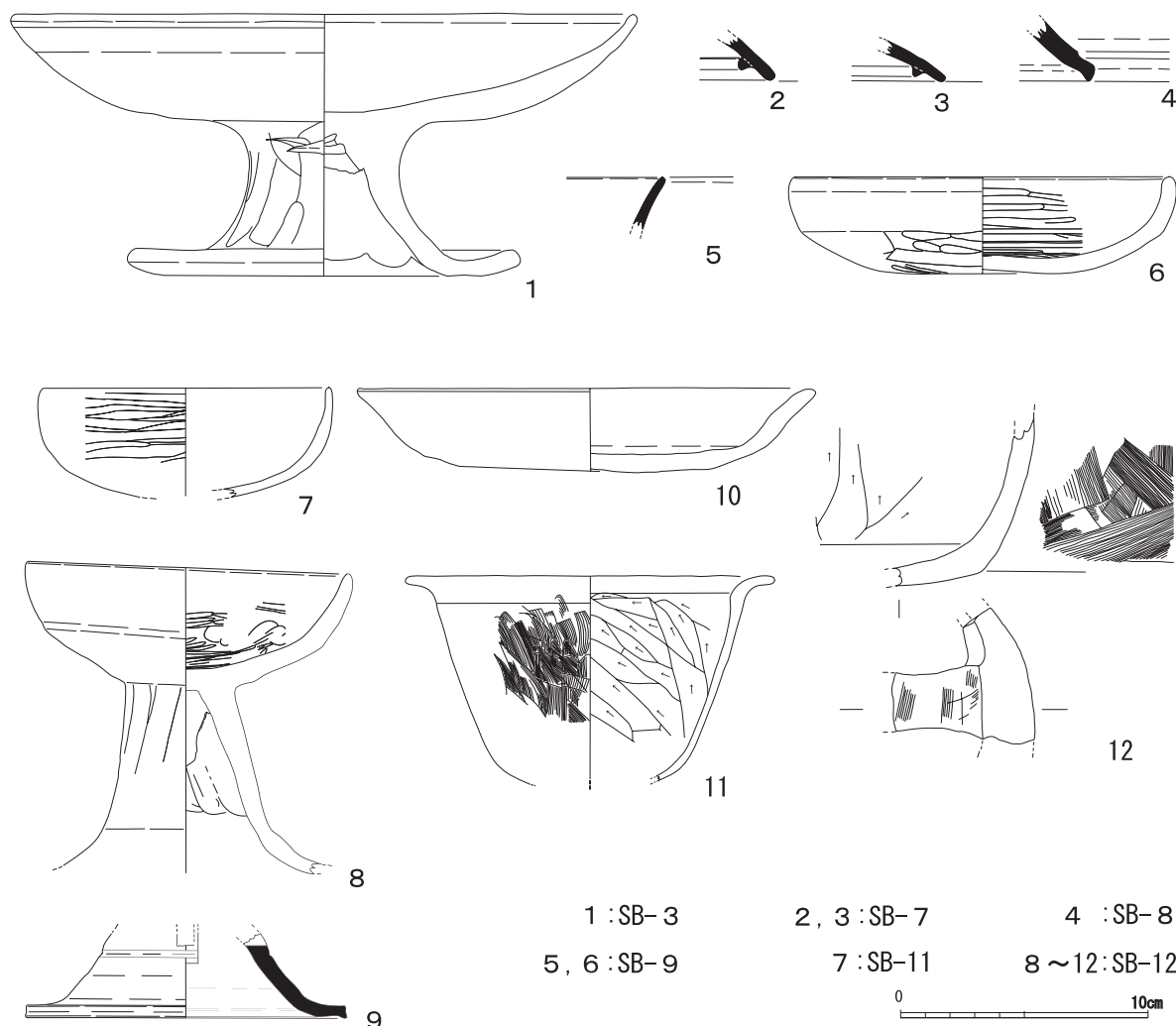
SB-7 2、3は須恵器杯蓋である。3は外面に自然釉がかかる。

SB-8 4は須恵器高杯の脚端部である。

SB-9 5は壺か平瓶の口縁部である。6は土師器杯である。内外面とも丹念に厚く丹塗りされている。

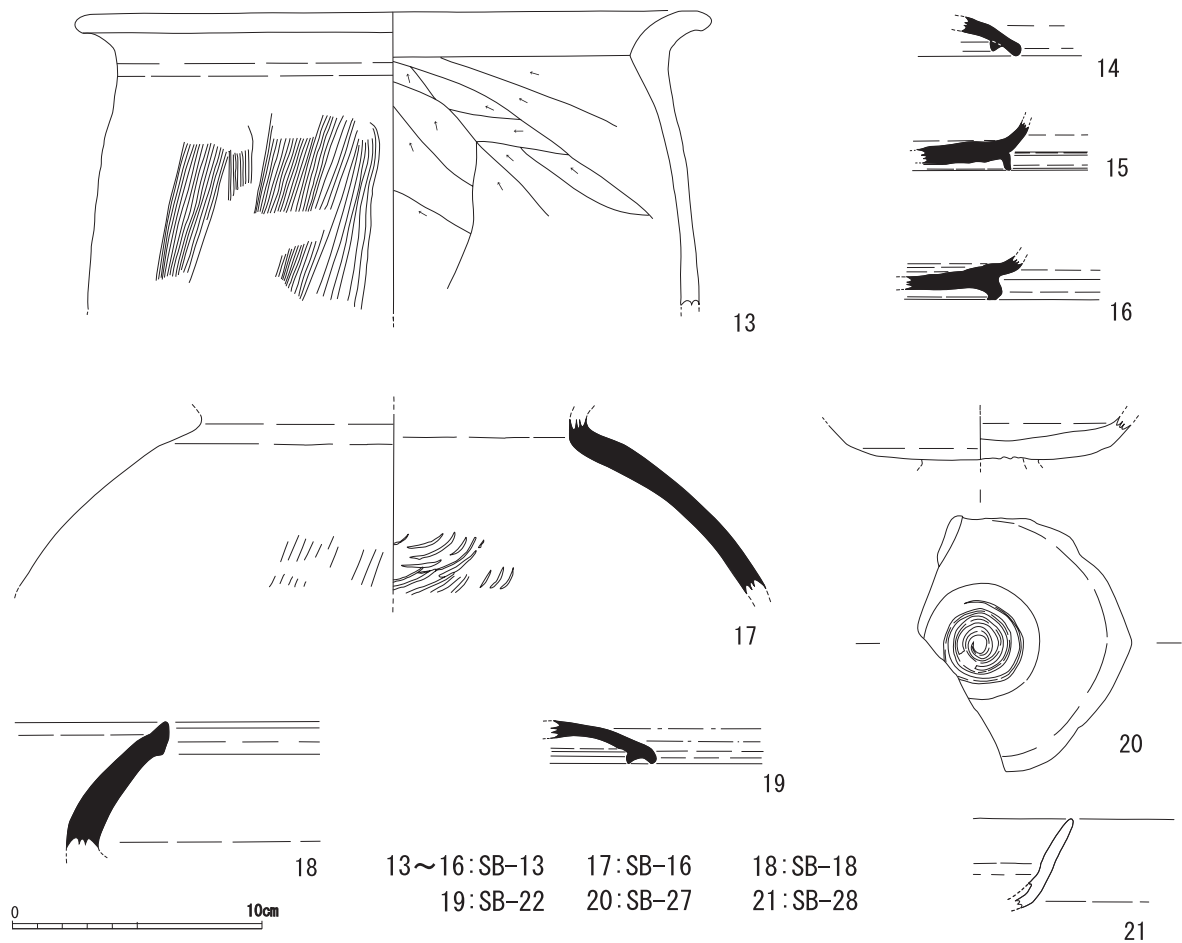
SB-11 7は土師器杯である。須恵器杯蓋模倣の杯である。内外面とも黒色処理（漆塗り）が施される。また、口縁部の一部にヘラのようなもので、長さ4mm程度の上下方向の刻みを20本ほど入れてある。須恵器などに見られる口縁部打ち欠き儀礼と同等の意味のあるものと思われる。

SB-12 8は土師器高杯である。杯部外面には沈線が1条巡る。また、杯部内面は黒色処理（カーボン吸着）が施されている。9は須恵器高杯である。透かしの下に1条の沈線が巡る。透かしはおそらく3方向に施される。10は土師器杯である。



1 : SB-3 2, 3 : SB-7 4 : SB-8
5, 6 : SB-9 7 : SB-11 8 ~ 12 : SB-12

第41図 出土土器実測図（1）



第42図 出土土器実測図（2）

内面は丁寧に赤色顔料が塗られている。11は土師器甕である。ハケは上から下方向に施されている。12は土師質の甕である。蒸気孔は棧渡しタイプのうち粘土による棧を渡すタイプである。

SB-13 13は土師器甕である。14は須恵器の杯蓋である。15、16は須恵器杯である。

SB-16 17は須恵器甕である。いわゆる赤焼け須恵器である。外面はタタキ目をナデ消している。内面は頸部付近の同心円文当て具痕がナデ消されている。

SB-18 18は須恵器甕である。外面に黒色の自然釉がかかる。

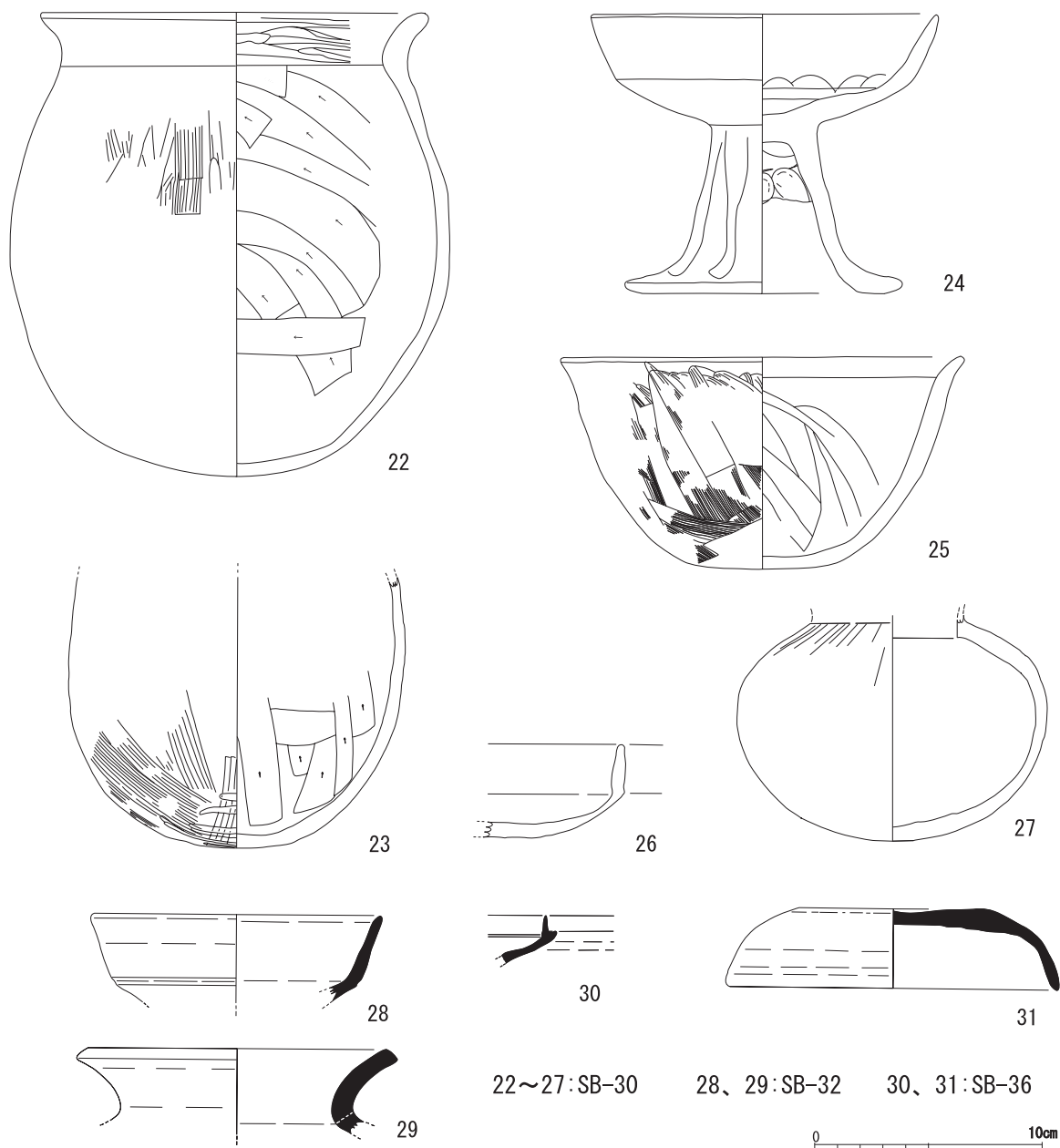
SB-22 19は須恵器蓋である。精緻な調整を施している。

SB-27 20は土師器高杯である。底部には、杯部と脚部の接合を良くするための渦状の刻み目が施される。

SB-28 21は土師器高杯の口縁部である。内外面とも摩滅しており、調整技法は定かではない。

SB-30 22、23は土師器甕である。22は外面底部に黒斑がある。23はやや小型の甕である。24は土師器の高杯である。杯底部と脚部の内外面にケズリを施す。25は土師器の甕である。26は土師器杯である。須恵器杯蓋模倣の杯である。内外面に黒色処理（カーボン吸着）が施される。

SB-32 28は須恵器の無蓋高杯である。29は須恵器甕の口縁部である。外面に灰かぶ



第43図 出土土器実測図（3）

りしているため、逆位での焼成と思われる。

SB-36 30は須恵器杯である。器壁が薄く精緻な作りである。31は須恵器の杯蓋である。内面中央部には不定方向の仕上げナデを施す。外面にはヘラ切り離しの痕跡が残る。

SB-39 32は土師器の甕である。この甕は住居内南側から逆位状態で出土したものである。中に残っていた土壌からは、火を受けた骨片が検出された（第三章第5節参照）。甕の形態などから9世紀代の土器と考えられる。

SD-1 33は土師器甕である。34は須恵器杯である。底部はヘラ切り後、未調整である。外面に灰かぶりしており、逆位で焼成されたことがうかがえる。35は土師器杯である。36～38は須恵器高杯である。36はいわゆる赤焼け須恵器である。杯部

の底部は回転ヘラケズリ後に、その痕跡を回転ナデでナデ消している。37は内面中央に不定方向の仕上げナデが施される。38は杯部の上半分は残っていないが、形状や沈線の痕跡などから無蓋高杯と思われる。脚部には2条の沈線を巡らす。脚内部には絞り目が見られる。

SX-5 39は土師器甕である。40は土師器高杯である。摩耗して判断しにくくなっているが、内外面にミガキを施している。

SX-6 41は須恵器杯底部である。底部には「×」字状のヘラ記号が付けられている。焼成はやや軟質である。

SX-8 42は土師器杯である。器壁は薄く精緻なつくりである。底部に墨書があるが、文字は判断できない。

SX-23 43は須恵器杯蓋である。内面中央に不定方向の仕上げナデが施される。44は須恵器杯である。44の底部はヘラ切り後、未調整である。

SX-40 45は須恵器甕の口縁部である。口径は約19cmである。46～48は須恵器杯である。46は焼成が悪く、軟質である。49は土師器杯である。内外面に厚く丹塗りされており、さらに外面に「在」か「存」の字と思われる墨書がある。50は須恵器杯である。51は土師器杯である。底部外面に「二」字状の墨書がある。

SK-33 52は須恵器高杯の蓋である。つまみがつくタイプである。

SK-41 53は須恵器平瓶の口縁部である。波状文が1条施文されている。

P40A 54は須恵器杯である。

P108A 55は須恵器杯である。胎土には砂粒が多く含まれる。また、外面は灰かぶりしている。

B4G 56は須恵器の高杯か脚台付き椀と思われる。脚部内面に灰がかぶっているの
で、逆位で焼成されたものと思われる。

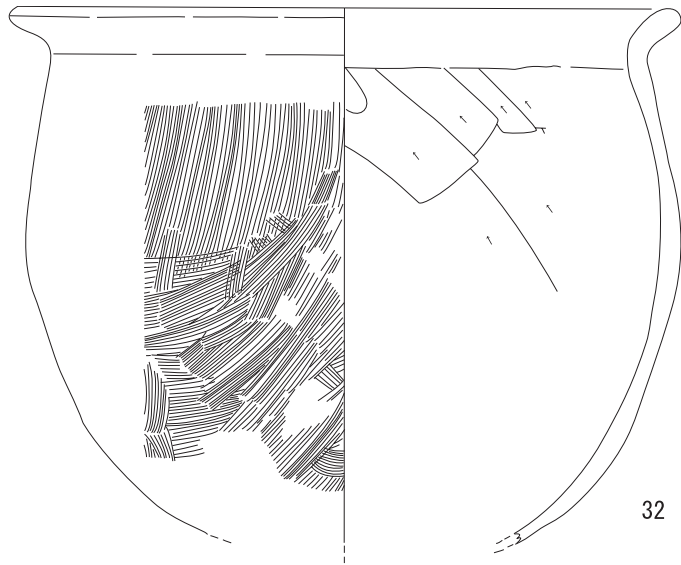
B10G 57、58は土師器杯である。57は内外面、高台の底部にまで厚く丹塗りされている。59は土師器盤である。外面の顔料は窪んだ部分にわずかに残る程度である。

D14G 60は土師器甕である。

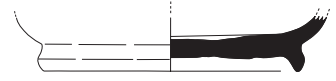
B18G 61は土師器杯である。外面に火だすきが残る。

調査区内一括 62は須恵器高杯の脚部である。透かしは4方向に施されるが、円形と長方形の透かしが向かい合った配置となっている。円形透かしはきれいに面取りされている。円形透かしが施される位置と長方形透かしの1段目と2段目の間の位置に、それぞれ2本ずつ沈線が巡る。

攪乱 後世の攪乱部分から出土した資料である。63は須恵器蓋である。輪状つまみで、外面に灰かぶりしている。64は移動式竈である。65、66は縄文土器である。65は深鉢である。66は浅鉢で、いわゆる黒色磨研土器である。



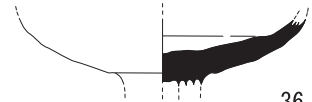
32



34



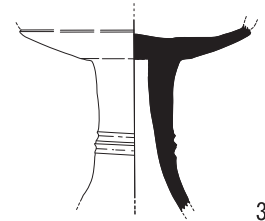
35



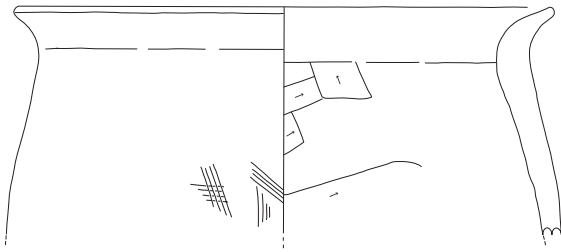
36



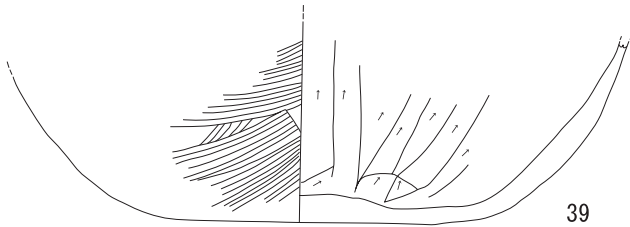
37



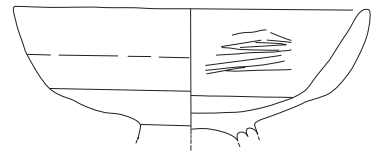
38



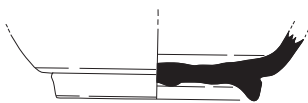
33



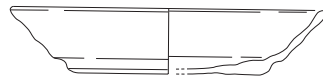
39



40



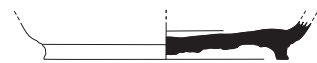
41



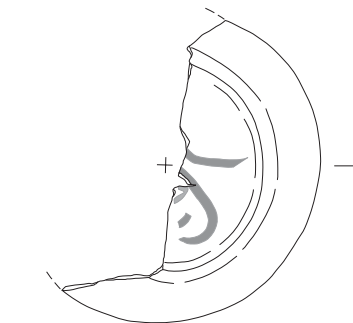
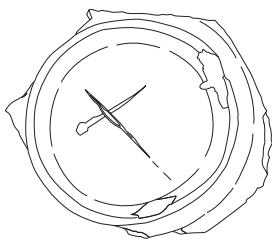
42



43



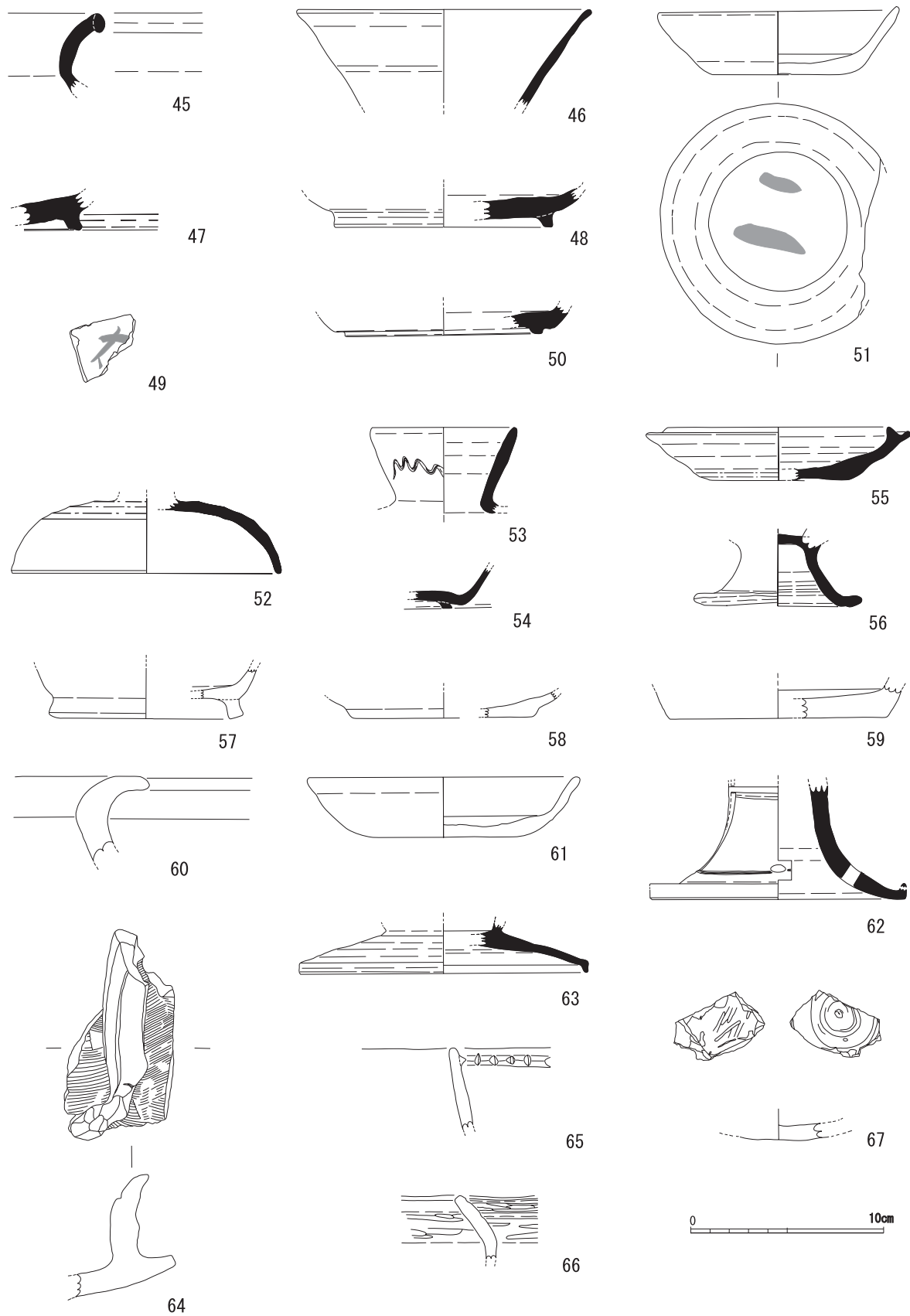
44



32: SB-39 33~38: SD-1
 39、40: SX-5 41、42: SX-6
 43、44: SX-23

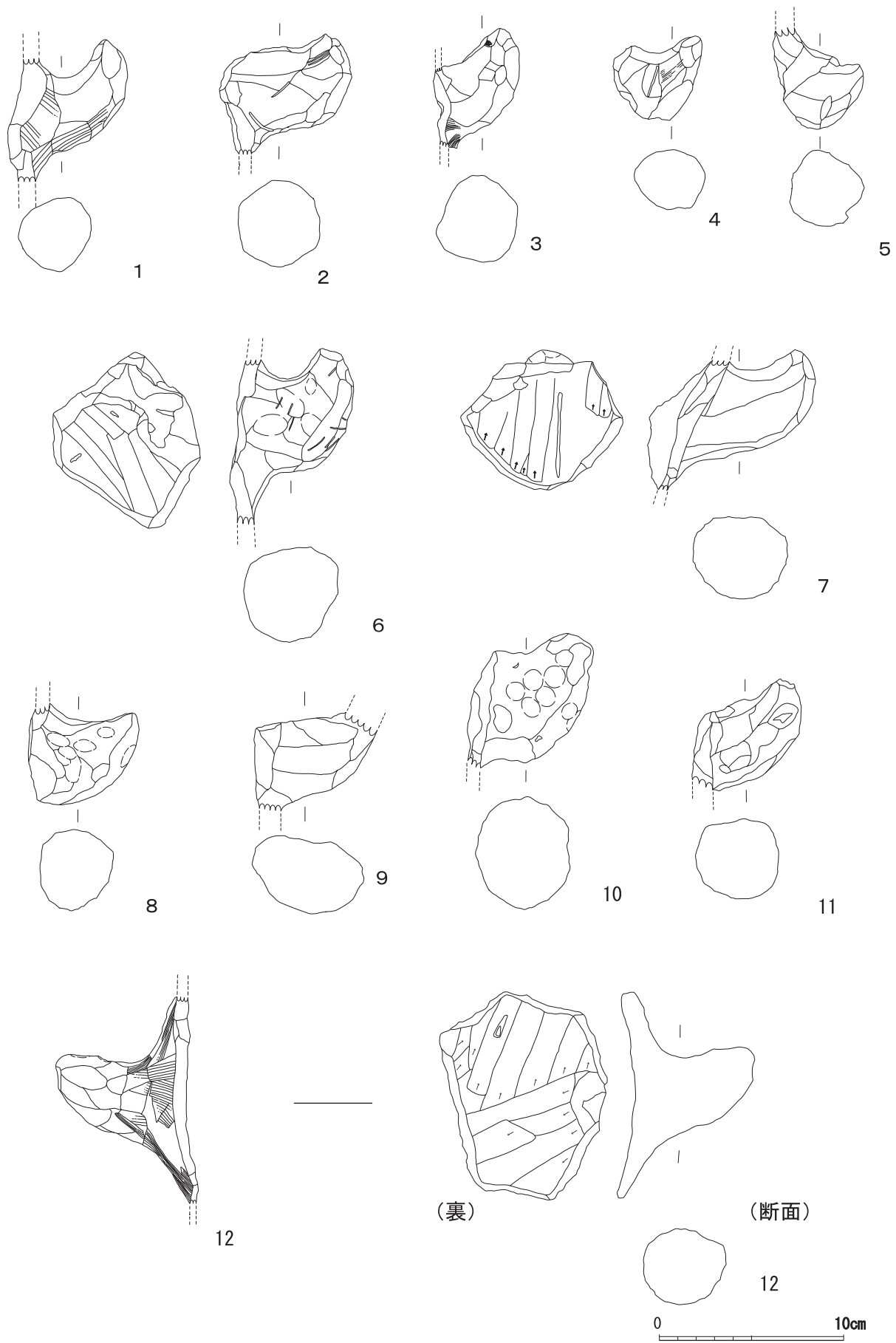


第44图 出土土器实测图(4)

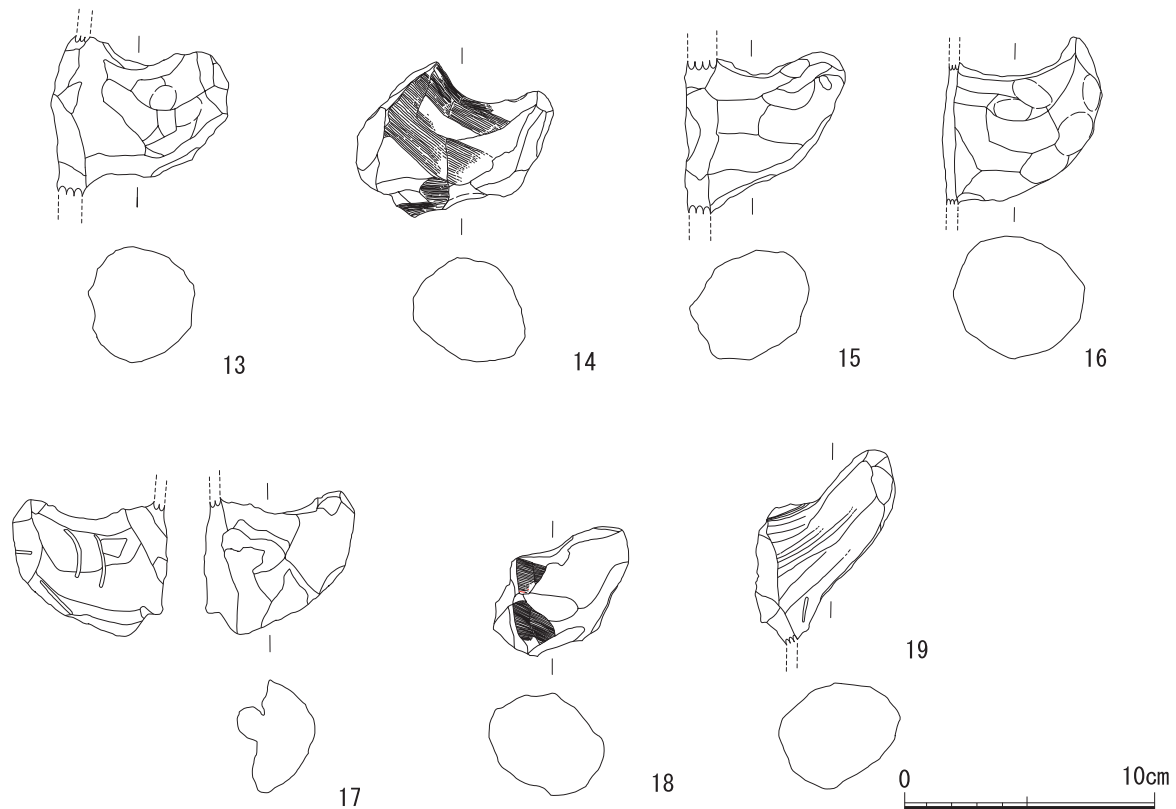


45~51: SX-40 53: SX-41 55: P108A 57~59: B10G 61: B18G 63~66: 攪乱部分
 52: SX-33 54: P40A 56: B4G 60: D14G 62: 調査区内一括 67: SD-1

第45图 出土土器实测图(5)



第 46 图 出土甑把手实测图(1)



第 47 図 出土甌把手実測図 (2)

第 4 表 甌把手観察表

掲載番号	出土地点	出土層位	種類	器種	計測値			調整		色調		胎土	成形	焼成	備考
					長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	内面	外面	内面	外面				
1	B9G	2層	土師器	甌把手	7.3	4	15.03	ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ ハケ目、指頭圧痕	橙 (7.5YR6)	橙 (7.5YR6/6)	砂粒、角閃石、長石、2~5mm 程度の石英	手捏ね	良好	
2	SD-1	埋2層	土師器	甌把手	7	4.9	164.6	ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	黄橙 (7.5YR7/8)	黄橙 (7.5YR7/8)	砂粒、石英、わずかに赤褐色 粒含む	手捏ね	良好	
3	C14G	2層	土師器	甌把手	6	4.2	102.4		ヘラケズリ後ナデ 一部横方向ハケ目	褐灰 (10YR5/1)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	砂粒、赤褐色粒含む	手捏ね	良好	把手内面欠損に より調整は不明
4	SX-40	埋1層	土師器	甌把手	5.2	3.8	51.5		ヘラケズリ後ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR6/6)	砂粒、石英、赤褐色粒含む	手捏ね	良好	把手内面欠損に より調整は不明
5	SK-41	埋1層	土師器	甌把手	4.5	4	79.5		ヘラケズリ後ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR6/6)	石英、長石、輝石、わずかに 赤褐色粒含む	手捏ね	良好	把手内面欠損に より調整は不明
6	SB-37	埋2北西 G	土師器	甌把手	7.2	5.1	221.7	斜方向ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ 指頭圧痕	橙 (5YR6/8)	橙 (5YR6/8)	砂粒、長石、輝石、わずかに 赤褐色粒含む	手捏ね	良好	
7	E13G	2層	土師器	甌把手	9.3	5.1	230	斜方向ヘラケズリ後 縦方向ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ 指頭圧痕	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR6/6)	2~3mm程度の石英、長石、輝 石、わずかに赤褐色粒含む	手捏ね	良好	
8	D15G	1b層	土師器	甌把手	6.4	4.4	107.4	ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ 指頭圧痕	橙 (5YR6/8)	明赤褐色 (5YR5/6)	砂粒、石英、輝石、赤褐色粒	手捏ね	良好	把手内面一部欠 損
9	D16G	1b層	土師器	甌把手	6.5	5.8	165	ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	砂粒、石英、赤褐色粒	手捏ね	良好	把手先端部欠損
10	SX-40	埋土1層	土師器	甌把手	7.1	6	192.3	ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ 指頭圧痕	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR6/6)	3mm程度の長石、輝石、赤褐粒 少量含む	手捏ね	良好	把手内面一部欠 損
11	D13G	2層	土師器	甌把手	6.4	4.5	136	横方向ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	橙 (5YR6/8)	橙 (5YR6/8)	砂粒、赤褐色粒少量含む	手捏ね	良好	
12	SB-12		土師器	甌把手	7.1	4.5	256.8	斜方向ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ ハケ目、指頭圧痕	橙 (5YR7/8)	橙 (5YR7/6)	砂粒、5mm程度の石英、赤褐色 粒含む	手捏ね	良好	径復元
13	SB-39	埋2南西 G	土師器	甌把手	7.2	4.5	178.5	斜方向ヘラケズリ後 縦方向ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ 横方向ハケ目、指 頭圧痕	浅黄橙 (7.5YR8/6)	橙 (5YR7/6)	砂粒、1mm程度の石英、長石含 む	手捏ね	良好	
14	D14G	1b層	土師器	甌把手	7.8	4.2	193.9	縦方向ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ ハケ目、指頭圧痕	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR6/6)	砂粒、長石、角閃石、5mm程 度の石英含む	手捏ね	良好	把手内面一部欠 損
15	SD-1	埋3層北側	土師器	甌把手	6.7	4.4	173.4	ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	橙 (7.5YR7/6)	にぶい黄色 (10YR7/4)	砂粒、5mm程度の石英、長石含 む	手捏ね	良好	外面スス付着
16	D11G	2層	土師器	甌把手	6.6	5.2	166.1	横方向ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ 指頭圧痕	灰黄褐 (10YR6/2)	橙 (7.5YR6/6)	砂粒、石英、長石、輝石赤褐色 粒	手捏ね	良好	
17	C14G	2層	土師器	甌把手	6.5	4.5	79.4	斜方向ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	にぶい褐 (7.5YR5/4)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	砂粒、2mm程度の赤褐色粒わず かに含む	手捏ね	良好	把手外面半分欠損、 内面一部欠損
18	D11G	2層	土師器	甌把手	6.4	4.6	100	ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ 斜方向ハケ目	橙 (5YR7/8)	橙 (5YR6/6)	砂粒、石英、赤褐色粒	手捏ね	良好	把手内面一部 のみ残存
19	SB-32	埋土一活	土師器	甌把手	7.2	4.5	114.5	ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ 横方向ハケ目	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR6/6)	長石、角閃石、2mm程度の赤褐 色粒含む	手捏ね	良好	把手内面一部欠損、 外面スス付着

2 その他

瓦 1, 2とも SD-1 から出土した平瓦である。どちらも凸面は縄巻タタキである。

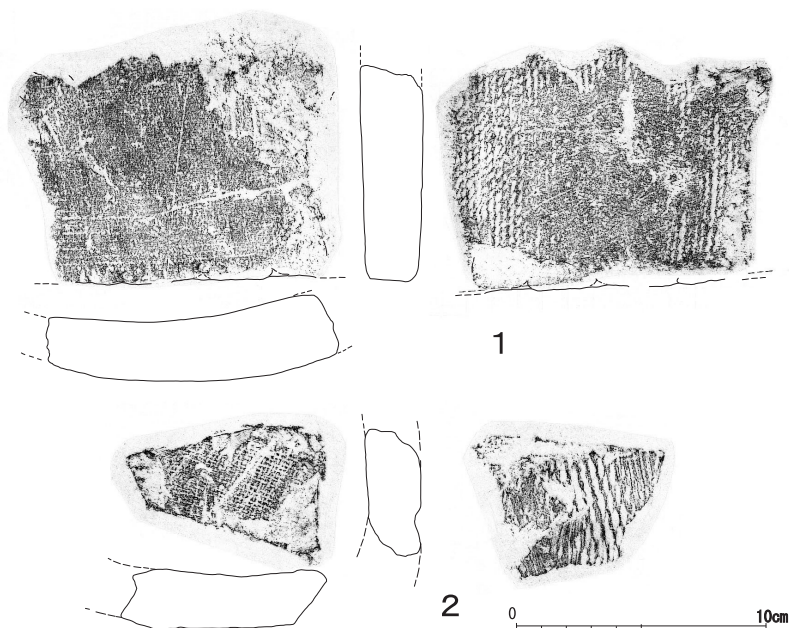
1はタタキの後に一部ナデている。凹面には擦った痕跡があり、その部分は布目が消えかかっている。硯に転用された可能性がある。2は凸面から側面の傾斜がかなりの鈍角となっている。その断面傾斜から隅瓦の可能性はある。

石器 1は砂岩製の紡錘車である。孔は両側から穿孔し、ちょうど中央部で貫通している。2は SB-30の竈周辺から出土した熱を受けた礫である。石材は安山岩である。上面と下面は擦れており、使用した痕跡が認められる。熱を受けていることから、竈内部で土器の支柱として使用されたことも考えられる。3は SD-1 から出土した安山岩製の砥石である。擦り面には、約2cm幅の横方向の浅い窪みがいくつか確認できる。4は蛇紋岩製の紡錘車である。孔の径が上面の方がやや大きいため、上面から穿孔したものと思われる。上面、側面は磨いているが、下面はほとんど磨いてない。5は砂岩製の砥石である。6は粘板岩製の石鑿である。表面、裏面、側面とも丁寧に研磨されている。先端には仕様痕が認められる。7、8は黒曜石製の打製石鏃である。

7は二等辺三角形型、

8は正三角形型である。

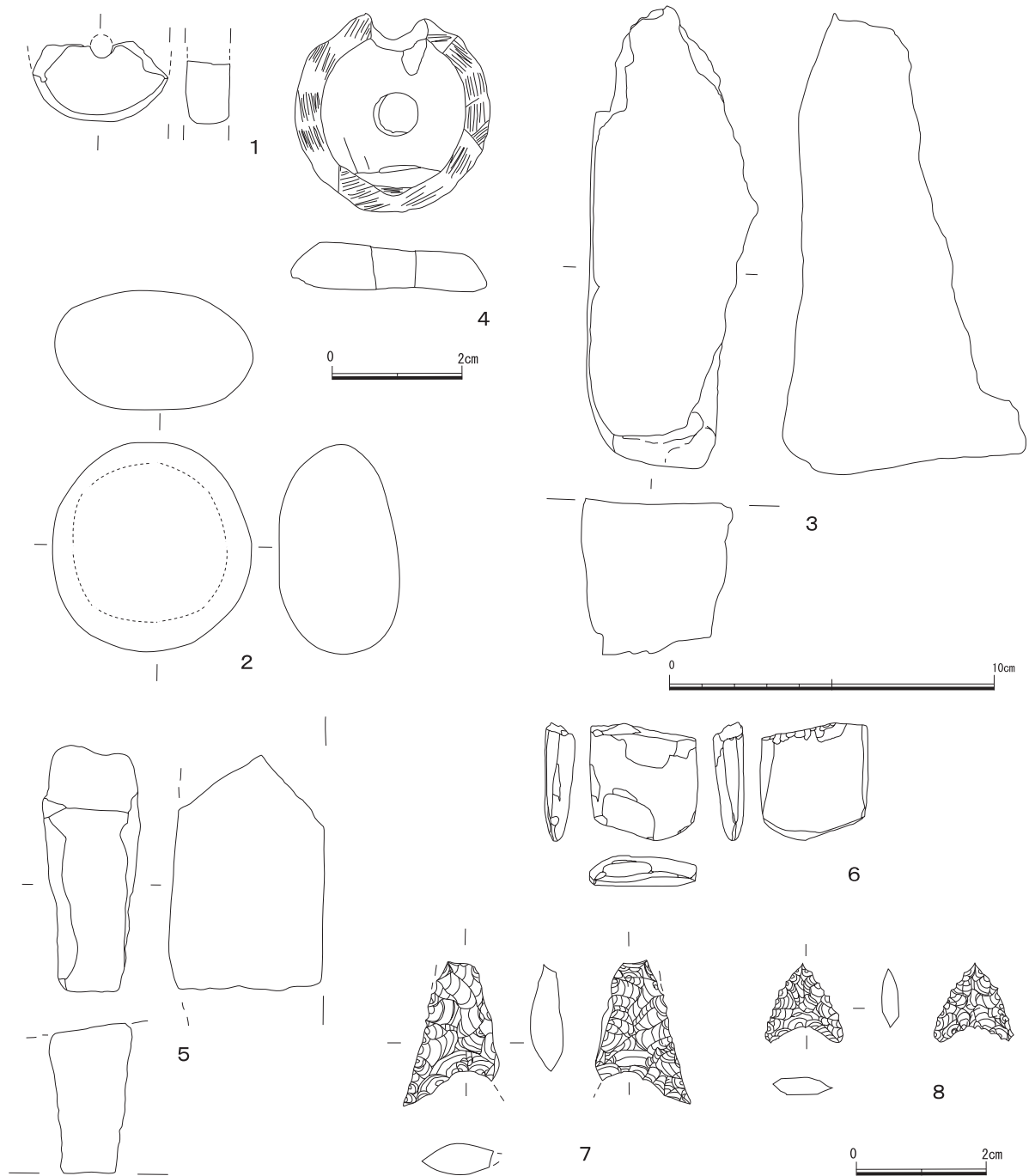
緑釉陶器 67は緑釉陶器である。SD-1の埋土3層から出土したもので、器形は碗の底部である。内面には緑釉がかかっている。



第48図 出土瓦実測図

第5表 瓦観察表

掲載番号	出土地点	層位	器種	器形	現存長 (cm)	現存幅 (cm)	現存最大厚 (cm)	調整			色調				胎土	焼成	備考
								端面	凹面	凸面	端面	側面	凹面	凸面			
1	SD-1	埋2層	瓦	平瓦	12.2	13.6	2.8	横方向 ケズリ	布目	縄巻 タタキ	緑灰色 (Hue7.5 GY5/1)		灰オリーブ色 (Hue5Y5 /2)	オリーブ灰色 (Hue5GY 6/1)	石英、長石、白色 粒子、5 ~6mm 大の礫	良好	凹面に擦痕? 硯に転用か?
2	SD-1	埋3層	瓦	平瓦	5.4	8.3	2.4	ケズリ	布目	縄巻 タタキ	にぶい 橙色 (Hue7.5 YR7/4)	浅黄 橙色 (Hue7.5 YR8/4)	にぶい 橙色 (Hue7.5YR 7/4)	石英、長石、 角閃石	不良	側面の断面 傾斜から隅 瓦の可能性 あり 被熱 による赤変	



第 49 図 出土石器実測図 (4, 7, 8 : S=1/1 1, 2, 3, 5, 6 : S=1/2)

第 6 表 石器観察表

掲載番号	出土地点	出土層位	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材・石質	備考
				(cm)	(cm)	(cm)	(g)		
1	SB-18	貼床埋土	紡錘車	4.50	1.65	1.45	27.68	砂岩	
2	SB-30		被熱礫	6.90	6.60	3.90	252.11	安山岩	
3	SD-1	埋3層	砥石	5.20	14.30	—	571.28	安山岩	
4	B15G	埋2層	紡錘車	3.00	3.00	0.70	9.29	蛇紋岩	
5	C12G	埋2層	砥石	8.20	3.20	5.10	166.28	砂岩	
6	F4G	埋2層	石鑿	3.85	3.50	1.00	19.27	粘板岩	
7	D11G	埋3層	打製石鏃	2.35~	1.50~	0.50	0.95	黒曜石	腰岳産
8	SB-32		打製石鏃	1.20	1.25	0.25	0.22	黒曜石	姫島産?

第4節 熊本県、大江遺跡群（学苑住宅）における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I. 大江遺跡群（学苑住宅）における放射性炭素年代測定

1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	SB30-2A	炭化材(イヌガヤ)	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No. 2	SB30-2B	炭化材(サクラ属)	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No. 3	SB30-3A	炭化米	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No. 4	SB30-3B	炭化米	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS

AMS : 加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

2. 測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	¹⁴ C 年代 (年 BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ¹⁴ C 年代 (年 BP)	暦年代 (西暦) (1 σ : 68% 確率, 2 σ : 95% 確率)
No. 1	205806	1680 ± 40	-24.5	1690 ± 40	交点 : cal AD 380 1 σ : cal AD 330~410 2 σ : cal AD 250~430
No. 2	205807	1950 ± 40	-26.2	1930 ± 40	交点 : cal AD 70 1 σ : cal AD 40~110 2 σ : cal BC 10~ AD 140
No. 3	205808	1420 ± 40	-23.1	1450 ± 40	交点 : cal AD 620 1 σ : cal AD 580~650 2 σ : cal AD 540~660
No. 4	205809	1460 ± 40	-23.3	1490 ± 40	交点 : cal AD 580 1 σ : cal AD 540~620 2 σ : cal AD 460~480, 520~650

(1) ¹⁴C 年代測定値

試料の ¹⁴C / ¹²C 比から、単純に現在 (AD1950年) から何年前かを計算した値。
¹⁴C の半減期は、国際的慣例により Libby の5,568年を用いた。

(2) デルタ $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 ¹⁴C / ¹²C 比を補正するための炭素安定同位体比 (¹³C / ¹²C)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

(3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25(‰)に標準化することによって得られる年代である。

(4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を較正することにより算出した年代(西暦)。cal は calibration した年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。

暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と較正曲線との交点の暦年代値を意味する。 1σ ^{シグマ}(68%確率)と 2σ (95%確率)は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の $1\sigma \cdot 2\sigma$ 値が表記される場合もある。

3. 所見

加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定の結果、No.1の炭化物では 1690 ± 40 年BP(1σ の暦年代でAD330~410年)、No.2の炭化物では 1930 ± 40 年BP(同AD40~110年)、No.3の炭化物では 1450 ± 40 年BP(同AD580~650年)、No.4の炭化物では 1490 ± 40 年BP(同AD540~620年)の年代値が得られた。

文献

Stuiver et al. (1998), INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

中村俊夫(1999)放射性炭素法. 考古学のための年代測定学入門. 古今書院, p.1-36.

II. 大江遺跡群（学苑住宅）における種実同定

1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

2. 試料

試料は、古墳時代の住居跡（SB30）の竈内から採取された炭化種実（SB30-1、SB30-2）である。

3. 方法

肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

4. 結果

（1）分類群

樹木1、草本1の計2分類群が同定された。表1に学名、和名および粒数、表2にイネの計測値、表3に粒形と大きさを示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記す。

〔樹木〕

モモ *Prunus persica* Batsch 核 バラ科

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。

〔草本〕

イネ *Oryza sativa* L. 果実 イネ科

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。計測の結果、最大で長さ6.0mm、幅3.3mm、最小で長さ2.9mm、幅1.5mm、平均で長さ4.1mm、幅2.2mmであった。

（2）種実群集の特徴

1) SB30-1

モモ核1が検出された。

2) SB30-3

イネ57が検出された。

5. 考察

分析の結果、古墳時代の住居跡の竈内からは、食用となる栽培植物のモモおよびイネ（炭化米）が検出された。モモは稲作とともに伝来し、弥生時代から古墳時代にかけては西南日本を中心に多くの遺跡から出土している。イネ（炭化米）については、完形のもの43粒について粒形とその大きさを計測した（表3）。佐藤（1988）の基準によると、最も多いのは短粒で極小タイプであり、次に短粒で極々小タイプが多い。これは、古墳時代以降のイネに一般的に認められる傾向である。

表3 大江遺跡群から出土したイネの粒形とその大きさ

粒形		粒大				合計	%
		極々小 ~ 8	極小 ~ 12	小 ~ 16	中 ~		
長粒 <i>L</i>	2.6-3.0 <i>Ll</i>	1				1	10
	2.3-2.6 <i>Lm</i>		1	1		2	
	2.0-2.3 <i>Ls</i>	2	5			7	23.25
短粒 <i>S</i>	1.8-2.0 <i>Sl</i>	2	8	2		12	31
	1.6-1.8 <i>Sm</i>	5	6	5		16	
	1.4-1.6 <i>Ss</i>	1	1		1	3	72.09
円粒 <i>R</i>	1.2-1.4 <i>Rl</i>	1	1			2	2
	1.0-1.2 <i>Rm</i>						4.65
合計		12	22	8	1	43	
%		27.90	51.16	18.60	2.32	100	

※粒長/粒幅で粒形、粒長×粒幅で粒の大きさを表す。

大江遺跡群の炭化種実



1 モモ核

— 5.0mm



2 イネ果実



3 イネ果実



4 イネ果実

— 1.0mm



5 イネ果実



6 イネ果実



7 イネ果実



8 イネ果実

— 1.0mm

文献

- 金原正明 (1996) 古代モモの形態と品種. 月刊考古学ジャーナル No. 409, ニューサイエンス社, p. 15-19.
 南木睦彦 (1991) 栽培植物. 古墳時代の研究第4巻生産と流通 I, 雄山閣出版株式会社, p. 165-174.
 南木睦彦 (1992) 低湿地遺跡の種実. 月刊考古学ジャーナル No. 355, ニューサイエンス社, p. 18-22.
 吉崎昌一 (1992) 古代雑穀の検出. 月刊考古学ジャーナル No. 355, ニューサイエンス社, p. 2-14.
 佐藤敏也 (1988) 弥生のイネ. 弥生文化の研究第2巻生業, 雄山閣出版株式会社, p. 97-111.

表1 大江遺跡群における炭化種実同定結果

分類群		部位		SB30-1	SB30-3
学名	和名				
Arbor	樹木				
<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核		1	
Herb	草本				
<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	果実(穎)			57
Total	合計			1	57
	備考				炭化材 5

表2 大江遺跡群から出土したイネ炭化果実の計測値

試料	長さ(mm)	幅(mm)	試料	長さ(mm)	幅(mm)
1	5.2	2.6	22	3.9	1.9
2	4.9	2.8	23	3.5	2.1
3	4.0	2.1	24	5.1	2.7
4	4.5	2.4	25	4.6	2.0
5	2.9	1.8	26	4.6	2.3
6	6.0	2.5	27	3.5	1.7
7	2.7	2.0	28	3.2	2.6
8	4.0	2.1	29	4.4	2.1
9	3.7	2.0	30	4.4	2.7
10	4.5	2.8	31	3.0	2.0
11	4.5	2.5	32	4.9	3.3
12	4.5	2.1	33	4.5	2.7
13	4.2	1.5	34	4.0	2.3
14	3.9	2.3	35	4.0	2.2
15	4.5	2.4	36	3.5	1.9
16	3.2	1.8	37	3.5	2.0
17	4.2	2.0	38	4.1	2.1
18	4.0	2.2	39	4.6	2.8
19	3.2	2.0	40	4.5	2.1
20	4.2	2.3	41	3.5	2.3
21	4.0	2.4	42	4.0	2.5
			43	4.5	2.7

Ⅲ. 大江遺跡群（学苑住宅）における樹種同定

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

試料は、古墳時代の住居跡（SB30-2）の竈内から出土した炭化材9点（①～⑨）である。

3. 方法

試料を割折して、炭化材の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目）、接線断面（板目）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

表1に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* K. Koch イヌガヤ科 図版1

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材の幅は非常に狭く、樹脂細胞が散在する。放射断面：放射柔細胞の分野壁孔はトウヒ型で1分野に1～2個存在する。仮道管の内壁にらせん肥厚が存在する。樹脂細胞が散在する。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で1～10細胞高ぐらいである。仮道管の内壁にらせん肥厚が存在する。樹脂細胞が多く見られる。

以上の形質よりイヌガヤに同定される。イヌガヤは、岩手県以南の本州、四国、九州に分布する常緑の低木または小高木で、高さ10～15m、径20～30cmである。材は、やや堅硬で木理は緻密であるが不整でしばしば波状を呈する。建築、器具、土木、ろくろ細工、薪炭などに用いられる。

ニレ科? Ulmaceae?

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が1～3列配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は多数複合して斜線状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。接線断面：多列幅の放射組織が存在する。

以上の形質より、ニレ科の内のケヤキ、ニレ属のいずれかと考えられる。なお、本試料は極めて小片で広範囲の観察が困難なことから、ニレ科?とした。

ヤマグワ? *Morus australis* Poiret? クワ科

横断面：年輪のはじめに中型から大型の丸い道管が単独あるいは2～3個複合して配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は複合して円形の小塊をなす。道管の

径は徐々に減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。接線断面：放射組織は上下の縁辺部が直立細胞からなる異性放射組織型で多列幅である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりヤマグワと考えられるが、試料が極めて小片であり、広範囲の観察が困難なことから、ヤマグワ？とした。ヤマグワは北海道、本州、四国、九州に分布する落葉高木で、通常高さ10～15m、径30～40cmである。材は堅硬、韌性に富み、建築などに用いられる。

クスノキ科 Lauraceae 図版2

横断面：中型から小型の道管が単独および2～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。放射断面：道管の穿孔は単穿孔のものが存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～3細胞幅である。上下の縁辺部のみ直立細胞である。

以上の形質よりクスノキ科に同定される。クスノキ科には、クスノキ、ヤブニッケイ、タブノキ、カゴノキ、シロダモ属などがあり、道管径の大きさ、多孔穿孔および道管内壁のらせん肥厚の有無などで細分できるが、試料が極めて小片であり、広範囲の観察が困難なことから、クスノキ科の同定にとどめた。なお、本試料は道管径の大きさから、クスノキ以外のクスノキ科の樹種のいずれかである。

サクラ属 Prunus バラ科 図版3

横断面：小型で丸い道管が単独あるいは2～3個放射方向および斜め方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は、同性に近い異性である。接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～4細胞幅である。

以上の形質よりサクラ属に同定される。サクラ属には、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、シウリザクラ、ウメ、モモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または低木である。

散孔材 diffuse-porous wood

横断面：小型の道管が散在する。放射断面：道管と放射組織が存在する。接線断面：道管と多列幅の放射組織が存在する。

以上の形質より散孔材に同定される。なお、本試料は極めて小片で広範囲の観察が困難なことから、散孔材の同定にとどめた。

広葉樹 broad-leaved tree

横断面：道管が存在する。放射断面：道管と放射組織が存在する。接線断面：道管と放射組織が存在する。

以上の形質より広葉樹に同定される。なお、本試料は極めて小片で広範囲の観察が困難なことから、広葉樹の同定にとどめた。

5. 所見

樹種同定の結果、イヌガヤ2点、サクラ属2点、ニレ科? 1点、ヤマグワ? 1点、クスノキ科1点、散孔材1点、広葉樹1点が同定された。イヌガヤは温帯に分布する針葉樹で森林の谷側などの適潤地に生育し、クスノキ科は西南日本に分布する照葉樹林の主要構成要素である。サクラ属は温帯域のやや乾燥した斜面等に生育する落葉広葉樹であり、ニレ科やヤマグワも温帯を中心に分布する落葉広葉樹である。いずれも当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能な樹種であったと考えられる。

文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p. 20-48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p. 49-100.

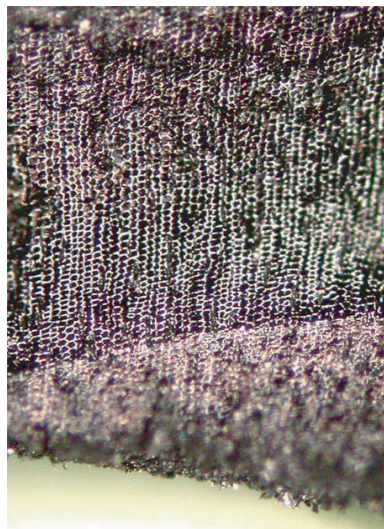
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p. 296

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第1号，植生史研究会，p. 242

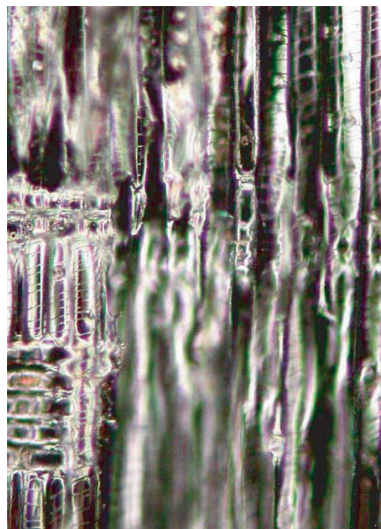
表1 大江遺跡群 SB30-2 における樹種同定結果

試料	結果（学名／和名）
① Lauraceae	クスノキ科
② Ulmaceae?	ニレ科?
③ <i>Cephalotaxus harringtonia</i> K. Koch	イヌガヤ
④ <i>Cephalotaxus harringtonia</i> K. Koch	イヌガヤ
⑤ <i>Prunus</i>	サクラ属
⑥ <i>Morus australis</i> Poiret?	ヤマグワ?
⑦ broad-leaved tree	広葉樹
⑧ <i>Prunus</i>	サクラ属
⑨ diffuse-porous wood	散孔材

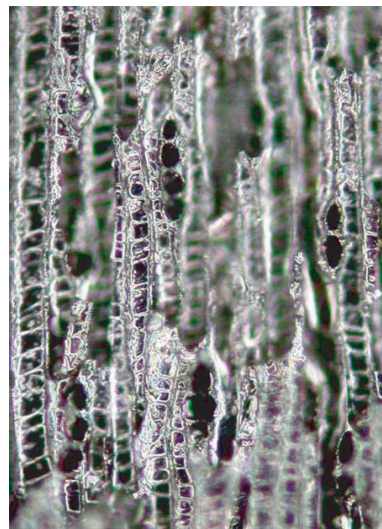
大江遺跡群の炭化材



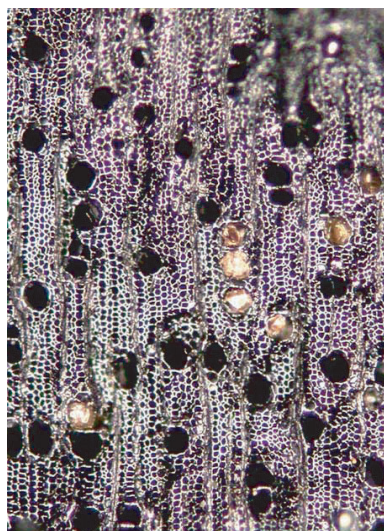
横断面 ————— : 0.4mm
1. ③ イヌガヤ



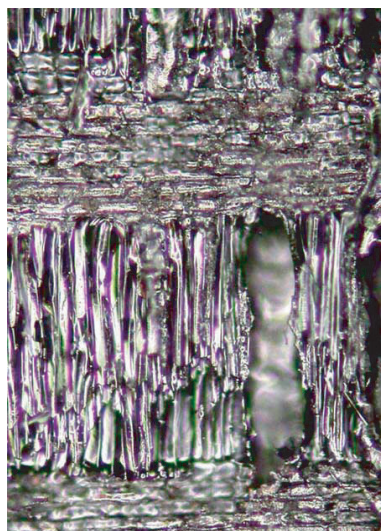
放射断面 ————— : 0.1mm



接線断面 ————— : 0.1mm



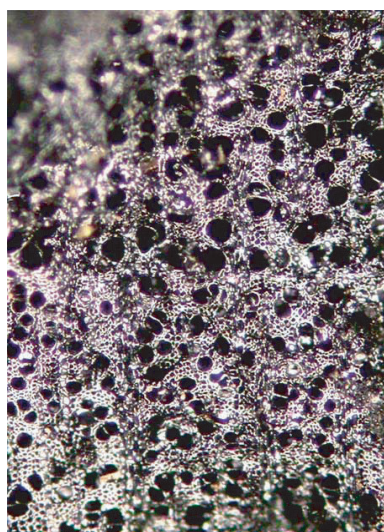
横断面 ————— : 0.4mm
2. ① クスノキ科



放射断面 ————— : 0.2mm



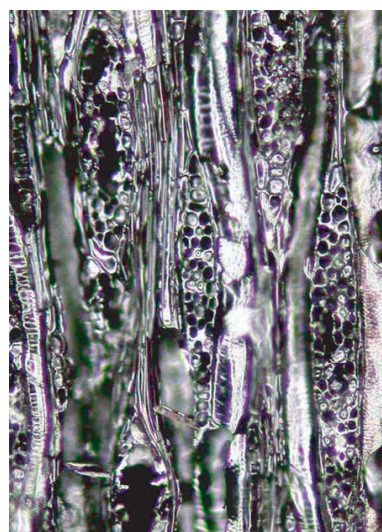
接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.4mm
3. ⑤ サクラ属



放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm

IV. 大江遺跡群（学苑住宅）における蛍光X線分析

1. はじめに

物質にX線を照射すると、その物質を構成している元素に固有のエネルギー（蛍光X線）が放出され、この蛍光X線を分光して波長と強度を測定することで、物質に含まれる元素の種類と量を調べることができる。

2. 試料

試料は、古墳時代の住居跡から検出された竈跡（SB12）の支柱部である。

3. 分析方法

エネルギー分散型蛍光X線分析システム（日本電子製、JSX3201）を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法（FP法）による定量分析を行った。以下に分析の手順を示す。

- 1) 試料を絶乾（105℃・24時間）
- 2) メノウ製乳鉢を用いて試料を粉砕
- 3) 試料を塩化ビニール製リング枠に入れ、圧力15t/cm²でプレスして錠剤試料を作成
- 4) 測定時間300秒、照射径20mm、電圧30keV、試料室内真空の条件で測定

X線発生部の管球はロジウム（Rh）ターゲット、ベリリウム（Be）窓、X線検出器はSi（Li）半導体検出器である。

4. 分析結果

各元素の定量分析結果（wt%）を表1および図1に示す。

5. 考察

分析の結果、竈跡（SB12）の支柱部では、珪酸（SiO₂）の含量が41.9%、アルミニウム（Al₂O₃）が24.7%、鉄（Fe₂O₃）が20.2%、カルシウム（CaO）が7.7%であり、珪酸が主成分となっている。

大江遺跡群（県営九品寺団地建替事業）の竈跡支柱部および2.5m深前後の固く締まった暗灰色シルト層との比較では、今回の試料の方が鉄（Fe₂O₃）の含量がやや高く、珪酸（SiO₂）の含量がやや低くなっているが、その他の元素の組成や含量については特に明瞭な差異は認められなかった。

以上の結果から、竈跡（SB12）の支柱部と大江遺跡群（県営九品寺団地建替事業）の試料は、給源が同一である可能性が考えられる。

文献

小野寺 浩・安東 和人（1995）エネルギー分散型蛍光X線分析装置 JSX3200の紹介. 日本電子(株), 25p.

表1 蛍光X線分析結果

単位：wt(%)

地点・試料		SB12			
原子No.	化学式	竈柱部	原子No.	化学式	竈柱部
11	Na ₂ O	0.840	20	CaO	7.728
12	MgO	0.300	22	TiO ₂	1.929
13	Al ₂ O ₃	24.705	23	V ₂ O ₅	0.098
14	SiO ₂	41.864	25	MnO	0.353
15	P ₂ O ₅	0.563	26	Fe ₂ O ₃	20.180
16	SO ₃	0.192	38	SrO	0.127
19	K ₂ O	1.122			

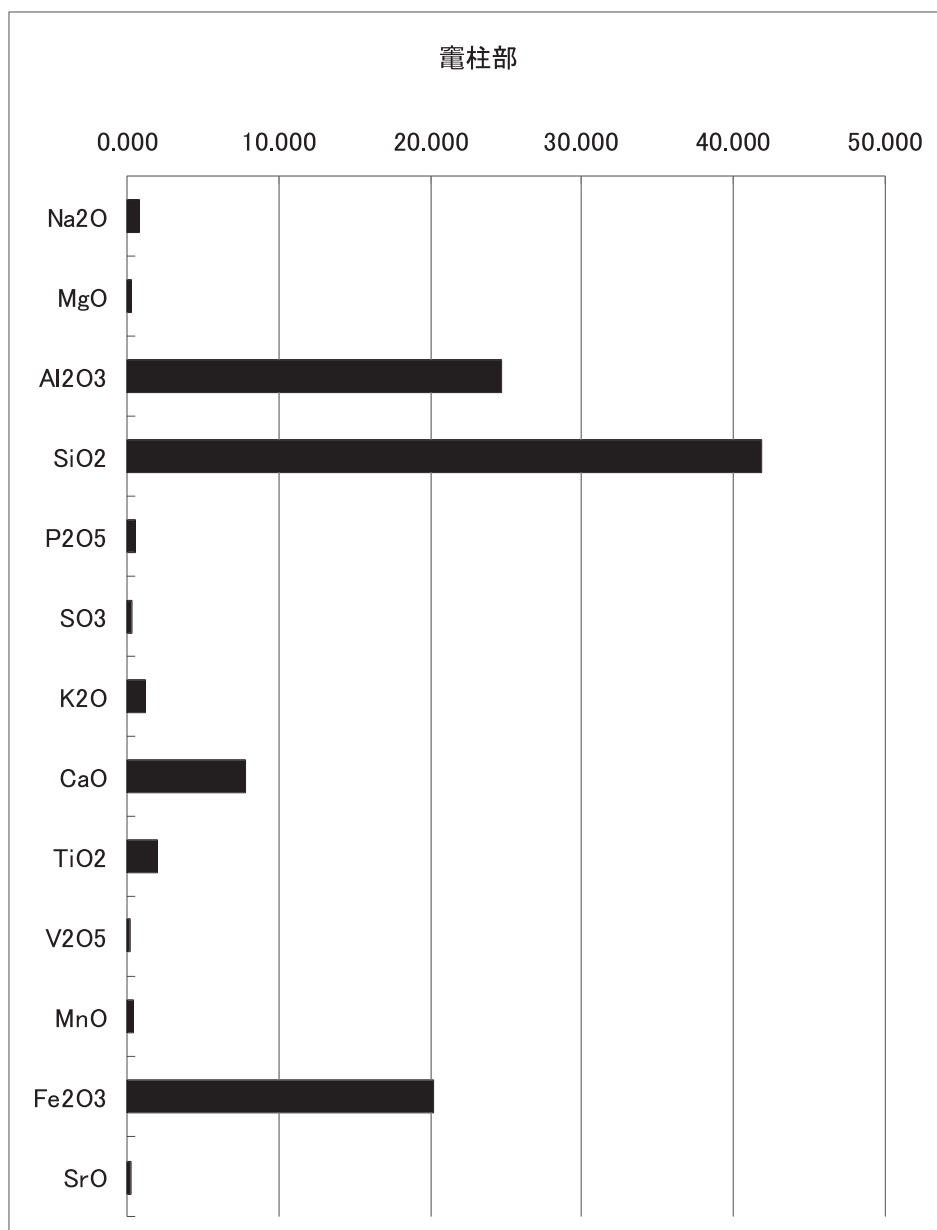
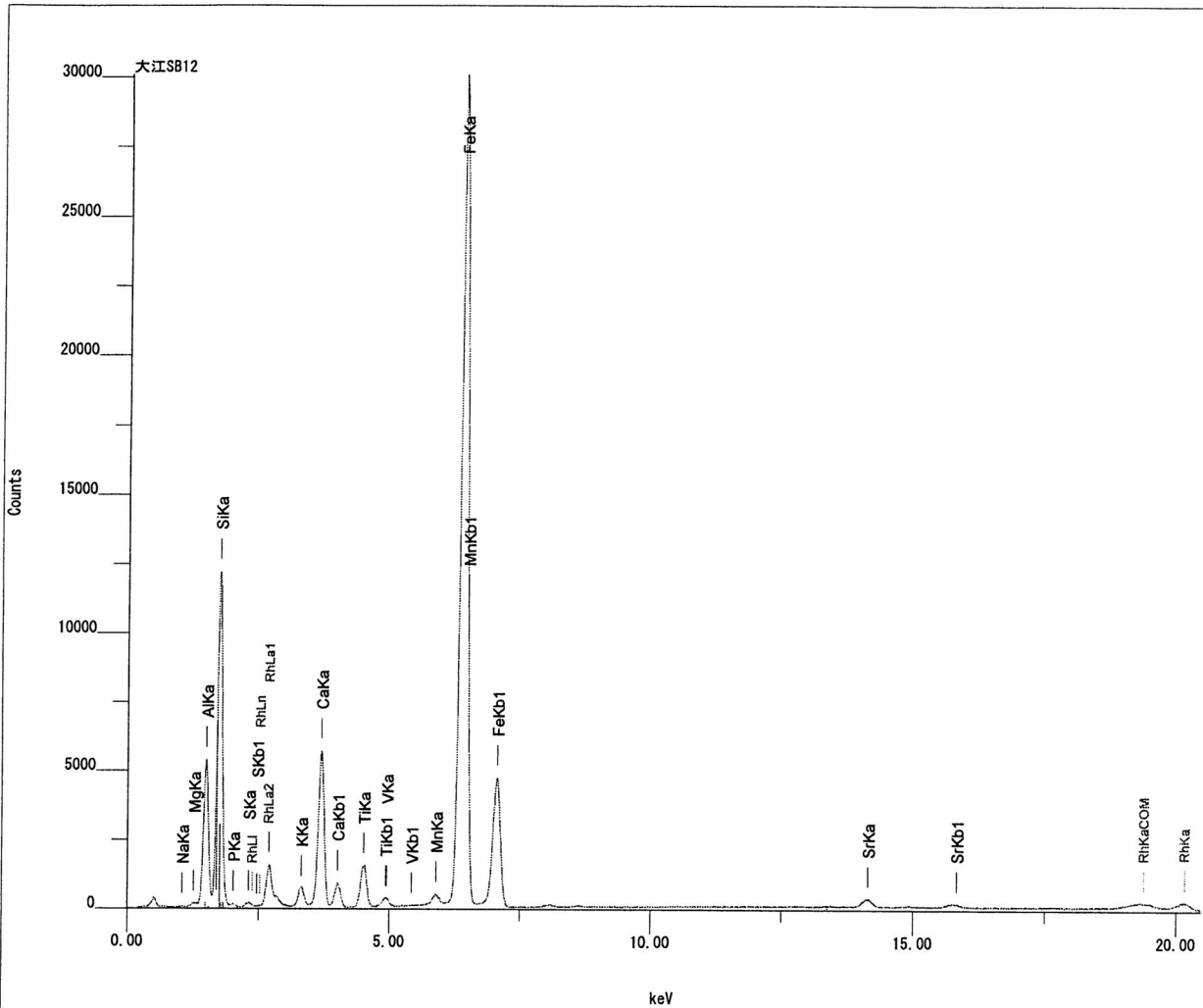


図1 大江遺跡 SB12 竈支柱の蛍光X線分析結果 (wt%)



ファイル名 : C:\¥JSX3200¥DATA¥2005¥大江SB12.SPC 測定日時 : 2005年 6月 3日 11時 9分 0秒
 試料名 :
 メモ : 石 2
 測定条件 : 電圧: 30.0kV 電流: 0.300mA ライフタイム: 600.00sec パス: Vac
 定量条件
 定量法 : 標準
 分析元素 : Na, Mg, Al, Si, P, S, K, Ca, Ti, V, Mn, Fe, Sr, Rh

Num	元素/ 化学式	wt(%)	at/mole(%)	測定強度比	積分強度	標準偏差
* 1	11 Na2O	0.8402	1.0646	0.0078098	312	0.9783
2	12 MgO	0.3000	0.5845	0.0010792	277	0.4384
3	13 Al2O3	24.7054	19.0284	0.0478277	51915	0.1986
4	14 SiO2	41.8635	54.7169	0.1119761	127731	0.1451
5	15 P2O5	0.5632	0.3116	0.0035252	2066	0.1372
6	16 SO3	0.1917	0.1881	0.0004079	1123	0.0874
7	19 K2O	1.1215	0.9349	0.0091495	9078	0.0648
8	20 CaO	7.7282	10.8223	0.0562398	79431	0.0568
9	22 TiO2	1.9288	1.8958	0.0094599	23275	0.0534
10	23 V2O5	0.0980	0.0423	0.0004715	1386	0.0479
11	25 MnO	0.3529	0.3907	0.0027050	9065	0.0291
12	26 Fe2O3	20.1799	9.9239	0.1402812	513842	0.0307
13	38 SrO	0.1268	0.0961	0.0024258	7441	0.0280

第5節 熊本市大江(学苑住宅)遺跡群出土の平安時代火葬骨

松下孝幸^{*}

【キーワード】：熊本県、平安時代、火葬骨、保存不良、大腿骨、第二頸椎

はじめに

熊本市大江2丁目2番39号に所在する大江(学苑住宅)遺跡群の発掘調査が国家公務員合同宿舎(学苑住宅)新築工事に伴って2005年(平成17年)におこなわれ、この調査で1基の甕から火葬骨が検出された。火葬骨は口縁を下にした甕の中から検出された。甕の底部は失われている。甕内には土が充填しており、写真で検出状況を見ると、火葬骨は主に上部(甕の底部)に集中していたようである。従って、甕に火葬骨が入れられて、その後に甕が逆さにされたと考えてもよさそうであるが、甕内に土が入っていることから、火葬骨が甕に埋納されてから甕が逆さにされるまでは時間の経過があったことが予想される。

熊本県内での火葬骨の報告例はまだないようである。また、古代の人骨は二本木遺跡で出土している以外は県内での出土例はない。本火葬骨は細片になっており、不思議と長骨の大片が存在しない。

今回検出された火葬骨を解剖学的、人類学的に精査したところ、興味ある所見を得たので、その結果を報告しておきたい。

資料および所見

人骨が入った甕は竪穴住居(SB39)の床に倒置された状態で検出された。火葬骨の量は、重量にして約790gで、火葬骨の残存量としてはやや多い方である。火葬骨は、1層、1～2層、2層、床直上の4つに区分されて取り上げてあったが、1層と1～2層からの量が最も多く、2層、床直上の人骨はごく少量である。層によって人骨の種類が異なるようなことはなく、残存していたのはほとんどが四肢骨の細片である。

表1 人骨一覧 (Table 1. List of skeletons)

人骨番号	性別	年齢	備考
Y-1	不明	不明	第二頸椎含む。火葬骨
FE-1	男性	不明	大腿骨片(骨になって火葬)
FE-2	女性	不明	大腿骨片(骨になって火葬)

甕が検出された住居址は7世紀～8世紀頃に築造されたと推定されているが、火葬骨を納めていた甕は9世紀頃と推定されているので、本火葬骨は平安時代に属する火葬骨である。

本火葬骨を精査したところ、後述しているように3体分の人骨が入っていることが明らかになった(表1)。もっとも残存量が多いのは軟部組織が残っている状態で火葬された骨であるが、性別・年齢は不明である。その他に男女各1体の大腿骨片が存在した。この大腿骨片は骨になってから火を受け

* Takayuki MATSUSHITA

The Doigahama Site Anthropological Museum [土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム]

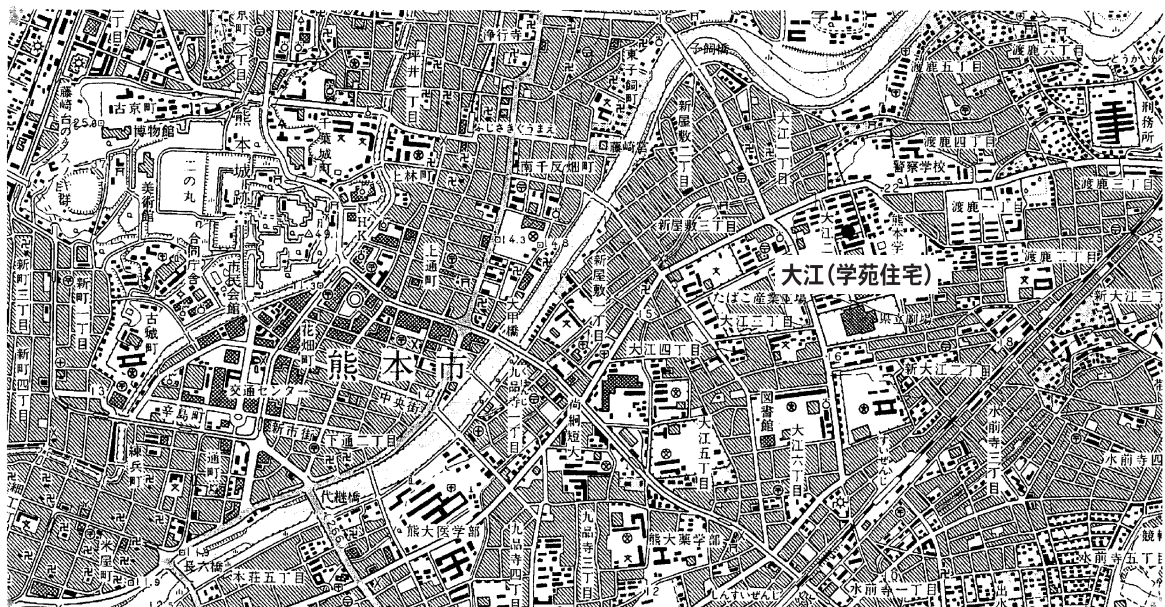
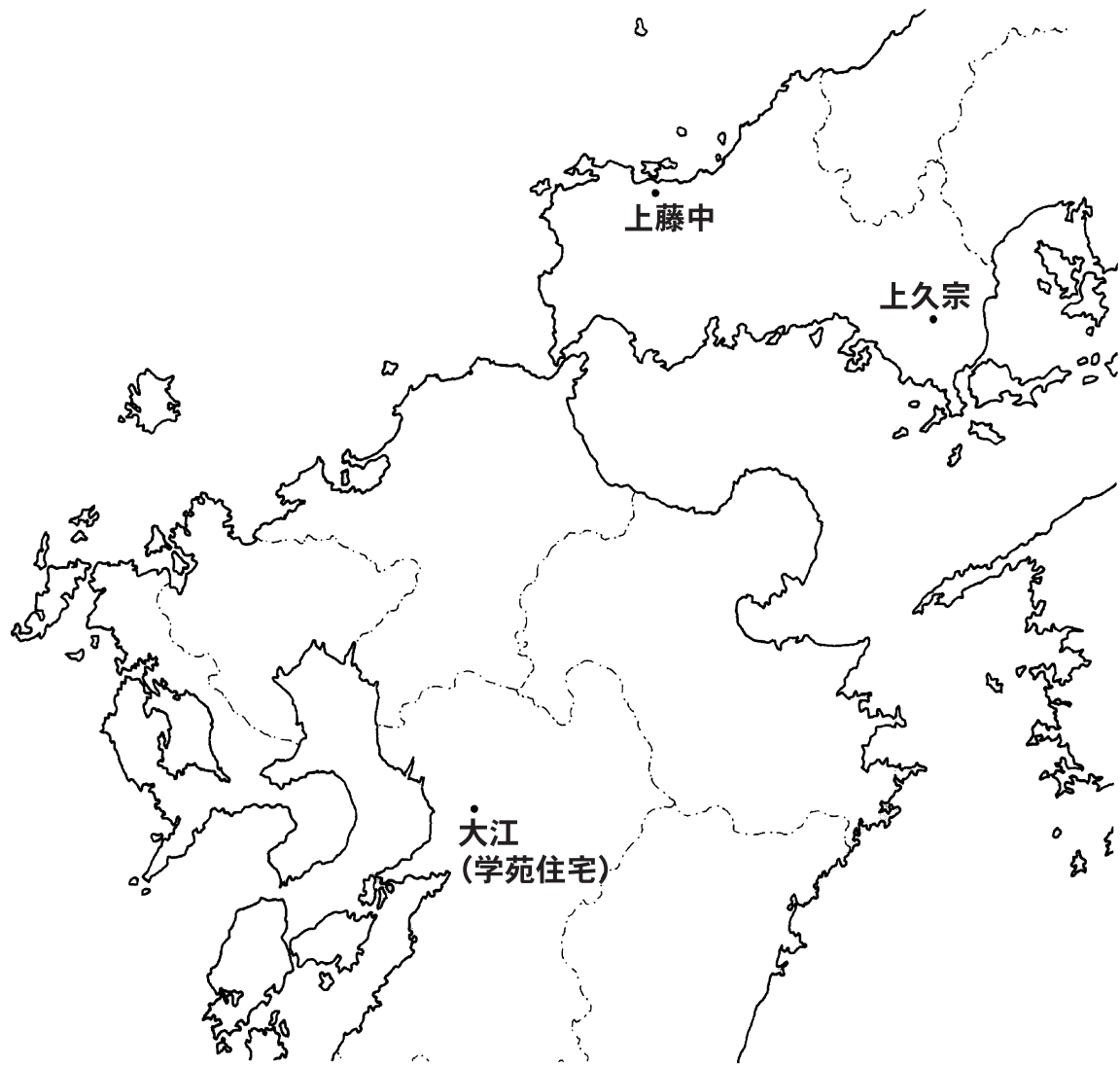


図1 遺跡の位置 (1/25000) (Fig.1 Location of the Oe (Gakuen) site,
Kumamoto City, Kumamoto Prefecture)

ていた。

次に各層ごとに火葬骨の残存状態を記しておきたい。

1層

大部分は四肢骨の細片である。その中に頭蓋片が存在したが、重量にしてわずか17gである。また、胸椎の肋骨突起1個(左側)、頸椎の棘突起1個を同定することができた。この骨片群の中に黒色を呈した大腿骨片が数片存在した。接合できるものがあったので、接合してみたところ、この大腿骨は骨壁が厚く、径も大きそうである(FE-1)。またこの人骨には火葬骨特有の亀裂や捻れが認められないので、骨になったあとに火を受けたようである。従って、この黒色大腿骨は、一連の灰白色の火葬骨とは別個体と思われる。

1～2層

四肢骨の細片が多い。第二頸椎(軸椎)の左側部を同定することができた。

2層

ごく少量の骨片のみである。

床直上

頭蓋片6片と大腿骨片1片である。この大腿骨片は薄茶色を呈しており、骨壁は薄く、亀裂や捻れは認められないので、これも骨になってから弱い火を受けたようである。骨壁が薄いので、1層で検出された黒色大腿骨とは別個体と考えられる(FE-2)。女性大腿骨の一部と推定した。

要約

熊本市大江2丁目2番39号にある大江(学苑住宅)遺跡群の発掘調査が2005年(平成17年)におこなわれ、甕から火葬骨が検出された。人骨の所見は次のとおりである。

1. 本火葬骨は重量にして約790gで、火葬骨の量としては多い方であるが、細片状になっており、同定できた骨は少ない。
2. 本火葬骨は平安時代(9世紀頃)に属する火葬骨である。
3. 人骨は1層、1～2層、2層、床直上の4つに区分されて取り上げてあった。大部分は四肢骨の細片ばかりで、頭蓋は1層と床直上で検出されたが、いずれも量は少なく、検出位置はあまり意味がない。また、歯も残存していない。
4. 大部分の人骨には火葬骨特有の亀裂や捻れが認められ、灰白色を呈していた。この灰白色の火葬骨は1体分の火葬骨(Y-1)と思われる。この人骨群の中には胸椎の肋骨突起1個(左側)、頸椎の棘突起1個が含まれていた。また、第二頸椎(軸椎)の一部も認められた。性別・年齢は不明である。
5. この中には骨になってから火を受けたと思われる2体分の大腿骨片が認められた。そのうちの1本(FE-1)は男性大腿骨で、もう1本(FE-2)は女性大腿骨の可能性が強い。
6. 今回検出された火葬骨群のなかには、明らかに色調と骨の性状が異なる3群の骨片が認められた。大部分は灰白色の火葬骨で、四肢骨と頭蓋の細片である。おそらく1体分(Y-1)であろうが、1体分まるまる甕に納められていたわけではなく、細片化された骨の一部にすぎない。その他に骨にな

ってから火を受けたと考えられる大腿骨片が2片認められた。1片は男性骨、もう1片は女性骨の可能性が高い。すなわち、本火葬骨群からは3体分の人骨が検出されたことになる。

6. 灰白色の火葬骨の中には第二頸椎の一部が残存していた。第二頸椎というのは俗に言う「のどぼとけ」のことで、現代では骨壺に最後に納める骨である。筆者はこの第二頸椎がいつ頃から意識的に埋納されるようになったかを追究してきた。これまでの調査では山口県周東町上久宗遺跡出土の例(松下、1995)が一番古く、時代は平安時代(10世紀)であった。本例は9世紀頃と推定されているので、意識的に埋納されていれば、本例が「のどぼとけ」を埋納した最も古い遺跡ということになる。

7. これまで多数の火葬骨を人類学研究の資料として研究してきたが、埋納された骨はほとんどが細片状態になったものが多く、原形を保った火葬骨はきわめて少ない。当時は火力も弱かったはずだから火葬して細片状態になったとは考えにくい。どう考えてみても甕などの蔵骨器に埋納する際に、原形を保たないほどの細片状態にしたようで、このように細片化することが当時の火葬骨の処理方法だった可能性があることを指摘しておきたい。

謝辞

《攔筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた熊本県教育委員会の皆様方に感謝いたします。》

《参考文献》

1. 松下孝幸・他、1983：山口県防府市玉祖遺跡出土の平安・中世人骨。玉祖遺跡・西小路遺跡（山口県埋蔵文化財調査報告70）：147-148.
2. 松下孝幸・他、1983：山口県萩市見島ジーコンボ古墳群出土の平安時代人骨。見島ジーコンボ古墳群（山口県埋蔵文化財調査報告73）：32-36.
3. 松下孝幸・他、1984：防府市周防国府跡出土の平安時代人骨。防府市文化財調査年報VI：535-544.
4. 松下孝幸、1985：山口県見島ジーコンボ古墳群出土の人骨－山口大学埋蔵文化財資料館所蔵の資料－。山口大学構内遺跡調査研究年報IV：83-90.
5. 松下孝幸、1995：山口県周東町上久宗遺跡出土の火葬骨。山口県埋蔵文化財調査報告第174集：25-30.
6. 松下孝幸、1999：長門市上藤中横穴出土の奈良時代火葬骨。上藤中横穴墓群（長門市埋蔵文化財調査報告第3集）：15-18.



大江(学苑住宅)遺跡群出土火葬骨

第IV章 総括

今回の調査は、約2ヵ月半という短期間で1,200㎡以上の範囲を調査するという非常にあわただしいものになったが、竪穴式住居跡21軒のほか、道路跡や溝、土坑など多数発見され、一定の成果を挙げる事ができた。大江遺跡群は6世紀後半から9世紀にかけて集落が営まれ、特に8世紀半ばには、託麻郡に国府がおかれて、最も隆盛したと言われているが、今回の調査でもそれを裏付ける遺構の発見があった。

今回の調査区は東西に横長になっている。調査区中央を南北に走る道路遺構(SX-23)を境に、東西で住居跡の特徴に違いがみられた。西側の住居跡は切り合いがなく、それぞれ一辺が4m以上で6m以上の大型の住居跡も検出された。一方、東側住居跡群は切り合いが多く、また密集していて一辺が4m以下の小型の住居跡がほとんどであった。遺物も西側住居跡では6世紀から7世紀にかけての遺物が多く、東側住居跡群では7世紀から8世紀にかけての遺物が多かった。

調査区中央部のSX-23は、切り通しの工法で造成されており、その幅は約4m以上である。そのうち東側のみにあった塀(SX-40)と考えられる柱列の幅は約2m、硬化面がしっかりと残っていた実際の路幅と考えられる部分も同じく幅約2mであった。大江遺跡群での駅路やそれに準じるクラスの道路と比較すると小規模であるが、塀の造りや路床面の造りなどの丁寧な構造、また確認できただけでもその後2回にわたって補修や造り替え(SX-6、SX-17)が行われていたことから官道の可能性が高いと思われる。今回の調査区の西側はちょうど託麻国府に至る西海道駅路が南北に推定されている。今回発見された道路の向きなどから、ちょうど白川の手前で駅路につながるのではないかと考えられる。構築時期については、SX-23に切られた住居跡(SB-30)の竈より見つかった炭化米の年代測定結果が6世紀半ばから7世紀半ばであったこと(炭化材の年代測定結果については、土壤に含まれていたものと思われ、竈の年代とは考えていない。)、またSB-30より出土した遺物が6世紀後半から7世紀前半の特徴を示していたことなどより、7世紀半ば以降に構築されたものと考えられる。SX-40の埋土より8世紀ごろの土器が検出され、SX-6やSX-17から検出された土器も8世紀ごろを示していることから、9世紀には廃棄されていたと思われる。

調査区東側で発見された溝状遺構(SD-1)も元々は道路として造られたと考えられる。南北方向に切り通し状に造られている。深いところは1.5m以上で南に向かってゆるく傾斜している。最下層で硬くしまった硬化面があり、その上層でも硬化面が確認できた。構築された時期は、東側住居跡群を切って造られているため、この調査区の中で一番新しく、8世紀以降と考えられる。埋土の下層からは緑釉陶器片が出土し、中世以降、時間をかけて埋まっていったと考えられる。

SB-39より検出された甕とその中に入っていた人骨は、この住居跡に伴うものではないと思われる。甕は、9世紀代の土師器甕の特徴をもっており、住居跡が6～7世紀にかけてということから、最低でも約200年の開きがある。人骨は、3体分検出

され、火葬骨が含まれていた。「のどぼとけ」を埋納した最も古い例になるということである。

今回の調査で、大江遺跡群について数多くの情報を得ることができた。また今回検出された官道の全体像についても、今後、周辺の調査との比較で、より明らかになってくるだろう。今回の調査結果が、大江遺跡群の新たなデータとして蓄積、活用されることを願ってやまない。

《参考文献》

- 1 田添夏喜『大江青葉遺跡』熊本商科大学附属高等学校大江青葉遺跡調査団 1980年
- 2 田添夏喜『大江東原遺跡－九州郵政局レクリエーションセンター遺跡調査報告書－』
郵政省九州郵政局1986年
- 3 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ 1966年
- 4 松本健郎『生産遺跡基本調査報告書Ⅱ』熊本県文化財調査報告第48集 熊本県教育委員会 1980年
- 5 木村元浩『大江遺跡群』熊本県文化財調査報告第211集 熊本県教育委員会 2002年
- 6 赤星雄一『大江遺跡群Ⅲ』熊本市教育委員会 1997年
- 7 原田範昭『大江遺跡群Ⅳ』熊本市教育委員会 2002年
- 8 赤星雄一『大江遺跡群Ⅴ』熊本市教育委員会 2004年
- 9 網田龍生「大江遺跡群第11次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成15年度－』
熊本市教育委員会 2004年
- 10 西住欣一郎『東鶴遺跡』熊本県文化財調査報告第222集 熊本県教育委員会 2004年
- 11 網田龍生「第8章 古代宇城地域の遺跡の諸相」『新宇土市史－通史編第1巻自然・原始古代』
宇土市史編纂委員会 2003年

写 真 图 版



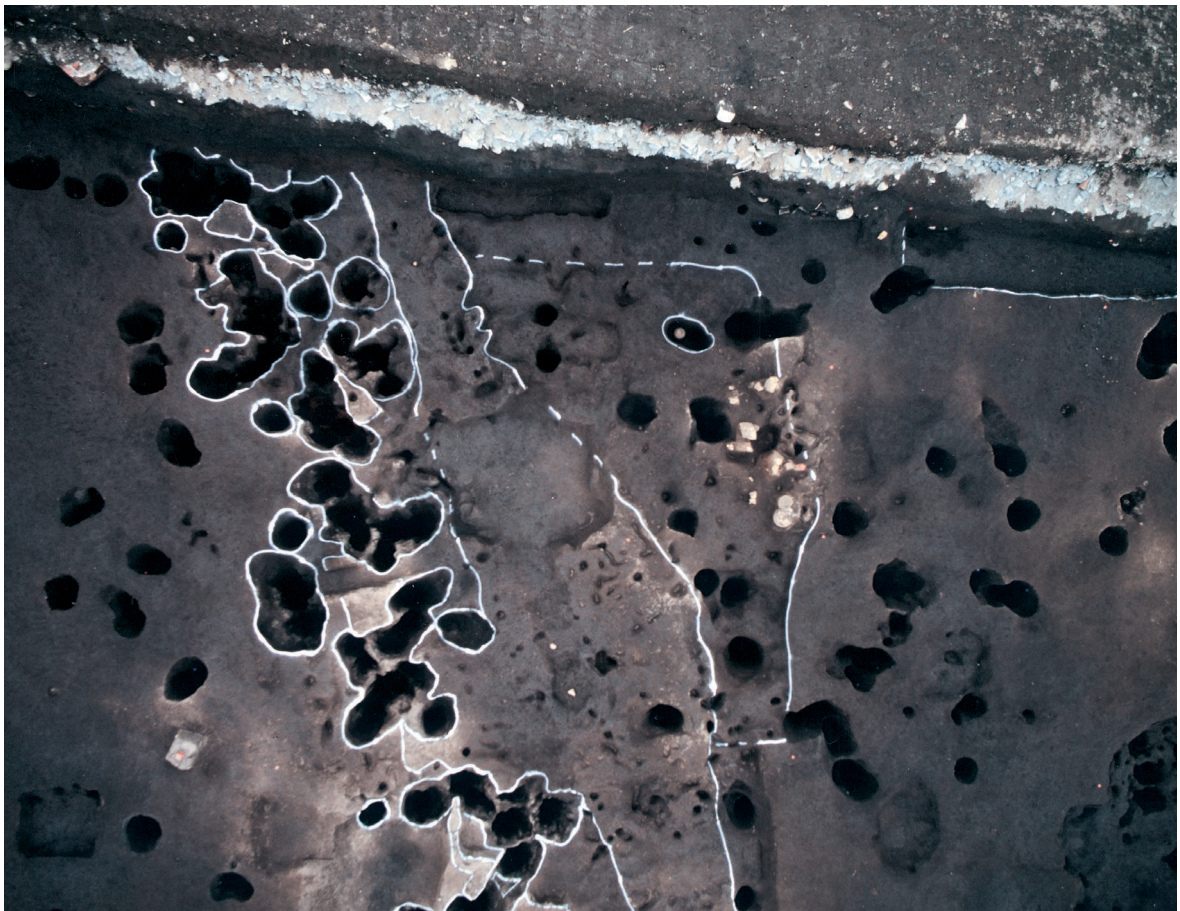
図版1 調査区遠景



図版2 調査区全景



図版3 調査区東側住居群



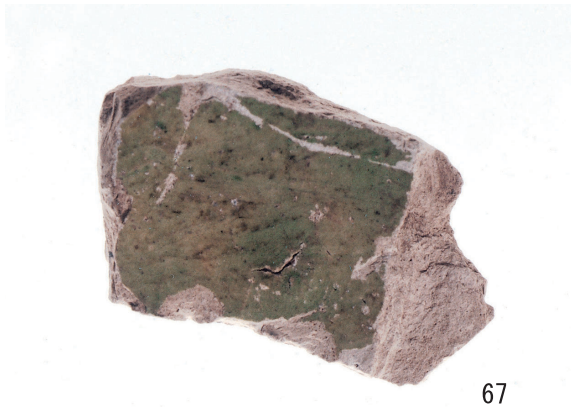
図版4 官道



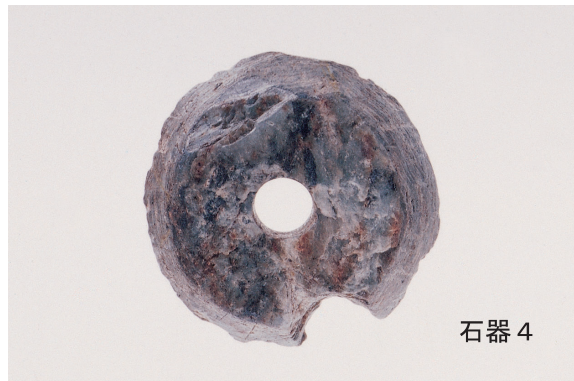
図版5 火葬骨の入っていた甕



図版6 墨書土器「二」



図版7 緑釉陶器片



図版8 石製紡錘車



図版9 墨書土器「在」or「存」



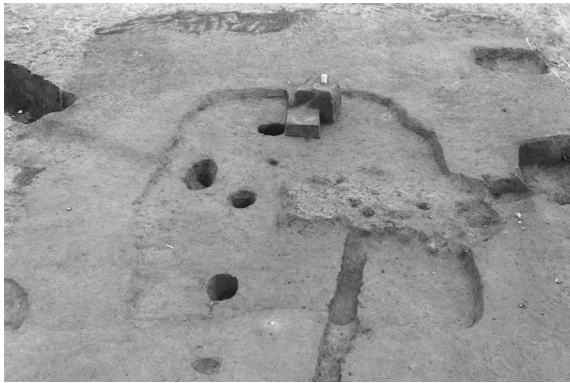
図版10 丹塗りの壺



図版11 SB-3 (北から)



図版12 SB-3 遺物出土状況



図版13 SB-7、10 (東から)



図版14 SB-8 (東から)



図版15 SB-9 (南から)



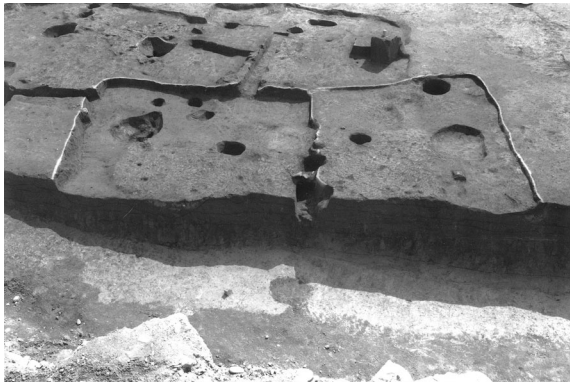
図版16 SB-11 (西から)



図版17 SB-12 (北から)



図版18 SB-12 遺物出土状況



図版19 SB-13, 22 (北から)



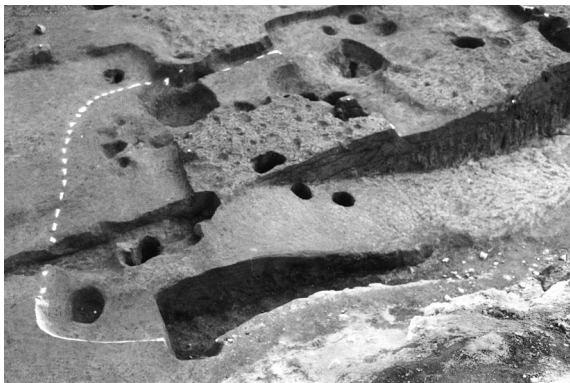
図版20 SB-16 (西から)



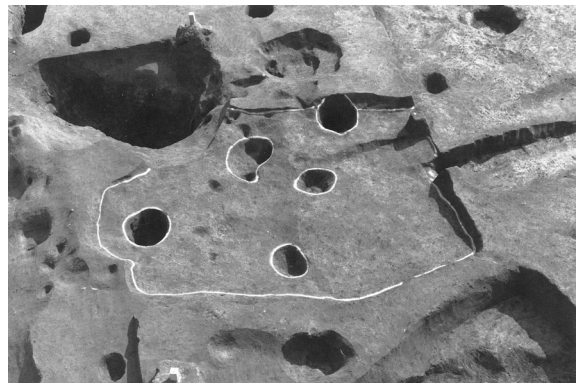
図版21 SB-18, 19, 27 (東から)



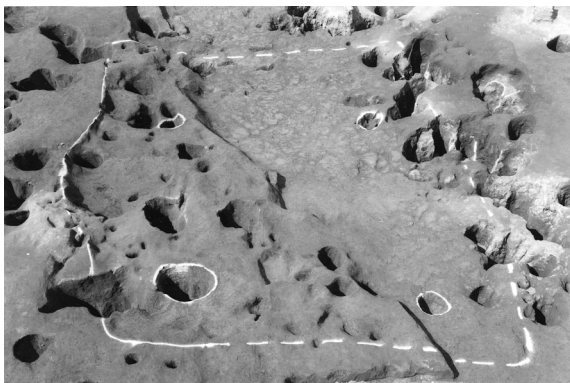
図版22 SB-21 (南から)



図版23 SB-28 (北から)



図版24 SB-29 (北から)



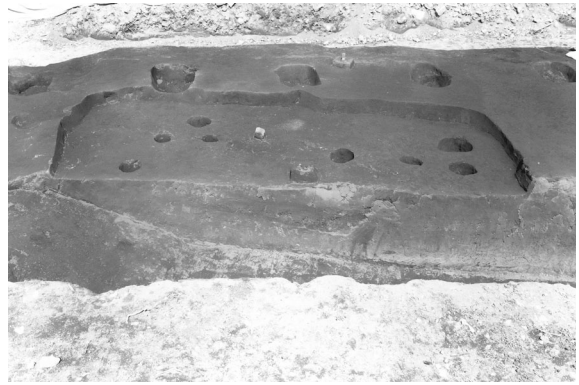
図版25 SB-30 (南から)



図版26 SB-30 柱穴内遺物出土状況
(掲載番号27)



図版27 SB-30 竈



図版28 SB-32 (南から)



図版29 SB-36 (北から)



図版30 SB-36 竈



図版31 SB-36 遺物出土状況



図版32 SB-38 (南から)



図版33 SB-39 (西から)



図版34 SB-39 甕出土状況



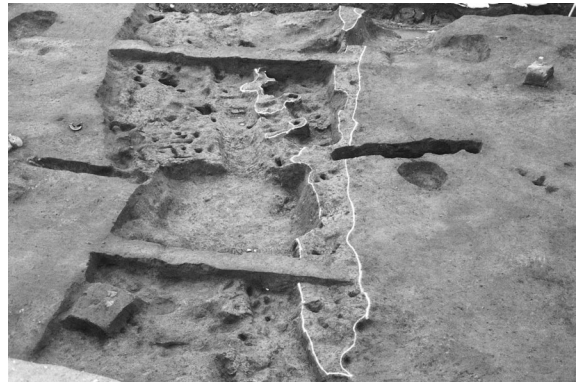
図版35 SD-1 (南から)



図版36 SX-2 (東から)



図版37 SX-6 (南から)



図版38 SX-17 (南から)



図版39 SX-23 (南から)



図版40 SX-40 (東から)



図版41 官道検出状況 (北から)



図版42 SD-34 (東から)



図版43 SD-37 (西から)



図版44 SK-9 (北から)



図版45 SK-20 (南から)



図版46 SK-24 (東から)



図版47 SK-25 (東から)



図版48 SK-26 (北から)



図版49 SK-31 (北から)



図版50 SK-33 (北から)



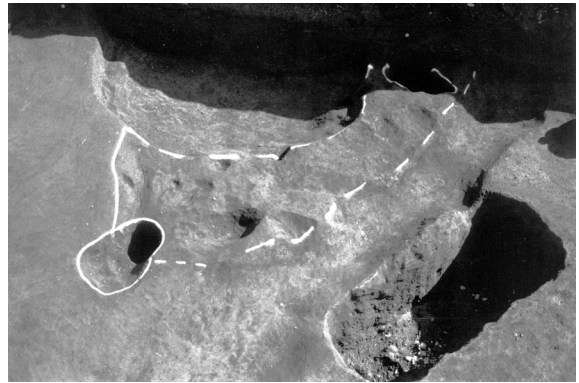
図版51 SK-35 (南から)



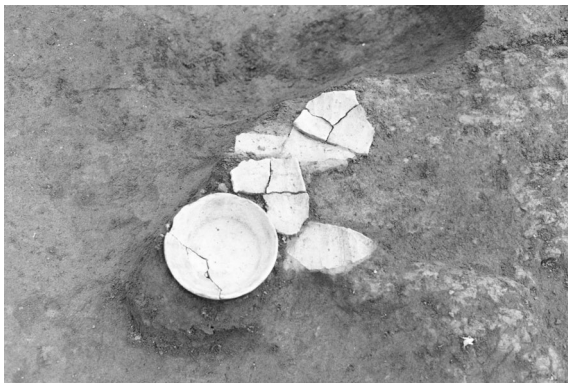
図版52 SK-41 (東から)



図版53 SK-42 (南から)



図版54 SX-5 (北から)



図版55 SX-5 遺物出土状況



図版56 SX-15 (南から)



図版57 レンガ壁基礎 (西から)



図版58 コンクリート製排水構 (東から)



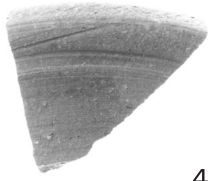
1



3



2



4



5



6



7



8



9



10

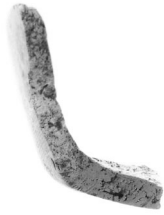


11

图版59 出土土器(1)



12



12(断面)



13



14



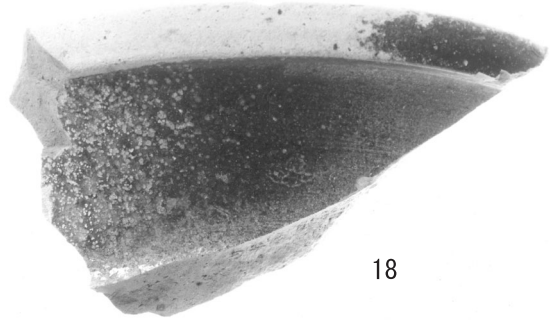
15



16



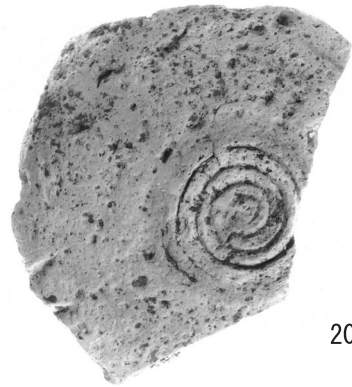
17



18



19



20(俯瞰)



21



20

图版60 出土土器(2)



22



23



25



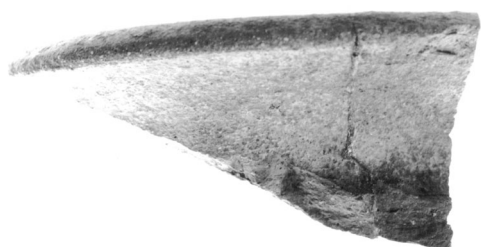
24



26



28



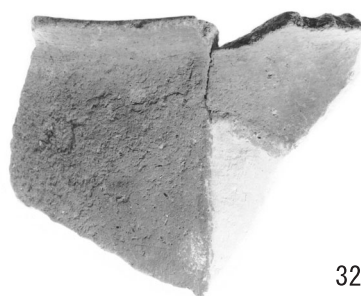
29



30

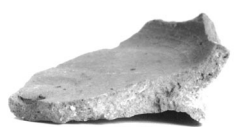


31



32

图版61 出土土器(3)



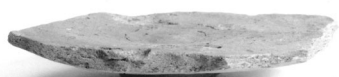
34



35



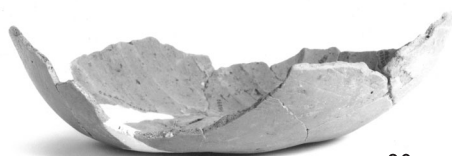
36



37



38



39



40



41



42



43

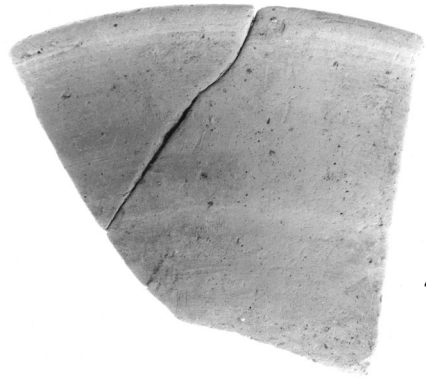


44

图版62 出土土器(4)



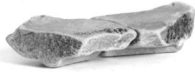
45



46



47



50



48



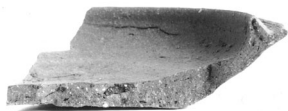
52



53



54



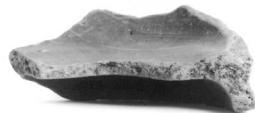
55



57



56



57(断面)

图版63 出土土器(5)



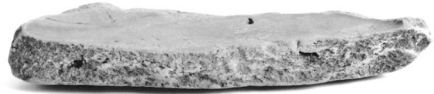
58



59



58(断面)



59(断面)



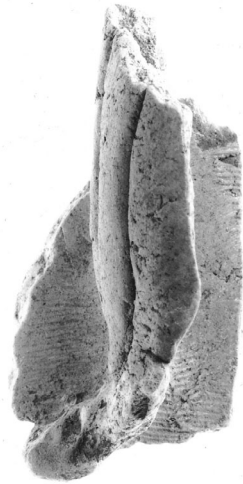
60



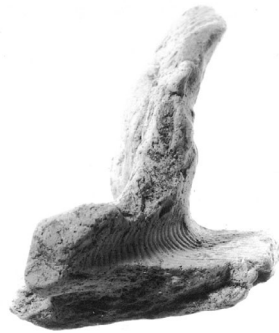
61



62



64



64(断面)

图版64 出土土器(6)



63



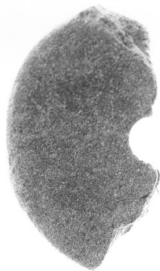
65



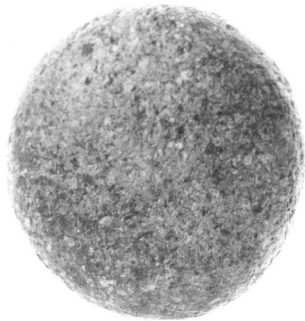
63(断面)



66



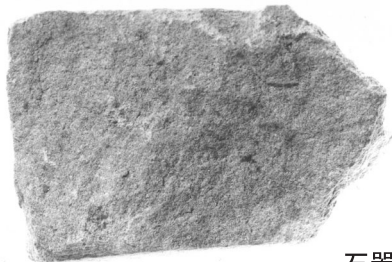
石器 1



石器 2



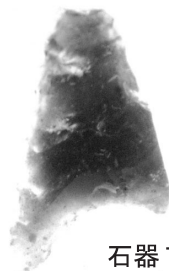
石器 3



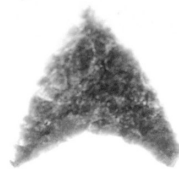
石器 5



石器 6

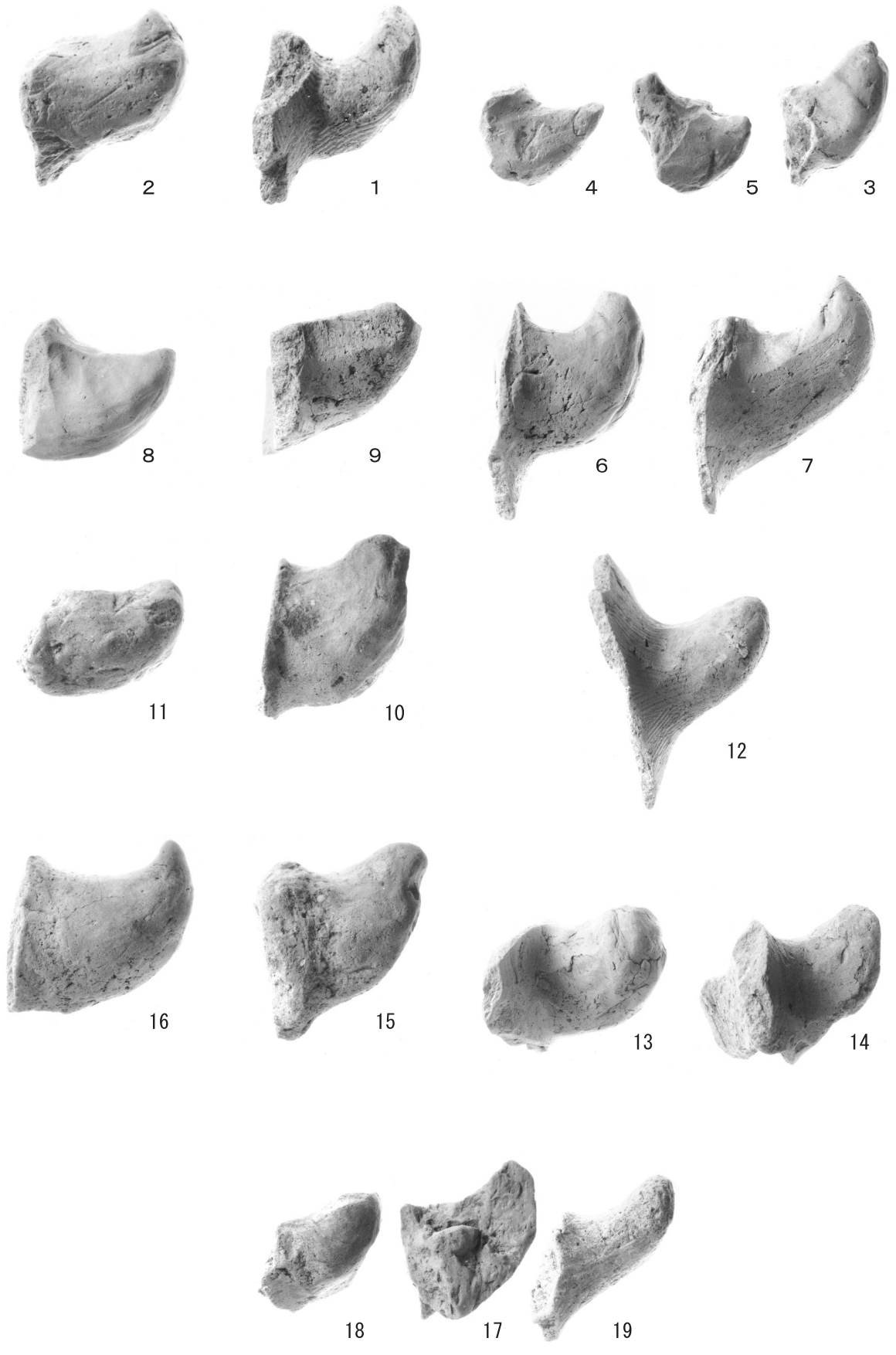


石器 7



石器 8

图版65 出土土器·石器

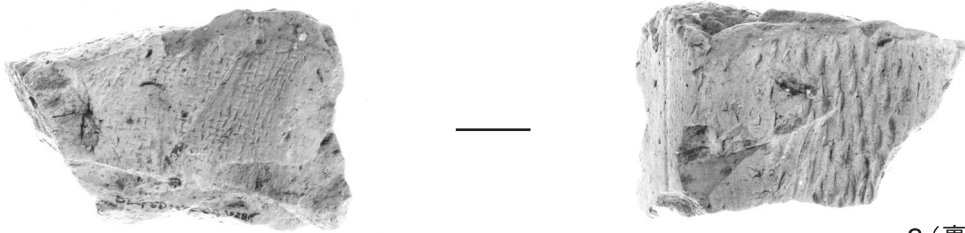


图版66 出土甑把手



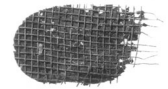
1

1(裏)



2

2(裏)



图版67 出土瓦・戦争遺物

付論 「熊本の戦争遺跡」

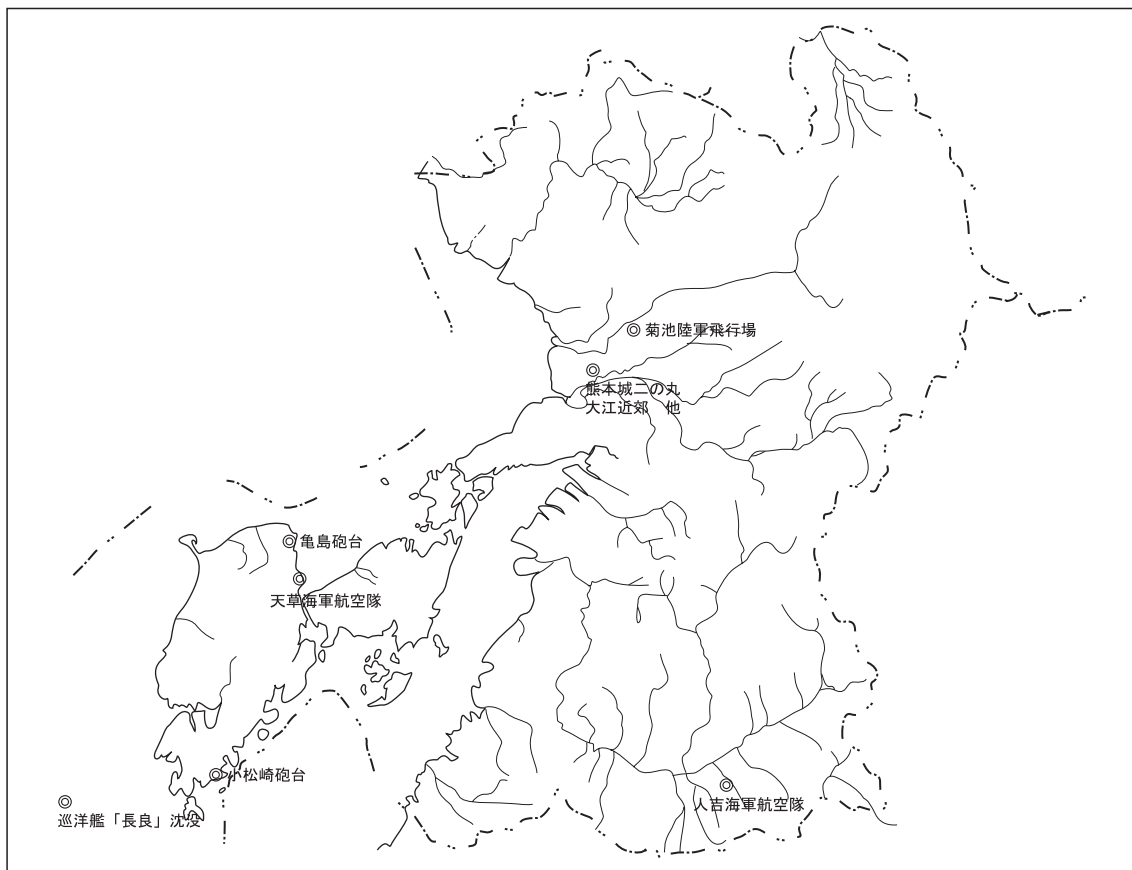
1 戦争遺跡について

戦跡遺跡は多岐に亘るものであるが、ここでは取り扱う戦争遺跡は、現在の熊本県に於いて、その遺跡として痕跡を残しているものを取り上げた。戦争遺跡は形成要因に分類すると、軍事施設のような能動的遺跡と空襲・戦災の跡のような受動的遺跡に大別される、との定義がある。また、その内容・性格から以下のように区分される。

- ① 政治・行政関係（中央官衙・地方官衙・病院・学校・研究所など）
- ② 軍事・防衛関係（要塞・陣地・飛行場・演習場・連兵場・通信所・軍港・壕・試射場・監視哨など）
- ③ 生産関係（造兵廠・軍需工場・経済統制を受けた工場、地下工場など）
- ④ 戦闘地・戦場関係（戦闘がおこなわれた地域・空襲被災地・被爆地など）
- ⑤ 居住地関係（外国人強制連行労働者居住地・防空壕・捕虜収容所など）
- ⑥ 埋葬関係（陸海軍墓地・捕虜墓地・忠魂碑など）
- ⑦ 交通関係（軍用鉄道軌道・軍用道路など）
- ⑧ その他（航空機の墜落跡・奉安殿・学童疎開所・慰安所など）

（しらべる戦争遺跡の事典 十菱駿武・菊池 実 2002）

県下を以上の観点から網羅することは本報告書の趣旨と異なるため、ここでは大江遺跡群（学苑住宅）の調査で検出された歩兵第13聯隊跡を中心として主な遺跡を取り上げ、将来、これらの課題については具体的な戦争遺跡調査への布石と考えたい。尚、この付論については山下が編集し、柿本 慈（嘱託職員）の協力を得た。



付論で取り上げた熊本県の戦争遺跡

1 陸 軍

(1) 大江近郊の軍事施設

熊本市大江は明治中期頃から軍事施設が移転・設立され、この一帯は 地方官衙 となる。昭和23年撮影の空中写真から、その概要が読み取れる。

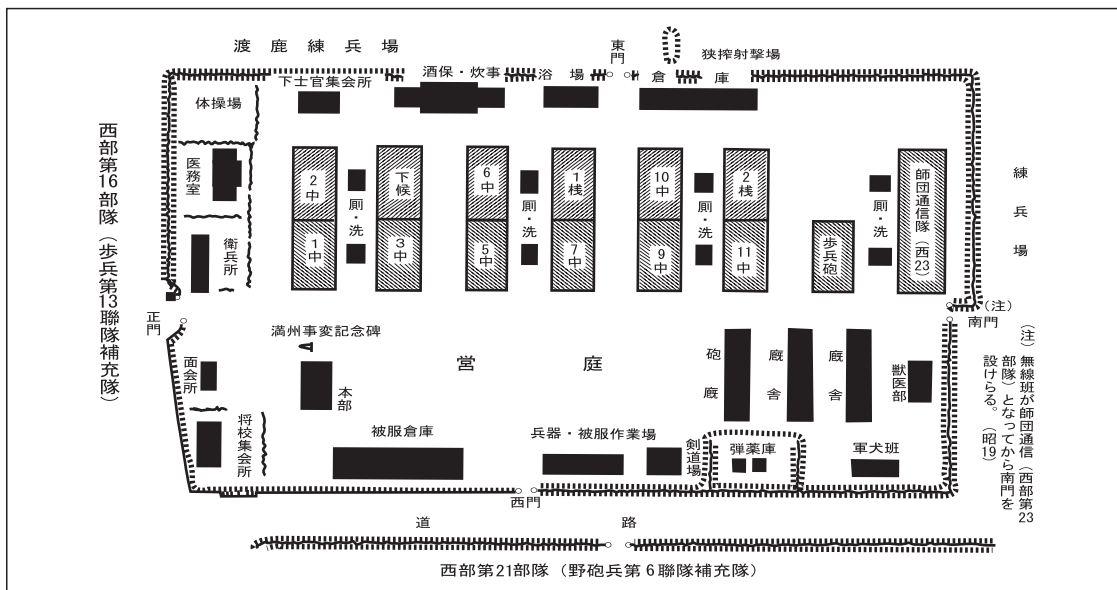


撮影日 昭和23年10月7日 日地セク証170921018号

①歩兵第13聯隊補充隊

部隊史

明治8年（1875）城内二の丸跡に創設 大正14年（1925）歩兵23聯隊が都城に移動後、渡鹿舎に移動 昭和12年（1937）出征 以後、随時出征 西部16部隊 20年（1945）2月 西部61部隊 昭和20年（1945）8月 ブーゲンビル島に於いて軍旗奉焼（増田民男氏教示）



兵舎見取図（森田正則・増田民男氏提供）



酒保・炊事場跡（現・熊本学園大学第2体育館）



正門跡

②工兵第6聯隊

部隊史

明治8年（1875）工兵隊として発足 熊本市千葉町 明治22年（1889）大江に移駐 昭和11年（1936）工兵第6聯隊と改称 留守部隊 西部22部隊 昭和20年（1945）2月 西部65部隊と改称

（増田民男氏教示・熊本県大百科事典より）

③騎兵第6聯隊

部隊史

明治21年（1888）熊本市山崎町に第1中隊を創設 明治28年（1895）騎兵第6聯隊編成 明治32～34年（1898）大江に移駐 昭和12年（1937）出征 昭和15年（1940）7月 留守部隊 通称名を西部19部隊と称す 昭和20年（1945）8月31日 ブーゲンビル島ツルタイに於いて軍旗奉焼

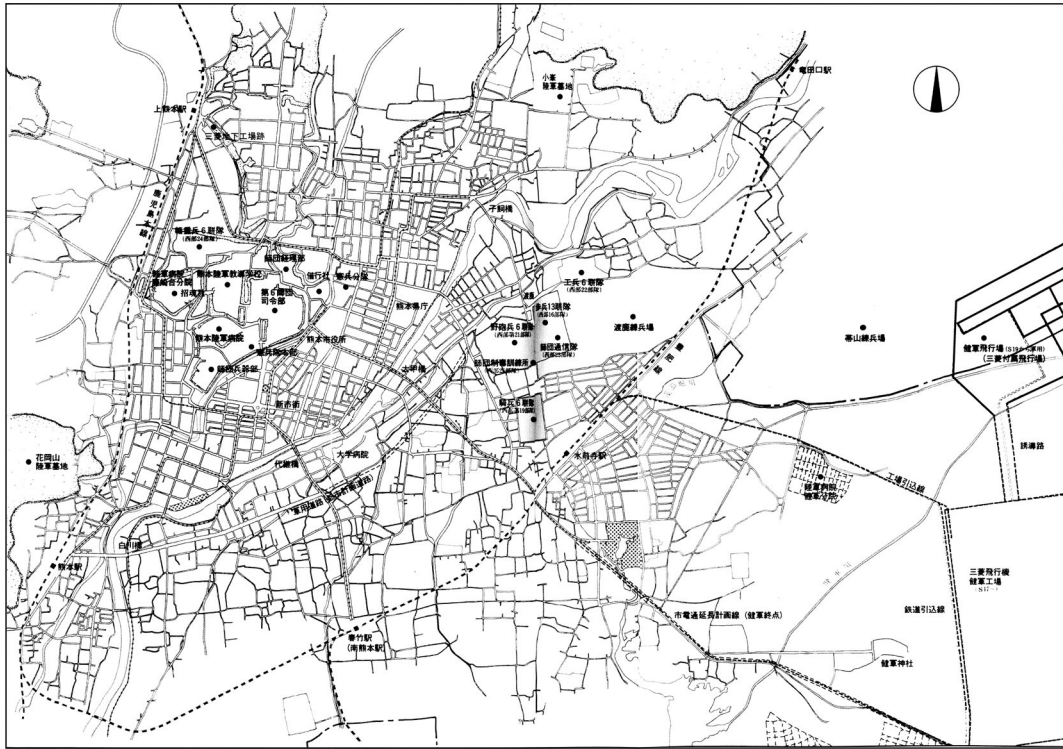
（騎兵第6連隊 碑文・熊本県大百科事典より）

④野砲兵第6聯隊

部隊史

明治7年（1874）熊本城内備前前屋敷に設けられた熊本鎮台包隊を母体 明治17年（1884）砲兵第6連隊として創立 明治22年（1884）野戦砲兵第6聯隊と改称 明治32年（1899）大江に移駐 明治40年（1898）野砲兵第6聯隊 昭和12年（1937）以後外征

（野砲兵第6聯隊 碑文・熊本県大百科事典より）



1940年以降の軍施設分布
 (子どもと歩く戦争遺跡 熊本編 I 熊本の戦争遺跡研究会 2005)

(2) 飛行場

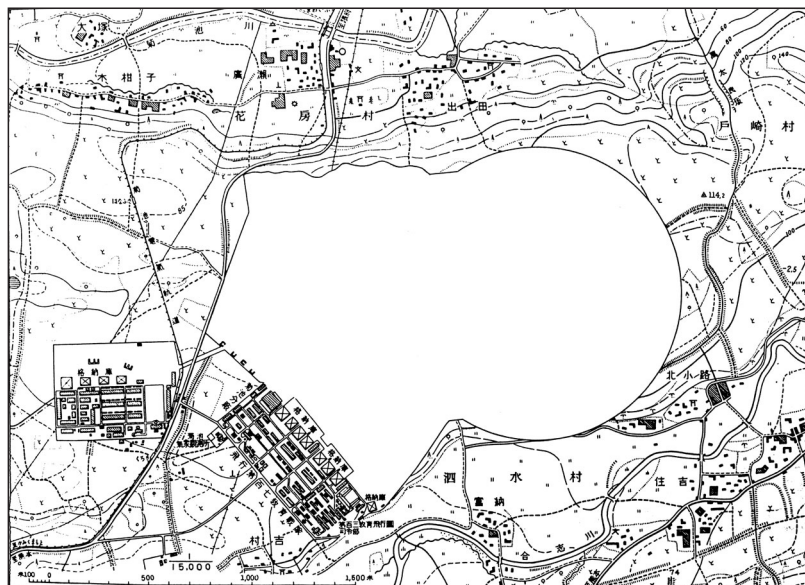
① 菊池陸軍飛行場

熊本県菊池郡花房村

駐留飛行隊

太刀洗陸軍航空支廠菊池分廠・太刀洗陸軍飛行学校菊池分教場・第3航空教育隊西部第99部隊・菊池陸軍病院第1飛行集団・第106教育飛行連隊西部第108部隊・第103教育飛行連隊西部第114部隊・西部軍直協飛行隊西部第127部隊・陸軍航空通信学校菊池教育隊・第55飛行場中隊 第229飛行場大隊・第107教育飛行連隊西部第110部隊

(倉沢 泰氏 提供資料)



菊池陸軍飛行場 32° 56 : 0N 130° 47 : 5E (資料 防衛庁防衛研究所図書館)

菊池飛行場跡



撮影日 昭和22年3月4日 日地セク証170921019号



慰霊塔



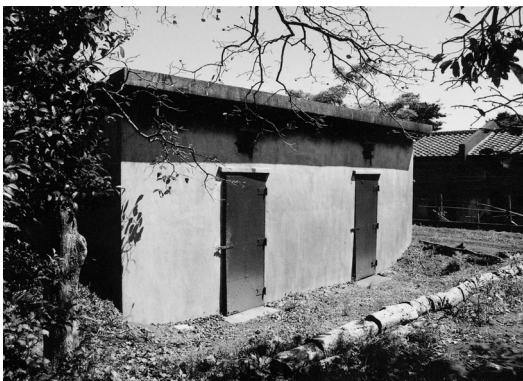
陸軍航空通信学校跡



彈藥庫跡



格納庫跡



油倉庫跡



木造格納庫跡



部隊宮門跡



高架水槽



開隊記念碑

陸軍は熊本県下に飛行場を所有していたが、防衛庁防衛研究所図書館での検索資料では以下のようなものである。他に玉名市などに存在が確認されるが、詳細については次回にその機会を譲りたい。

飛行場

九州（山口縣）ヲ含ム地區飛行場要覽 昭和20年8月現在

	菊池	熊本	黒石原	隈之庄	八代
地形気象		夏季霧多シ		夏季朝霧発生	
掩体	中 30	大 50		大 42 小 4	ナシ
通信保安	有線施設完備	通信完備	ナシ	通信完備	ナシ
宿営施設	三角兵舎ナシ	950名	150名	600名	ナシ
土質		火山灰質		黒色火山質	
地盤			概ネ良 排水良好		

(資料 防衛庁防衛研究所図書館)

3 海 軍

(1) 飛行場

①人吉海軍航空隊

(部隊史)

人吉海軍航空隊（整備）熊本県球磨郡木上村

昭和19年2月1日 開隊、練習航空隊に指定され、第18連合航空隊に編入、整備教育を担当。出水分遣隊を置く。8月15日 出水分遣隊独立、第2出水空となる。昭和20年3月1日 第22連合航空隊に編入 7月10日 解隊 司令・海軍大佐 田中千春（機31期）

(わが海軍 ノーベル書房編集部 1981 より)

人吉海軍航空隊跡



中央の直線が滑走路跡(?)

撮影日 昭和22年2月24日 日地セク証170926004号



人吉海軍航空隊隊門跡

② 天草海軍航空隊

(部隊略史)

天草海軍航空隊（水練・水偵）熊本県天草郡佐伊津村
 昭和19年3月15日 博多海軍航空隊天草分遣隊として熊本県
 天草郡佐伊津村に開隊、水上機操縦教育を担当。昭和20年5
 月5日 練習航空隊の指定を解除、第5航空艦隊第12航空戦
 隊に編入され、水上機特攻隊の発進基地となる

5月24日 第1次攻撃隊発進、零観2機突入、3名戦死 6月
 21日 第2次攻撃隊沖縄に発進、零観6機突入、13名戦死 8
 月15日 8月18日、残存全機出撃予定のところ終戦となる。

司令・海軍大佐 室田勇次郎（海兵50期）

（参考『天空』第16号 1994 より）

（わが海軍 ノーベル書房編集部 1981 より）

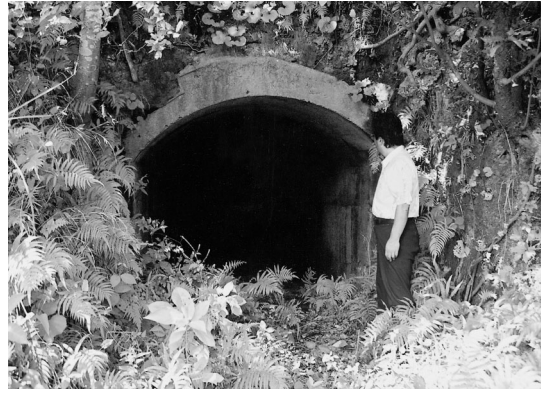
天草海軍航空隊（撮影日不明）



（わが海軍 ノーベル書房編集部 1981 より）



天草海軍航空隊スロープ(?)跡



地下壕跡

他に特攻基地として天草市牛深町茂串に「第三特攻戦隊川棚一〇六震洋・納谷部隊」が開隊している。震洋艇という小型船舶は、大戦末期の水上特攻兵器であった。部隊は特攻待機中、終戦を迎え解隊となる。

(2) 戦闘地

巡洋艦「長良」沈没

巡洋艦「長良」は、竣工 大正11年(1922)・基準排水量 5,170トン・全長・全幅 162.15×14.2m・戦没・喪失 昭和19年(1944)8月7日。

日中戦争では広東上陸作戦・海南島上陸作戦などを支援。ミッドウェー作戦には第10戦隊の旗艦として参加。その後、ソロモン海域に転進。昭和19年6月からは陸戦部隊の沖縄輸送に当たり、鹿児島港から佐世保に向かう途中、天草沖にて米潜水艦「クローカー」の魚雷攻撃を受け沈没した。348名が艦と共にしたが、135名は近海を操業中の漁民等によって救出された。

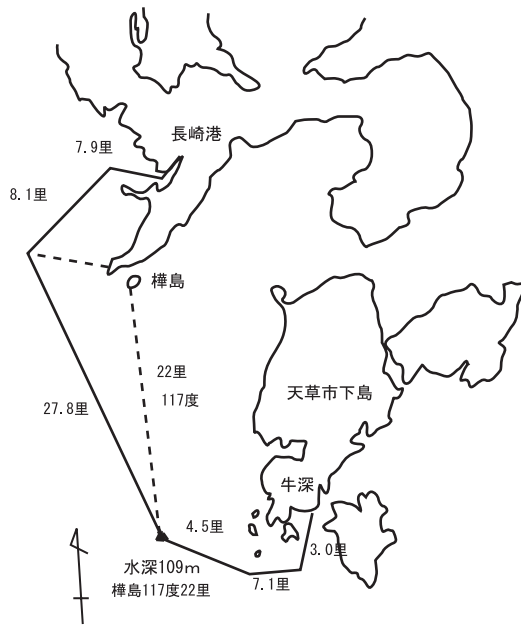
(日本海軍軍艦総覧 新人物往来社 1997)

(昭和19年8月7日おける牛深沖の状況 山下義満 2001)

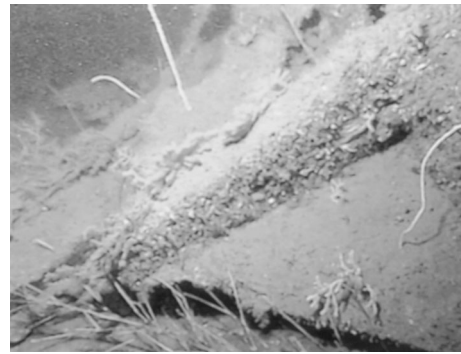


巡洋艦「長良」沈没時
提供：米潜水艦「クローカー」ジョン・E・リー元艦長
(長良記念館)

「長良」 合同慰霊祭より (1977)



(巡洋艦「長良」沈没地点)



(水中ビデオカメラによる撮影 1997年8月4日)

軍艦長良資料館並びに徴用船慰霊碑建立発起人委員会提供

ここで「長良」沈没時に救助にあたった牛深漁民の証言を加えてみる。()は標準語・< >は主語などを補足した。

<その時は>鰹縄(鰹延縄漁)ばフキ(曳く=操業する)よったちやがや。コン沖ン瀬でな。「長良」とは200mくらいしかアラカット(距離が開いている)らんもん。魚雷も見とったと。「シュー。」ってな。6本目に「ウーン。」っていたとな。あん太か(大きい)船がな、真ン中の煙突の所から、「グワーン。」って折れたとぞ。箸ば折ったごとしてな。水柱ン二十間(約36.4m)位、上がったとぞ。アヨー(嗚呼)。助かった衆(長良乗組員)ば25人、引っ張って連れて来たちやがや。<海上は>油に浮かってしもてな。脇に泳どらい衆ば助けたちやがや。

オッコイ(嗚呼)、「ウーン。」ていうて、<長良が沈む時にできる巨大な>渦も鳴門の渦ンごと太か(大きい)ったとぞ。シモッテ(沈んで)から、<海の上は>真っ黒やったもん。

(竹井 利幸氏 S.3年生 収録 平成9年1月26日)

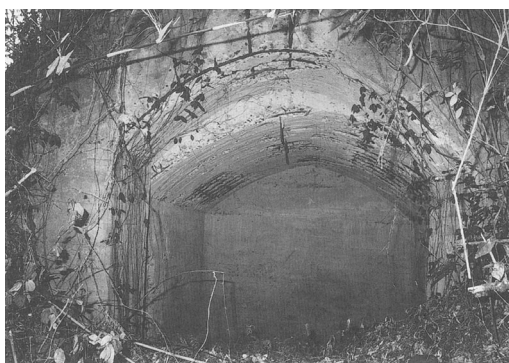
4 防衛施設

砲台

(1) 亀島砲台跡

天草郡五和町御領亀島 昭和20年4月～5月頃

安年式軍装手動20cm砲 2台・25mm 機関砲・地雷などを敷設 (五和町史資料編(その三)火筒の響 1995)



亀島砲台跡 掩体壕
(平成6年12月5日撮影)



亀島砲台跡 砲座
(平成6年12月5日撮影)

(2) 小松崎砲台跡

牛深市久玉町小松崎 昭和20年4月～5月頃(?)

15cm砲 1台

(熊本県の近代化遺産 1999)

(天草市立本渡歴史民俗資料館提供)



(提供 天草市立本渡歴史民俗資料館)

引用・参考文献

- しらべる戦争遺跡の事典 十菱駿武・菊池 実 2002
歩兵13聯隊略史 森田正則 1996
子どもと歩く戦争遺跡 熊本編Ⅰ 熊本戦争遺跡研究会 2005
『翔』 ユングマンそして愛 太刀黒石原会 1993
わが海軍 ノーベル書房編集部 1981
『天空』第16号 1994
消えない傷跡 一〇六震洋・納谷部隊史 1990
日本海軍軍艦総覧 新人物往来社 1997
昭和19年8月7日おける牛深沖の状況 山下義満 2001
戦史の証言者たち 一牛深に於ける戦時下の記録一 山下義満 1999
五和町史 2002 五和町史編纂委員会
熊本県の近代化遺産 熊本県文化財調査報告書 第182集 1999

協力者

防衛庁防衛研究所図書館 熊本城顕彰会 天草市立本渡歴史民俗資料館 天草市教育委員五和分室 (旧五和町教育委員会)
天草市社会福祉協議会牛深支所・長良記念館 熊本学園大学
森田正則 増田民男 福田壽美子 宮家京子 本多康二 筒井信次 戸谷牧王 立志悟郎 福井一基 広田静樹
倉沢 泰 竹井利幸 荒木純治 高谷和生 岡本真也

報告書抄録

ふりがな	おおえいせきぐん							
書名	大江遺跡群Ⅱ							
副書名	国家公務員合同宿舎（学苑住宅）新築工事に伴う大江遺跡群の埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	熊本県文化財調査報告							
シリーズ番号	第231集							
編著者名	松村洋史							
編集機関	熊本県教育委員会							
所在地	〒862-8609 熊本県水前寺6丁目18番1号							
発行年月日	西暦2005年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおえいせきぐん 大江遺跡群	くまもとしおおえ 熊本市大江	43201	283	32度 48分 19秒	130度 43分 41秒	20050107 ～ 20050325	約 1,220 m ²	住宅新築
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
大江遺跡群	包蔵地	古代	竪穴住居跡 土坑、溝 道路	土師器、須恵器 など				

熊本県埋蔵文化財調査報告 第 231 集

大江遺跡群 II

— 国家公務員合同宿舎（学苑住宅）新築工事に伴う

大江遺跡群の埋蔵文化財発掘調査報告 —

発行年月日 平成 18 年 3 月 31 日

編集・発行 熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市水前寺 6 丁目 18 番 1 号

096 (333) 2707

印刷 株式会社 啓文社

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 231 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名： 大江遺跡群

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL： <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2015 年 12 月 8 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL： <http://www.kumamoto-bunho.jp/>